川柳塔

昭和二年五月一日第三種郵便物認可
創刊大正十三年　通巻八七六号

No. 876

五月号

白川協加盟

予告

第六回 川柳塔まつり

平成12年9月24日（日）

於 ホテル・アウィーナ大阪

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会（句会）の誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個　人　一口　二、〇〇〇円
（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団　体　次の四種といたします。
①1/3頁　六、〇〇〇円　③2/3頁　一二、〇〇〇円
②半頁　九、〇〇〇円　④一頁　一八、〇〇〇円

▼原稿締切　5月23日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町二丁目一〇―一六 ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

KANSAI MAN

【イメージ・キーワード】
“Value for Human”
バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール

SUPER OSK by OSK

オーエスケーの
紳士服

株式会社オーエスケー
〒540-0024 大阪市中央区南新町1－4－7
(06) 6941－9631

川柳の質

橘高薫風

川上大輪さんが第五回オール川柳大賞を受賞されたことは川柳塔社にとっても嬉しいことだ。大輪さんは昨年に準賞を貰われている。川柳塔では大賞に川上大輪・富湖夫妻、準賞は第一回に桑原道夫さん小島蘭幸さん、第五回に西谷大吾さんが獲得された。成績優秀である。

これは麻生路郎先生の畢生の目標である川柳の社会的進出、質的向上を目指しての指導が、中島生々庵、西尾栞両先生を経て私に引き継がれ、「人間陶冶の詩」の研鑽の積み重ねが花を開きはじめ、他の柳社より際立った成果が具現したのだ。

これは代々の主幹の選だけでなく、本社や各地の主宰者の柳人の育て方に「人間陶冶の詩」の厳しい裏付けがあったからに外ならない。川柳は真実の詩、人生のいのちある足跡だとする路郎先生の教えの力強さである。

それは決して古い領域に踏み止まらず、絶えず新境地へ指向することの大切さを物語ってもいる。路郎先生の目指された窮極の境地はどのようなものか。私はもう一度目を据えて私の心の底に映そうと、先生晩年の句や文章を辿りたく思っている。私の忙しさは、蒲柳の身がよく耐え続けて来たと不思議に思うのだが、そろそろ余裕づくりを考えて、三月末を期に川柳塔の運営を若い人たちに任せることにした。若いスタッフは一層各地との連繋を密にして、和を第一に進んで頂くようお願いしたのである。

『俳句現代』六月号（四月二十五日発行）に「俳句と川柳」の企画があって、川柳十句提出の依頼を受けた。

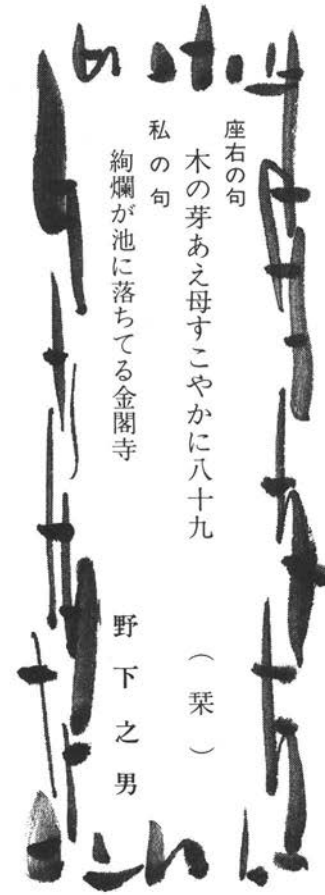
現在マスコミに取り上げられる量産的浅薄な俳句と川柳への問いかけになるありがたいものと喜んで参加した。そして私なりに自分自身で問題提起をしながら作句をした。第一には俳句と川柳をずばり一句に仕立てる。誰もそう感じてはくれないだろうが、その川柳になぞらえたフレーズを作品のタイトルにした。第二は川柳にもいる頑迷な定型固執者に、リズムの融通無碍なるを訴える。外来語の増加の目に立つ昨今、一句に外来語三つを使用してみる試行錯誤。ユーモアの一句と恋の一句。あとは川柳らしい現代社会と人間への批判をうがちを利かして述べればよい。かつて朝日新聞夕刊の文化欄に二度、五句と七句の掲載があったときも、滅多にない機会を生かすのにまことに涙ぐましい齷齪を繰り返した。一句なりとこの句で勝負というのを生まんがためである。今回はそういう句は皆無であった。ユーモアも恋の句も力足らずで出せなかった。俾肉の嘆と言うべきか。

四月二十五日角川春樹事務所発行の一冊、『俳句現代』六月号をご一見下さい。

本誌に掲載の次の五句と自選集の五句は、その落穂拾いである。

作　品

弥生待つ七つの孫の机かな
雛の酒湯呑みに注ぐは無法者
残念の幼な駈けずり回るかな
老いらくのこぼれこぼれて続く恋
蕩尽は金だけでないことを知る



座右の句
木の芽あえ母すこやかに八十九　（栞）
私の句
絢爛が池に落ちてる金閣寺
野下之男

川柳塔　五月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　川柳の質……橘高薫風…(1)
消費拡大……高杉鬼遊…(2)
川柳塔（同人吟）……橘高薫風選…(4)
この句　この人……橘高薫風…(50)
自選集……(51)
川柳の群像　矢野佳雲……東野大八…(56)
誹風柳多留二四篇研究　17……(58)
水煙抄……河内天笑選…(62)
大空のこころ(112)……橘高薫風…(91)
秀句鑑賞┌同人吟……川島諷云児…(60)
　　└水煙抄……竹治ちかし…(95)

消費拡大

高杉鬼遊

去年の暮れのことだった。翠洋会の途中に妻が顔を出した。当日は欠席のつもりで私が投句を預かって来ている。披講中のことなので話すこともできず変だと思っていた。

帰り、古今堂蕉子さんが車で八尾へ行かれるので妻と同乗させてもらった。車で妻が話すには、鶴橋駅で環状線の回数券を買い枚数をかぞえてから、財布の紛失に気がつきその附近を探したがない。駅員に訊いても届いてない。取敢えず近くの交番に届けを出す。中身はたいした額でもないが、ビザカードと家の鍵が入っている。すぐカード会社へも届けをして、帰るにしても鍵がない。私が翠洋会に来ているのが分っているので顔を出したとのことであった。

合鍵はすぐに作ってもらったが、顔の知らない他人がわが家の鍵を持っていることが不安でならない。

暮れの二十七日に電話があって、妻が出ると「あなたの財布を拾いました。交番へ届け

愛染帖……波多野五楽庵選…(92)
茴香の花……宮西弥生選…(96)
「あっさり」……森松まつお選…(98)
一路集「島」……原　みさを選…(98)
「闇」……中塚礎石選…(99)
初歩教室「焼く」……吐田公一…(100)
川柳塔社各賞の受賞句一覧……(102)
富湖からの贈り物……川上大輪…(115)
四月本社句会……(116)
各地柳壇（佳句地十選／春城武庫坊）……(120)
■閑人閑話　私の読書ノート……田中正坊…(134)
柳界展望……(135)
五月各地句会案内……(138)
■編集後記……みつ子・希久子…(140)

座右の句
人恋し人煩わし波の音
私の句
線引きの内で素直に生きる老い
（栞）
福田登美

てもよいのですがお金が入っていないのに疑われるのも嫌なので送ります」と言う。親切な人だと拾い主の女性の顔を想像しながら妻が礼を言っていた。それから今日か明日かと郵便の来るのを待ったが一向に届かない。

不安が日に日に増して、親切な電話だと思っていたのが、留守確認の電話かと疑い深くなって来た。玄関の錠前を変えることにして、錠前屋へ電話しても年末のことで通じない。

一九九九年から二〇〇〇年にかけてコンピューターの誤作動による何らかの異変がある。巷間、新聞、テレビのニュースを聴いても要領をえない。とに角、飲料水にと、買ったこともない水を三本仕入れ、年末から元旦にかけて子供の家に避難することにしていた。そんなことで久しぶりに出掛けたが一抹の不安が残る。ドアの鍵を掛け、自転車を前に置きすこしでも入りにくいようにして、三十一日の午後に家を留守にした。

JRの甲子園口で下車、出迎えの車で行ったが、誤作動のことよりも留守の鍵の一件が気になって仕方がない。幸い元日を五人で無事に迎え翌日帰宅した。出掛けに置いた自転車もそのままにあり、鍵も掛けたままで人の来た気配もない。六日に連絡がついて錠前を新しく替えてもらった。代金壹萬壹千円余り鍵を落したことで変った消費拡大である。

我が家における誤作動だった。

さくらさくら大事なときに熱が出る
助手席の父は居眠りなどしない
美しい街で帽子をひとつ買う
免許更新 巡査はみんなやさしいね
ひとりの灯 誰も信用するでない
塔は孤独で大夕焼けの中に立つ

竹原市　小島蘭幸

満月よおまえのせいで午前様
伝統を守り日本の家燃える
善が勝つ童話子供も信じない
饒舌な善より寡黙なる悪を
弘朗さんを密かに沈め春の雪
箱根より遠くへ行った死んだ人

鳥取県　新家完司

「時代だよ時代」で会話しめくくる
原発は反対 部屋は二十五度

弘前市　高瀬霜石

橘高薫風選

四コマ漫画等身大の僕がいる
採血に並ぶモルモットの貌で
ダンボール箱にぐじゃぐじゃ入れる過去
ひとつずつ秘密を抱いている枯れ葉

出雲市　園山多賀子

残されて
桜待たず夫如月の星となる
六十年不即不離にもある別離
黒枠の遺影は自分好みです
主のない部屋シクラメン色褪せる
堰切った涙春野に棄てに行く
残されて腰巾着が宙に浮く

米子市　政岡日枝子

人も蛇も青い鱗が背に残る
手はすでに藁しべだけを握ってる
童話の声でふっと目覚めるかも知れぬ
はなやかでないのに何故か的になる
ささやかなことだが障子張りかえる

賑やかな声で白菜漬がくる

大宮市　八田　敏

春霞富士が日毎に遠くなる
七十年雛も妻には負けず老い
待合室咳込む他人の背をさする
春と冬こもごもに来て風邪を置く
何うつそビデオカメラを買わされて
誤作動もたまにはあって老いを生き

香芝市　大内朝子

わたくしの産声おもう五月晴れ
偽善者に見えてそこそこいい男
モナリザに口髭描いた反抗期
底力地べたを這うたことがある
老いるほど子に逆らうてやるつもり
あきらめぬ夢でおんなは化粧する

豊中市　安藤寿美子

一ぺんは夫をたたいてみたかった
火に油そそぐのが好きらしい人
思考力ゼロで私がこわれそう
からっぽの頭へブドウ糖補給
餅は餅　苺は苺でよばれます
一人ぼっちのポーズを誰も見てくれぬ

愛知県　早川盛夫

考えた事など無いが車椅子
猛犬とあるのは主人の事らしい
セールスの熱意に脚立下ろされる
おじさんと呼ばれて見ればおじさんだ
苦労して生きておりますお月さま
木洩れ日の下でキャンプの皿洗い

吹田市　石原靖巳

古希からの我が人生に乾杯を
申告へ税金ゼロを喜べず
娘へ電話カゼを引くなと風邪の声
騙される度に尻尾が太くなる
物言わぬ臓器を泣かす飲んだくれ
金賞と言うても読めぬ書道展

東大阪市　谷口義

冷蔵庫もう開けられぬ里の家
冷静に考えているつもりなり
他人にはやさしく出来る紫木蓮
泣きながら思い通りにする女
昨日と今日の間に一つ歳をとり
私の顔もついでに並んでる

島根県　松本文子

少年老い易く元気なり女
蕗の薹ほろりと心咬んでいる
雲を眺めるおよめさんとは喧嘩せぬ
鼠色　灰色　今の子は知らず
白雪によたよたよたと我が足跡
こたつの中でモズの毒舌聞いている

出雲市　岸　桂子

何事もなく過ぎてゆく冬のメニュー
朝刊を読む時わたし素顔です
何処にでもある風景に汽車にのる
一ランク落とした坂でまだ喘ぎ
大望に燃えた日記を読み返す
どこ行きの汽車でもいいの春の駅

吹田市　山本希久子

こでまりとやさしい時間共有す
遊びごころはもう初夏へ跳んでいる
わたくしをも少しこのままこのままで
禽獣の眼差し野心秘めている
築百年　重石のように祖母がいる
並び癖身の片隅に飢餓がある

鳥取市　小谷美ッ千

冬から春へとても豪奢な音たてて
蠟梅の静かな音がとても好き
トンネルを抜けるとワッと菜の花が
菜の花　菜の花　今母さんはどのあたり
消して書いて母という字の重さ知る
ほのかに五十歳　淡紫に包まれる

鳥取市　倉益一瑤

アグアグと孫の宇宙語から春が
墨をする心に水をやるように
扁平足もやがてテープを切るだろう
花束のその一本に口説かれる
ドドンパがやがてワルツになる夫婦
どん底の祈りを神は見のがさぬ

東大阪市　指宿千枝子

長江の流れを上る船の旅
遙かなる時を偲ぶは杜甫李白
彩雲の間白帝を我も辞す
三峡の猿声今は無し下る
たのしげに無口が話す宴の席
華やかなドレスアップも花に負け

枚方市　海老池洋

亀の首いいなと思う鶴の首
字足らずと字余りまるで僕と妻
ヒゲ文字まさにドイチェという感じ
自分史にパンドラの箱玉手箱
足元の福に案外気づかない
本箱に無用の用の本の増え

尼崎市　春城武庫坊

少しずつ雲の形が変り春
桜餅雛に供えて二人酌む
ノーサイド敗者の顔も満足感
五臓六腑の処々に黄信号
2Bで下絵を画いて春を待つ
孫の婚何はともあれ妻と往く

春城年代

尼崎市

錦小路に早たけのこのはしり出る
周五郎の中へ溺れて午前二時
終りのある旅をこつこつ行くことに
眼の手術ほんとの春が来るかしら
風邪引いて主婦のみじめな一日よ
曽孫に逢いに折紙も入れ旅かばん

和歌山市　池永正匍

程々の高さが嬉し里の富士
通販で選んだような婿が来る
感謝する心の欲しい二千年
愛ちゃんが来た尋常科クラス会
ワイングラス味に劣らぬ音がいい
おにぎりの真ん中にある母心

倉吉市　松本よしえ

メルヘンがゆり篭だった遙かな日
読みきかす親ゆび姫になりきって
落ちてまだ紅いおしゃべり寒椿
気に染まぬ刻もあろうに風見鶏
今にして椅子取りゲーム役に立ち
骨董の店でコーヒー点てられる

箕面市　出口セツ子

満開の花に淋しさ見てしまう
桜散る一期一会の発車ベル
夜桜と月が浄化をして朧
過不足の言葉を悔いる花吹雪
約束の指に桜も縋りつき
めくるめく想い出今日も花吹雪

岡山県　富坂志重

呆けぬよう老いの手品を見付けたい
睨み返されて目玉にふたをする
長生きも良しと書いたが今日は消す
疲れたと何にもしない人が言う
風が良く見える火葬場のけむり
目をとじて夢はまぶたの裏で見る

鳥取県　田村きみ子

もう少し仲よくしてね花鋏
日向ぼこする石がある村はずれ
明日になるまでは見せないパスポート
吹かないで風よ桜はいま見頃
楽しいこと考えている寝てしまう
甘酒がうまい絆と居る時間

堺市　山本半銭

殊更に春が待たれるおたいまつ
風和む思い立っての寺詣で
円山の漫ろ歩きがよみがえる
光より風に色ある絵画展
一願の重さ玉砂利深く踏む
逢う度に仁王の顔が違ってる

熊本市　永田俊子

富湖さんの訃報なぜなぜと神に問う
富湖さんからの葉書大事に読み返す
咲けば散る風の無情に誘われて
天からの弔辞ひらひら風花す
山茶花ちりぢり人の命のあとや先

熊本県　高野宵草

老い二人まだ飾ってるおひな様
今日は酒飲まなんだ○日記帳
病院を身内のようにまた泊る
暖房具総動員して冬越えた
これぽちの器で僕の句が並び

熊本県　岩切康子

夫退職　妻という役見直そう
リサイクル大大的にズボン剪る
日めくりを止まらせている忙しさ
振り袖で見舞うた客を囲み込み
人間ドック年に一度の恐怖の日

唐津市　仁部四郎

奥様も家内も死語になる世紀
乱痴気の世相を映すカタカナ語
議事堂の奥妖怪が昼寝する
他愛ない理屈で父を説き伏せる
もう一人いたはずだった頑固者

唐津市　樋口輝夫

紺スーツきめて目出度い子の門出
倒産のうわさ飛び交う更衣室
窓際で胴上げされてる夢を見る
お荷物にならぬと言うた妻の嘘
我慢して濡れながら行く一つ傘

唐津市　山門幸夫

炬燵酒ボタン雪よし梅花も亦
雛壇の顔ぶれ同じ二〇〇〇年
啓蟄だ蛙の眼玉澄んでいる
パス続報補正予算を均等に
カラーヘアーみんな英語が達者です

唐津市　山門タミ

雨水とや梅に真珠の蕾あり
小春日に梅も一日で微笑んだ
梅メジロ春の出合いが忙しい
雀たちと話し合えたら楽しかろ
助っ人は二円五十銭也広辞苑

唐津市　久保正剣

いきいきと行ってすごすご帰る句座
マージャンの街で図書券売り切れる
再建は国に委せてゴルフ漬
国なんかどうだっていい大臣病
行司には八百長はない差し違い

考える力をくれた敗戦記
追いかけるライバル無二の友である
最後には笑いたいから貯めている
何もない時代に育ち良かったナ
神様の公平思い知る老後

唐津市　井上勝視

激辛のカレーに家族引締まる
都庁から上がる花火に湧く拍手
背筋伸ばすそれが私のおしゃれです
調律のできぬ足腰供に連れ
自惚れの仇を討っている鏡

唐津市　市丸晴翠

お荷物にならぬつもりの万歩計
二〇〇〇年探し卑弥呼にまだ会えず
合格に赤味の戻るこけた頬
不束な娘が婿を叱ってる
三寒に縮み四温に伸びる腰

唐津市　宗水笑

四国路を巡る異人の遍路笠
御自分の死刑は嫌な尊師さま
黒持てば黒の力で打つ碁石
脱税に時効あったと知らなんだ
友達の堕胎へカンパ女高生

唐津市　山口高明

水打てば植木にもある息づかい
湯に浮けばいっそ淋しいあばら骨
救急車に道あけてやる霊柩車
ときめきに年齢はない髭を剃る
ダイヤルを回しておいて気が変わり

北九州市　梅田宣司

礼智信こつこつ命のばす日日
八十の愛こつこつ二人三脚で
下げて行く物の重みがよく解る
心電図中に主治医の異状なし
カーテン繰る白木蓮は七分咲き

高知市　北川竹萌

孤の部屋で逝く日の衣装考える
許す事おぼえてペンがよく伸びる
独楽回しとっても上手な女の子
押し出しは好いが中味が今ひとつ
桜吹雪この侘しさはなんだろう

高知県　赤川菊野

血に染めた日の丸揚げて平和です
外国にあこがれ寄せる五十年
引退が近い元気が湧いてくる
ロザリオの汚れに平和泣き叫ぶ
法要が義母とふるさと近くする

高知県　小澤幸泉

松山市　宮尾　みのり

シングルの暮らし冷たい部屋が待ち
後ろにまで目のある人で気が抜けず
腹立ちを上手な嘘で受けてくれ
神様の手で帳尻が合わされる
ふるさと展　太郎　花子に会えそうで

松山市　丹下　美津子

菜の花を活けて玄関春にする
おほほほほ本音をそらすのも女
良心的な仕事にお客　客を連れ
おじいちゃんこわれちゃったか物忘れ
リストラで残留組はロボットだ

香川県　川崎　ひかり

近すぎて愛の深さを見失う
季の移り畑も春の匂いする
散り急ぐ桜見ているおぼろ月
人情を知らぬ上司の太い眉
いい日だなクロスワードがすぐ解けた

香川県　池内　かおり

出稼ぎにまだまだ雪は容赦なく
内臓肥満今更何を減らさんや
コツコツと汗して今日は申告に
掃除機の掃除忘れていませんか
自転車も上手に除ける酔払い

香川県　成重　放任

いつの間か月下美人が咲き終り
一本のバラに託して送る愛
警察に番人が要るこの時世
早咲きの菊一輪を亡母に供え
一枚の布があやつるマジックショー

香川県　神保　坊太郎

お袋のふくろに広いひろい海
竹ほどに脱皮出来たらナと思い
神さまに預けた命なし崩し
相づちをうち薬籠に入れられる
うたかたの世なれど花に癒される

香川県　山地　マツヱ

娘の日記読んで気になる頭文字
あの世から亡母を呼びたい梅だより
病む友へ贈る言葉を選っている
日記帳妻が秘密をたたみ込む
あっさりと茶漬で済ます旅帰り

宇部市　平田　実男

そこに居るだけで空気の和む母
孝行をし過ぎて妻の気を損ね
楢山でまたはじまった子の自慢
非常識が常識となる世を嘆く
それとなく私を変えた陶冶の詩

広島市　森田文

大声で笑える友が羨まし
たまに来る孫対等に受け答え
鼻歌が出ると仕事も疲れない
同郷というだけでこころ安らげり
十六夜の月の明るさ計の知らせ

竹原市　森井菁居

ドクターは絶対つけぬ二重丸
校長の椅子は孤独に生まれつく
福運を拾いに春の街へ出る
地ビールのラベルそこまでこだわるか
建前で物を言うから角が立ち

竹原市　時広一路

音符など要らぬ私の歌が有る
人間を丸洗いする高い塀
人の手を借らずに咲いた花の自負
正義持て余してニュース聞いている
歳だろか湯割り水割り好きになり

竹原市　岩本笑子

泣けて泣けて末っ子の卒業式
ぽっとウグイス心を春にしてくれる
新車購入愛とブレーキききすぎる
ケイタイに怒られているガラス越し
夫唱婦随二十七年目の朝よ

広島県　藤解静風

感謝状ちょっとオーバーだと思う
構えるでなく衒うでもない句集編む
神さまの胸にこつんときた願い
火葬場の隅にポツンと傘がある
年輪は神の指紋にちがいない

岡山市　井上柳五郎

巨匠画く名画が届くカレンダー
本箱は欠伸している本ばかり
この命いつまでもつか夜のしじま
信心をする人に似ぬ不親切
これ以上飲んだら毒と言いつ酒

倉敷市　井上富子

青空へ布団を干せぬ花粉症
ひと休みする鋤鍬に鳥の声
ホッとする椅子が毀れていた我が家
寛げる空気を入れる勝手口
恥ずかしい事ならたんとある我が家

倉敷市　小野克枝

添え木もういらなくなった長い足
あやまちを犯すあわ立ち草揺れる
風という名の影武者が居る友が居る
しっとりと地味に咲きたい老いの花
女には惜しい気性と持ち上げる

年金と三時のオヤツあればいい
月末の集金美しい声で
年金で楽しく遊ぶ術覚え
無駄なことして遊ぶお金はない日本
勝ってくるぞと征った半世紀の谺

岡山県　小林妻子

支えられ支えて越えた坂の数
ささやかな幸せだからこぼすまい
安心を宝にもらう子の巣立ち
銭の音人間優しい顔にする
大正の残り時間と介護法

岡山県　矢内寿恵子

ハンカチで顔を被った二日酔
一生を怒鳴られ通して幕が降り
冬木立石も無言の中にいる
老年のたわごと昭和を懐かしみ
宿の下駄赤提灯を見逃さず

岡山県　荻野鮫虎狼

ささやかに生きて出会いを温める
血のめぐりとっても早い妻の勘
まだ女絵になりたくて拗ねてみる
ひとさまに言えぬ只今冷戦中
記念樹の下で校歌は刻越えて

岡山県　大石あすなろ

裏返す枕にさむい風の音
言葉には出来ぬ想いが背に重い
本音ぽろりこぼして女貝になる
ひと日一日　無事を祈って夢を追い
やさしさにもたれすぎてるイヤリング

岡山県　山本玉恵

笑いぐさ珠玉を拾う夢を見た
たかが螺子無知なる故の修理代
亡父と亡母パントマイムで楽しそう
ユーモアを解さないならいざ然らば
神様と人工呼吸器を見張る

松江市　安食友子

菜種梅雨ときめきの春連れてくる
春を病み明日逢う人の事想う
娘の誘い都大路をそぞろ行く
誘われて旅の鞄のはずむ顔
髭面で抱擁してます嬰子に

松江市　佐野木みえ

春眠へ鳩が鳴く日と鳴かない日
幼児語の妻へうさぎが飛びはねる
じゃがいもを植えて今年の鍬はじめ
迷わずになかったことにして貯金
手の鳴る方へ傾いていく選挙

出雲市　板垣草丘

出雲市　小白金　房子

進学へ霊智さずかる神の庭
種袋わたしの春を蒔いておく
古道具老いて心の温みもる
手話の娘と心ふれ合う花の下
るす電の声がさびしい里の風

出雲市　吉岡　きみえ

遅い春　煮っころがしは母のもの
三寒四温やっとその気の猫柳
カチャカチャと手もとの音が春になる
花前線足音たててやってくる
正念場女は男になりきれず

出雲市　竹治　ちかし

口先の心配だけはしてされて
秀才も鈍才もする悪い事
ノックなどせずに大雪注意報
蓑虫の気持ちが解る冬の床
ピアスした日本男子に問う未来

出雲市　板垣　夢酔

雪止んで心なごます梅の花
肩寄せて飛び行く帰行鴨の群れ
来年と桜さらりといさぎよし
水ぬるむ野鳥旅立つ日和見る
降る雨に煙草がうまい野良休み

出雲市　久谷　まこと

吹雪く夜のテレビ屈託ない笑顔
波風は立てない母の細い腕
コンビニの味が我が家の口に合い
バスの旅過疎をいくつも通り過ぎ
一群が発ちて湖おぼろ月

出雲市　富田　蘭水

花を待つ百万一心　花を待つ
赤い血は持たぬロボット平和ずき
電子化がこの世の老いを迷わせる
一礼をして掛けているいい電話
早春を殺気に変えた大マラソン

島根県　堀江　芳子

胸張った戦話を褒めてあげ
おとうちゃん歩け歩けと娘の電話
あったげな　とんとん昔もう寝息
子育てのむずかしさにも時代の差
戦盲と手を引き五十余年過ぎ

島根県　堀江　正朗

盃を満たすと瞼満開だ
風呂上がり魔法の酒のうまいこと
妻の背に縋り人生双六か
面影の来ない髭そり欠かせない
花に顔埋めて僕の花見かな

島根県　榊原秀子

雨上がる雨靴やっと買ったから
単身赴任許してやって下さらぬ
湯のたぎる音もいいなと耳すます
愛読書あげるといってしまったが
梅さかりかすかに春の音をきく

島根県　伊藤寿美

老いて尚希望は捨てず春を打つ
悲しみも分け合う人と住んでいる
また小鼻動かす老夫のかくし事
杖ついて歩くとみんな温かい
親切な歯科　階段の上にある

鳥取市　武田帆雀

文化とは水売る茶を売る土を売る
生き甲斐の余得鮟鱇フルコース
リストラの首が風邪引く職安所
楽をして勝つ手があった敗戦譜
一脈相通ずる辺りから火の手

鳥取市　岸本孝子

延命の措置が肉親迷わせる
指折って待った日までが華だった
食卓がはち切れそうな三世代
童謡を歌うと亡母の顔に会う
二日酔するほど飲める身がほしい

鳥取市　岸本宏章

白い歯が覗く笑顔に嘘はない
不況から賢く生きる知恵もらう
恩返す気持で恵む募金箱
天下取りウーロン茶では語れない
しつこいとしつこい人に叱られる

鳥取市　徳田ひろこ

大地から拡がる春のシンフォニー
着膨れた恩を一枚ずつ畳む
青田から刈ってもらった椅子の冷え
流れ矢が当ったほどの仲である
煙幕の中の異分子遠ざける

鳥取市　上田宣子

五線紙をピチピチ弾みだすメダカ
気付いたら鮫の視界の中だった
ハンターへ愛想笑いをしてしまう
逆転を秘める小道具大道具
俎板にいつでも載せてくださいな

鳥取市　植田一京

平和だな父がエプロンつけている
留守電に少し気どった声を出す
仲良くはしたいが隣いつも留守
拡大鏡でさがすあなたの浮気あと
花も嵐も越えて川柳詠んでいる

鳥取市　坂田和歌子

虹色が欲しくて雨をまっている
懐の無数の蝶が眠らない
山肌は真っ白芯は燃えている
まな裏の涙を拭くと森の色
呼んだのは散る寸前の寒椿

鳥取市　美田旋風

悪友の誘惑に乗る軽い靴
いじめられっ子が駆け込み寺で夢を抱く
夫婦には時効にならぬ過去もある
峰打ちの情けを後で知る誤算
環境破壊しっぺ返しの日が続く

鳥取市　杉本孝男

欲張りにぴったり馴染む頭陀袋
不況風トコトン節がよく響く
家を継ぐ約束で買う高級車
竜巻に出逢う室戸へバスツアー
身内にも縄を掛けるという立場

鳥取市　冨山檳榔樹

恋をして微熱の花が咲きだした
浮き世風漕ぐ櫓は重く瀬も多し
どうあろと山をすっぽり呑んでみな
孫の歌盗作よそに良くはやる
冬耐えて春風薫る喜寿夫婦

鳥取市　夏目健一

人の世は睨みに抑えこまれてる
雪解けのゆたかなる水いのち立つ
弱者には言ってはならぬことがある
小便を漏らしてまでも考える
辛いとき足の向くのは父の墓

米子市　光井玲子

菜の花がはしゃぐとそっと旅プラン
つぶやいてばかりで前に進めない
節約の達人だなあ戦中派
子にわたすこの縄尻は離さない
いつもより純なこころでじゃんけんぽん

米子市　林瑞枝

枕元の玉串に感謝の友情よ
執刀の主治医へ神と手を合わす
激痛へナース　ユーモア忘れない
病院の新芽吹き出す春弥生
余命三ヶ月とは外科医の常套語

米子市　鷲見正子

脳味噌が重くて頭から転ぶ
女優さんの老いにドキッとしてしまう
エコマークが付くと新品より高い
春はそこまで　やわらかくなる空の色
作業服が一番似合うお父ちゃん

米子市　青戸田鶴

青空でも風がつきさす東京の街
神さまの鞭一心に受けとめる
傷心に追い打ちとばぬ飛行場
目に写るながめはみんな冬の景
衿正し残りの旅を続けよう

米子市　田中亜弥

胸の奥から助けもとめる声がする
風向きはどうあれ月はたじろかぬ
進まねば後の流れも乱れがち
情けなら人一倍に持っている
若い桜が今年はじめてぼんぼりを

米子市　茂理高代

塔めざす心に鞭を打ちながら
実をつける為の苦悩は幸せか
去りし日の想い育む桃の花
草の芽も芽吹いて詩の種も蒔く
春一番よろこび運ぶ戸をたたく

米子市　澤田千春

穏やかな顔で出てくる寺の門
頬杖の横　かけ足でゆく暦
首のない仏がならぶ念仏寺
灯を消すと足早に逃げてゆく今日
好きな人と同じ地球に住む幸よ

米子市　野坂なみ

やっと日の丸広場のポール背を伸ばす
童謡の好きな養老院のピアノ
法名の大姉でやっと並ばれた
旅に出ると軽いジョークがぴょんぴょんと
爪立ちで歩く稽古をくり返す

米子市　木村富美子

ばあちゃんの祝いはいつも小豆飯
バカバカと何度つぶやく物忘れ
明日の芽と春の話がはずむ窓
じゃんけんがいっぱいあった田舎道
グウチョキパァ土をもたげる春の音

米子市　門脇晶子

姦しい女黙ると海が凪ぐ
一つずつ忘れる姉の数え唄
春よこいつぶやいている蕗のとう
二〇〇〇年キンさん冬の雲にのる
風向きも私も変わる坂がある

米子市　中井ゆき

雪とはれ日本を分ける縦の線
つぶやきを忘れすましたひな人形
水の音深い砂漠の底にきく
足跡がまっすぐ残るようあるく
母からの教えお寺を大切に

米子市　永井三津子

もう二十年亡夫と今だに生き続け
子の巣立ち振り向けばよく生きたもの
貧しさは親のせいだと思いだす
チョコ貰い眠るときめき目覚めだす
暗い世へ警察なおも闇を撒く

倉吉市　米田幸子

秘書の椅子人身御供になる定め
どん底で人の痛みを知りました
バランスのとれた器で出ず入らず
バランスの崩れた顔で愛らしい
一日に一度は親を喜ばす

倉吉市　淡路ゆり子

生きるのに苦しみ抜いて明日がある
耳遠く人に笑顔を忘れない
大正に生まれて本音言い切れず
病窓にさくら咲く日を待ちわびる
はりついて豪雪耐えた犬ふぐり

倉吉市　野口節子

薬にも毒にもならぬ人と居る
だんだんと声が大きくなって来た
大倫の遺徳を偲ぶ列が出来
美辞麗句棺の主が苦笑い
ピリオドを打つ億万の花飾る

倉吉市　最上和枝

口紅の彩控え目に念珠持つ
色あせた乳房の奥に傷一つ
楽に解く方程式に罠がある
胃半分摘っても酒が止められぬ
半々に弥陀と悪魔が胸に棲む

倉吉市　山本玲子

マネキンが気取ってポーズ崩さない
樹齢千年尺取り虫が量っている
口上に惚れ縁日で煮干し買う
ハッカーと言う怪物に覗かれた
ハス池で清廉になるあま蛙

倉吉市　山中康子

母の手の温もり伝うよもぎ餅
七彩の夢をころがす孫娘
有難う植えつけられた自然体
百回を手向けて香る彼岸花
メダカ棲む春の小川を愛おしむ

鳥取県　上田俊路

老人力燃やして美しく老いる
隣人愛窓が高くて届かない
怒らずに見ぬふり聞かぬふりをする
息抜きをすれば明日が見えるだろ
終点がそろそろ見える寒い春

鳥取県　原　みさを

まだら雪のままで天命まっている
また注いで明日を語る友がある
いい店で一杯やった頬の色
ピンクがはやるピンクのシャツで出る
ＤＮＡ裏切りそうな孫である

鳥取県　橋本　多哥由

恋をして花花花にありがとう
人恋いの祈りで春の風が吹く
のほほんに暮らし凡人付けがくる
淋しくて寒波いとわず娘に逢いに
花に水妻にもハート捧げてる

鳥取県　吉田　孔美子

疑わぬ猫にくすりはほんと効く
わたくしの宇宙を猫に乱される
宇宙旅行ミー子もきっと連れて行く
四季のない宇宙文芸には不満
乾杯だいざ今日からは酒許す

鳥取県　土橋　はるお

女です角も生えます隠します
見るに美味しそうな唇の女
隙だらけの男の隙を食べている
医者坊さんが僕の車の前をゆく
雪解水テンポが早い水車

鳥取県　土橋　睦子

暦では啓蟄雪の中に住む
清廉な愛は寡黙に昏れてゆく
名水が飲める平和な過疎に住む
春は菜もざわめきながら伸びてゆく
口紅を変え長い冬から逃げる

鳥取県　西原　艶子

肩の荷をひとときおろす姑の留守
待って待って待ちくたびれている何か
糸電話故障ちっともつながらぬ
イヤリングつけて外して見る鏡
まだ信じ切れぬピュッフェの絵と話す

鳥取県　岩崎　みさ江

定点で見るふるさとの変りよう
冷凍庫こころ変りのないように
白黒で描くには花が地味過ぎる
酒壺を提げた河童と縄電車
子の顔を重ねて捻る泥仏

鳥取県　奥谷　彩子

温かな彩で埋めたい白い画布
定年でゆっくり開ける第二幕
天の声地の声夢幻亡父母の声
花道の先に頼れる妻が待ち
夢多く助走ばかりの子が跳ばず

鳥取県　西川和子

老人車押して多彩な趣味がある
日向ぼこ宇宙へ旅をしています
はつらつと白い髪にも色を入れ
白塗りにしてもそぐわぬ過疎に住む
自分史を飾る笑顔を絶やさない

鳥取県　さえきやえ

ようこそ雪に耐えて芽吹いたおきなぐさ
出会いと別れバラは希望の涙みる
花たちのおかげ字引をひいてみる
一生涯守り抜きたや　とうていらん
水仙乱舞　平和な日々に掌を合わす

鳥取県　石谷美恵子

漁獲高老父に報せる白い息
根本の趣旨に外れた馬鹿騒ぎ
仮の世を私も仮の身で生きる
面白い人だが頼りにはならず
目に見えぬ角へ帽子が落ちつかぬ

鳥取県　乾隆風

幽霊の切符にご用心なされ
逆縁の遺影が招く鈴(りん)の音
地球の未来方舟が謳うなり
民衆の駅で言い訳するなかれ
満遍なく照らす光明をいただく

鳥取県　林露杖

山も田も白一刷毛の春の雪
煙突が煙吐かなくなった街
手術した妻が童女に是れもよし
福引を妻に委せて二等賞
警察の陳謝が続く無常観

鳥取県　谷口次男

宴前胃腸の中が笑い出し
投句前　頭の中が痒いんだ
残雪は何かを語る形なり
古傷が乾いた音で訴える
駐在が一生懸命仕事する

鳥取県　乾喜与志

お疲れか座ってござる如来仏
縄をなう力失せても酒は飲む
お隣の犬が吠えてる飢えている
風の吹くたびにガラガラ鳴る頭
官衣など麻雀をして脱ぎ捨てた

鳥取県　近藤春恵

子の幸を遠くで祈る母がいる
手作りの花で私の愛贈る
まなうらに古里があり亡母がいる
人生の幕は故郷でおろしたい
花ビラが少女の肩で春惜しむ

鳥取県　羽津川　公乃

蟹せせる贅に海鳴り心地よい
冷蔵庫開けては思案妻の風邪
油田失効ちょっと買い溜めしておこう
当然のように一票当てにされ
踏ん張りの利かぬ余生をケセラセラ

鳥取県　垰　寛子

おままごと曽孫と老姉の春のどか
カラフルにワイン六本並べ春
どう違う隣の花はもう開く
雪椿たわむ重さに落ちもせず
インフルエンザと風邪は違うと言われても

鳥取県　黒田くに子

曽孫可愛や婆もよばれた初節句
明るくて素直で少し茶目っ気で
父母はまだ影絵となって胸に住む
この家にも羽ばたいた子の跡がある
古里を捨てた耳にもまつり笛

神戸市　小林一夫

うなだれた形にシャツの干されける
エレベーター開くとふるさとの景色
地下鉄で運ばれてゆく私の日常
離れれば離れたままのシャボン玉
シャボン玉　恋に終章ありにけり

神戸市　中村ゆきを

追いかけて胸弾ませる花の海
宮殿には心の貧しき人ばかり
灯のあるうち妻のいるうち有難う
葉桜を映す流れへ今日も立つ
新人の第一球の素晴らしさ

神戸市　木村貴代子

還付申告すませうららとお買物
日本語の優美さうたう早春賦
早起きが二度寝している日曜日
残り時間忘れて犬と遊びおり
ぶつかった壁が新たな出発点

神戸市　池田善守

単身赴任十一年の溝深し
8㎜の中に元気な亡父と亡母
病院は皆病人の顔に見え
小さな子いるから信号じっと待つ
胡蝶蘭も花の終りは皺となり

芦屋市　黒田能子

今日も幸せ白い御飯が食べられる
字たらずで平行線のままである
つまずいた小石にやっと気づき出す
輪の中をやっと飛び出すシャボン玉
身近な人を大切にして暮す

西宮市　林　はつ絵

思いよう変えるとパッと灯点く
爆発を抑えて淋し優等生
あのことを今ごろ亡姑へごめんなさい
帰り道今更面をかぶれない
咳などし　たまに心配させてみる

西宮市　門谷　たず子

眠らないカジノで遊ぶ五十ドル
人間の小ささグランドキャニオンは晴れて
失せ物を夫婦で探す戻り寒
幸　不幸　何れ差引合うこの世
洗面器いつか嵐がくることも

西宮市　奥田　みつ子

草に寝てひとりぼっちもいいものだ
待ちぼうけ駅の夕陽は赤かった
泣き虫は死ぬまで直らないだろう
じっと見るどこか似通う毒と妻
インターネット食わず嫌いと思えども

西宮市　西口　いわ忘

振り向けば気概で生きてきた坂だ
天を指すお釈迦様にも哀がある
紅を濃く一日ぐらい悪もいい
甘辛のふたりバランスとれている
沈丁花　兄は静かに幕を閉ず

西宮市　山本　義子

ひとり居へ蕗味噌届くほろにがき
雛出さず桃の花だけ買うてくる
生真面目の反動おそれてる私
年金でケチも浪費も知れている
片手折る　象のお鼻がうらやまし

西宮市　秋元　てる

我儘だったねひとりが好きなどと
引払う古家の意外な広さかな
シクラメン手持時間を大切に
月命日貴方の知らぬ子に孫が
長電話呆けない工夫十個条

西宮市　牧渕　富喜子

毛染め止めさて自然とは残酷な
淡々と生きてる友を尊敬す
風邪抜けて部屋の空気を入れ換える
スイトピー軽く背中を押してくれ
研ぎ終り商い顔になっている

西宮市　井上　松煙

寒梅のひっそり匂う裏の道
合格に笑い溢れる孫の家
当て字には書き得て妙とひとり笑み
しまったらまた引きそうで風邪薬
若く逝きガラスの花瓶お供養に

西宮市　長谷川　淳

残せずを残さずと言う父頑固
一言も疲れましたと言わぬ妻
人知れず出雲へ参る二人連れ
知らぬ間に本音が出てる酒の宴
四六時中電波に追われああしんど

西宮市　刈田泰司

他人さまの胸算用に乗せられる
他人から聞く父さんのよいところ
坂道にかかると家内手を繋ぎ
病院につける薬はないものか
父の日に母の知恵かるプレゼント

尼崎市　長浜澄子

浅からぬ縁を思う白い足袋
さりげない御配慮お変わりないですか
粉雪ちらちらアダモの声が離れない
疵癒えたらしいパヒュームの香が変わる
分相応の幸せで良し雛あられ

尼崎市　田辺鹿太

川の字はもう望めない子供部屋
どの花も手の鳴る方へ向きたがる
この歳で自分の殻が破れない
交番をポリボックスという勿れ
貧乏を笑える母ちゃんは偉い

伊丹市　山崎君子

甘い風里は広いな鯉のぼり
しょうき様むかしのお顔好きでした
しわしわの手を愛おしむ日向ぼこ
雨しきり明日香の亀に逢いたくて
鯱かえる海は凪ぎだよ温い町

宝塚市　嵯峨根保子

鶯宿梅ケキョケキョのどがまだ眠り
先手必勝花粉の猛者になりつるよ
相席の会釈がぬくい家族亭
菜の花忌貸していた本手に戻る
和尚には一息たらず摩訶般若

川西市　松本ただし

四字熟語堅い話は止めとこう
老犬も呆けたか我が家通りすぎ
継ぎはぎでどうにか馬齢積んだだけ
あと濁す鳥にならない歯を磨く
便利さに馴れてボタンを押し違え

三田市　北野哲男

合い鍵は犬の首輪に括っとく
語尾上げとら抜き言葉の授業見る
間違われ笑う他ない双生児
ふる里の城再建へ寄付が来る
相席できつねとたぬきフトおかし

相生市　中塚礎石

手を合わせ読経の中に無と座る
新記録伸ばす美学に酔いしれる
どん底で誠同士が巡り会う
凡夫婦無色無臭でいる余生
寝たきりの関白いまだ衰えぬ

姫路市　古川奮水

春風に妻は歌など口ずさむ
ダイバーも保護色を着て海を撮る
計略も先輩だから信じとく
リベンジの決意で筆を持ち替える
真相を聞いても犠牲救えない

大阪市　板東倫子

女系三代伝わる雛も老い給う
歌う自由 歌わぬ自由国歌揺れ
一二年三月四日姫誕生
連日のお出かけ妻のリベンジか
期待外れ不渡手形みたいな子

大阪市　西出楓楽

すぐに泣く人には負けておくとする
南禅寺方丈　空気動かない
このところ熟睡をしたことがない
同居してかえって孤独深くする
ロボットに老後の介護頼みたい

大阪市　安達はじめ

わがままに生きて孤独を噛み締める
御願いに来てもお礼はこぬ連呼
飼犬が我が家の序列知っている
相性も趣味もぴったり老いふたり
九分九厘当らぬくじを買ってくる

大阪市　神夏磯典子

楽に来た道ではないがすぐ忘れ
ごそごそと暇さえあれば探し物
痛い痒い眠い　病人賑やかだ
呑めた頃思い出してるおぼろ月
夫の足私へ結び万歩計

大阪市　杉澤汀

故郷のニュースに箸をとめる朝
桜咲く昭和の花の悲壮感
夢二ならここで一筆柳の芽
情報化このメールにも顔がない
大人には難しすぎるキーボード

大阪市　井上白峰

老いてまだ春の色あり絵の具皿
技巧派の撒いた餌には刺がある
酔った振りしてる男の悪だくみ
小細工が過ぎて誤解を招いてる
ネクタイをはずせば消える胃の痛み

大阪市　川端一歩

若者の大志を送る春地蔵
改札を紺の背広が駆けて行く
ああ地球　人のこころの鏡なり
二拍して今日も家族の無事祈る
泣菫を読みしらじらと夜が明ける

大阪市　小林周信

あいまいに笑い誤解をされている
破顔一笑そうかそうかととく誤解
高笑い　どうやら自信ないらしい
奥の手を見せずライバル笑ってる
笑われても望みはでかい方がよい

大阪市　河井庸佑

一番茶送ってくれる母がいる
花供え亡母に悩みを打ち明ける
肝心な所で切れたテレカード
風向きが変わり劣勢盛り返す
気を持たす言葉潜んでいる二伸

大阪市　桝本蕗児

老人夫婦近所の人に恵まれる
母の顔やれやれ試験済みました
カロリーを数える食べる気がしない
橙一つ画題のように置いてある
白髪染僕には必要ないものだ

大阪市　川久保睦子

親不孝承知で切った夜の爪
生も死も弥陀の掌の中かねてより
亡母の雛老父をたのむと老けていく
なあ影よ私の前を歩くなよ
淋しくてまた花の鉢買うてくる

大阪市　渡部さと美

虫はい出てシルバー産業景気やな
高度成長頃に育った子の悪事
言い負ける度量はなくて夫つよい
あれこれと動いて風邪を遠ざける
若い気の体ひきずり六十路坂

大阪市　玉置英子

お水取りまだ先なのに北帰行
故郷は寺も消えるという噂
胃腸だけ元気時時食べに行く
うちの飯一番旨いという息子
何よりも花が嬉しい誕生日

大阪市　辻川慶子

草餅を売る大和路の山が澄み
しとやかな長女が残る三姉妹
お茶の間で他人を覗くワイドショー
風邪引いて少し気ままを許される
お見舞いへひんやり寒い闘病記

大阪市　津守柳伸

むかい風一蓮托生エアーバス
石畳オランダ坂は車窓から
風化せぬ片足鳥居半世紀
連絡船　群れるカモメとパンの耳
おこしやす龍がねぎらう高台寺

大阪市　川原章久

坪庭に過ぎたるものに梅古木
春鹿の白い尻尾の美しさ
笹鳴きに捌く茶筅の手が止まる
接待のぜんざい美味し春遍路
焼鳥の匂う道筋稲荷山

大阪市　松尾柳右子

オーイ空私の悩み吸い取って
ゲートボールみんな青春五月晴
五月晴園児並んでスケッチし
風呂上がり窓から覗く鯉のぼり
子供の日孫七人がやって来る

大阪市　町田達子

何とお強い二〇〇〇年の風邪の神よ
紫の小花に自分史灯をともす
うそ寒い冷えがいや増す戻り寒
やがての彼岸報告いっぱい彼岸寺
花好きだった亡母も亡姑もと旅プラン

大阪市　清水絹子

リハビリへ時に冷たき妻の声
熱燗の冷めても減らず仏様
呱呱の声夜明けの風呂の湯にとける
お七夜の上座の桃も咲き揃い
流氷と花の便りの日本地図

大阪市　稲本凡子

雑草の強さをもらう冬の部屋
流感で食べては寝てる日の長さ
亡夫より三倍命ながらえる
脳みそを絞って姑の座を保つ
愛しあう二人に拍手惜しまない（孫結婚）

大阪市　小糸昭子

古稀過ぎてまだ亡母慕う子に還る
一枚の紙で繋がる仲もある
心地良い自分の居場所探す猫
深海の魚フライド持ち光る
高層のビルに吹く風寒過ぎる

大阪市　鶴田遠野

青空の笑い浮かべて孫が来る
栄転も左遷も座る送る会
ノーメイク口紅だけですむ若さ
印籠は初めに見せて話し合い
床並べ老母と昔を笑い合う

大阪市　中田あい子

いつの世もダイヤ女をくるわせる
ルールとはいわぬルールが潤滑油
いい花が咲くよと友に貰う種
試歩一歩足が地球の声を聞く
屋根破り落ちた隕石宝物

大阪市　岡本久峰

金属疲労大和島根にある弛み
豊満な魅力忘れて痩せ志望
悄然と手ぶらで帰る博多発
チリ土産飴一箱にある温み
愛すまい愛されるまい通夜二夜

大阪市　津村志華子

老母さんと雪どけ待ってる芹嫁菜
眠ってた私の森が芽吹き出す
ひとり旅無欲になれる花の道
三日目のおでんの鍋をもてあまし
春の風女ひとりも浮かれます

堺市　志田千代

ボクの名に又もやルビをつけられる
手相より字相あたると思うてる
字面よい響き良い名をつけてやる
芳名録中腰で書いたのだから
カルテの字よくぞ資格がとれました

堺市　黒田真砂

幾度の別れ見てきた時計台
亡母の背の丸さしきりに想い出し
喜怒哀楽共に見てきた夕茜
強く生きた亡母の足跡風の中
亡母の星二月の空に輝いて

堺市　神原文

身を任す女医のカルテは丸い文字
腫れた目を撮るというのにハイチーズ
わが脳の輪切り見てから出るファイト
疵癒えてさあこれからへ寒もどる
二千年迎え安堵か人の逝く

堺市　宮本かりん

老木が芽吹くわたしも誕生日
ビルの建つ町が他人の顔をする
あの頃がよかった姉妹の遠い日々
また一つ思い出絵巻から抜ける
毒舌の中から愛が洩れている

高石市　浅野房子

先ずビールそして乾杯そして春
カトレアを一輪永久の別れとす
夢うつつこの世の風に目を覚ます
沈黙の背中は否定する背なだ
膨れてもやがては凋む風船よ

和泉市　岡井やすお

お雛さま流せば武者がやって来る
大学で高校補習やってくれ
卒業後を睨んで選ぶアルバイト
無職より大学院がましと親
老人会入歯鳴らして遅花見

和泉市　西岡洛酔

欲望を背負い明日へ一歩前
七十の苦労指輪の空回り
失職の明日へ重たい靴の紐
珈琲の三時も女姦しい
嬉しい日孫へ老婆の電話口

岸和田市　長谷川呂万

留守番に妻の宿題荷が重い
根回しの苦労を知らぬ会議室
スーパーの売場変って他人めく
余命表棹尾を飾る鞭を当て
経験と言われて黙る評論家

岸和田市　高須賀金太

怖いから妻に背いたことはない
輪の中のひとりが消えた僕だった
肩の荷を降ろした酒がよう回り
エアコンにない温もりがある囲炉裏
風がないなら自ら走り風起こせ

岸和田市　井齋一齋

村祭り茶髪がリードして活気
課長より立派なひげの部下がいて
栄転の友を見送りひとり酒
笑い上戸目出度い人と間違われ
初出社うっかりジーパンはいた朝

岸和田市　岩佐ダン吉

飾り立て僕が小さく見えてくる
底力あの日の母のことだろう
右へ右へそんな日多喜二蘇る
喉仏だけは正直なんですね
里の空大きく欠伸してやろう

岸和田市　原さよ子

糠に釘反抗期の子に届かない
孫の主張なるほどそれも正しいな
雨の午後心静かに写経する
消えかけた痛みへ他人火をつける
柳友のマラソンレース旗の波

岸和田市　原苑子

庭におり仲直りさす沈丁花
咲き始めを一本活けて若菜漬け
桜色似合う私になりました
孫の声一日分の良いくすり
菖蒲園八頭身の美女ぞろい

亡夫への伝言託す友の葬
納骨へ亡父母の待つ墓重し
西日とは西方浄土の光なり
春はすぐそこに来てると自答する
古傷の今更是非は問えなくて

岸和田市　宮野みつ江

立たされて風を待ってる鯉幟
曲がってるキュウリ苦瓜くれる友
金貸して我清貧に甘んじる
普段着のママ可哀相参観日
学歴は立派だけれど金に飢え

岸和田市　田中文時

球春を待てず見に行くオープン戦
年毎に値段の上がるランドセル
不祥事を一度は否定直ぐ謝罪
子等競う回転寿しの皿の数
孫達に気を貰うため逢いに行く

岸和田市　井伊東吉

花吹雪中に亡夫(ひと)あり白昼夢
うず潮に大きく揺れる人形の顔
野すみれの拡がる気力風の彩
殺伐の世にため息の雛飾り
信濃路や四季を問わずに誘う風

貝塚市　池田寿美子

小指にも覚えさせねば十二文字
一途に生きる他人が何と言おうとも
グル カルト 何でもありの世が恐い
いつからか婦唱夫随になっている
鶏頭を描く ひたむきに五月

八尾市　高杉千歩

春の曲奏でるものは何もなし
春ぐもり還らぬ兄をおもう刻
さくら満開こころ満開春の旅
物忘れ私の心おき忘れ
横書きにすると燥ぎたくなる雅号

八尾市　高橋夕花

好きな花思い出と撰る亡妻の忌よ
まだ居たの一番星も墓に来る
英文のメールは読まぬあたまから
何やってまんねと聞こえる恩師の忌
輪廻転生信じ明るい明日を待つ

八尾市　内海幸生

夫婦喧嘩古希になっても散る火花
この春もきっと桜が飾るだろ
新聞の軽い投書の底力
企みはすぐひっかかる母が的
初蝶にのって合格通知くる

八尾市　宮崎シマ子

八尾市　村上剛治

リストラの噂ローンを脅かす
無理をして築いた城は火の車
ただ祈るしかない人間の無力
伸びる芽の手足に絡む塾かばん
根気よく蟻の行列見ている子

八尾市　村上ミツ子

公園へ芽吹きの音を聞きに行く
大望がくらしの中に埋もれて
とびだした本音に行く手さえぎられ
昼食べてすぐ夜食べることを言う
太ってるだけで元気だねと言われ

八尾市　吉村一風

持ち味で助け合ってる老いふたり
負けて勝つ真似てはみたがむずかしい
尻に敷かれて妻重いとは思わない
母の貯金じっとぬくもる暇がない
つかの間の春陽を猫とたわむれる

八尾市　神原まさと

自転車が怖いぎっくり腰のあと
腰痛に耐えた奥歯がゆるみだす
腰痛と地震は予告なく襲う
いい時も有ったと今を慰める
かますごを焼いて独りの昼ごはん

羽曳野市　吉川寿美

春雷遠のく激しきものをなだめ居り
ひとりの灯ひとりの寂に馴れぬまま
当然のように湯が出て来る蛇口
干柿の甘さは本もの母の愛
低温火傷繰り返しては生きて居る

羽曳野市　酒井一壺

両親の悪いとこだけ子に見られ
遊んでる時は子供の顔である
老夫婦湯冷めも承知京の宿
仲直り心の冷えは戻らない
心から冷えてきましたこの不況

羽曳野市　三好専平

いつわりの世に生きながらえて冬の葱
DNAにひそむ宇宙のビッグ・バン
木の葉髪梳いて貧者の身だしなみ
立ち枯れた木のてっぺんが好きな鷹
国境をまたいで渡る象の群れ

羽曳野市　徳山みつこ

春霞山も仁王も柔らかい
ゲームだよ謝罪ごっこはまだ続き
花便り空気もボクも揺れはじめ
母よりもメイク上手な女子高生
矢をはずすもっと一緒にいたいから

羽曳野市　安芸田　泰子

いかなごへ厨は老母の城になる
落花狼籍隣へ詫びる春嵐
労りは貰った愛の恩返し
猜疑心やせた心に自己嫌悪
大声で叫んで見たい独りぼち

羽曳野市　西村　りつえ

弥生の窓　蛍のひかり懐かしく
新世紀はパワーをつめて八重桜
淋しすぎ三面鏡にシクラメン
一枚はぎ胸の底まで春を入れ
恋人の好みに合わす春の服

羽曳野市　福田　満州

お隣のうぐいす籠を出たかろう
根性を据えて大関返り咲き
通るたび桜の花芽色も増し
湿布よりプール歩きを奨められ
声だけは今まで通り元気です

藤井寺市　高田　美代子

十代はいい制服で耀ける
淋しくてわざとふざけているのだな
満開の下ではじまる炭坑節
落ち目とは酒のつまみにされている
盆梅や何度の春を迎えたか

藤井寺市　鴨谷　瑠美子

向き合うていてかけがえのない味方
花の首回して見たい場所がある
パスポート馴れたサインに落着けり
頭から笑われている英会話
うす紅の絹地纏って蝶になる

藤井寺市　太田　扶美代

亡母さんに会うかも知れぬ梅の下
火の彩を女は胸でたしかめる
約束の一つ一つに夢がある
会えるかも知れないここは終着駅
あのあたりから流れてる早春賦

藤井寺市　中島　志洋

年金でちょっと気張った鯉のぼり
手土産を横目ようこそおいでやす
あの人が歌うといつも座が白け
バスガール制服脱げば河内弁
正直に手ぶらで行った間のわるさ

藤井寺市　楠　昭子

元気に生きて今年も花に酔っている
追われたり逃げたり恋は楽しくて
動いて動いて悩みを一つ消しておく
安心して暮せる太い床柱
部品を替えて少し未来の設計図

松原市　小池しげお

山海の珍味も口に入れてから
倖せが続いて妻の声がする
養命酒ただなんとなくなんとなく
欲のない帽子かむっている頭
八十やそうなお金も貸すそうな

松原市　玉置重人

町内に一〇〇歳予備軍たんといる
紅の色春のモードに切り換える
大阪もまんざらでない観覧車
夫婦相和し妻にもありがとう
美容室出れば私でない私

富田林市　藤田泰子

月光に冴える銀杏のあばら骨
子も猫も膝から去って早い春
溺愛に根腐れ愛も程々に
人間愛大きな大きなハートチョコ
風邪の熱夢とうつつを彷徨いぬ

富田林市　片岡智恵子

追いつける距離と思った身の甘さ
あの頃は子育てさ中この裁判
あの日より日にち薬の墓に佇つ
百円でいつか国盗る鈴を振る
バラ真っ赤今度の愛は本気です

富田林市　松本今日子

絵葉書に誘い出されて春ですね
お見舞いは季節外れの苺の朱
二月堂火の粉散る散る人走る
三寒四温迷いつづける蕗の薹
頑張りを少しゆるめて二〇〇〇年

河内長野市　加島由一

親不幸重ねて親になっている
好きなこといっぱいやって生きよ君
貝に耳あてて少女は海をみる
泣くなよと影が優しくついてくる
網を曳く夢をみた帰ろか田舎

河内長野市　井上喜酔

聞き上手ゆっくり吐かす下手な嘘
愛があり生きる楽しさ知る老犬
ゴミの日は夫がちゃんと覚えてる
税務署と縁が切れたら先が見え
癌と知り居直る友の淋しい目

河内長野市　植村喜代

外孫でも楽しくさせてもらってる
一ヶ月会わぬと孫が喋り出す
今晴れて今雪散るもまだ二月
外事のいらいら妻に向けて来る
淋しいね家の話が洩れている

吹田市　古川喜美子

この辺で道に迷うたふりをする
思惟とかや謎めく笑みの観世音
祝宴の花で汚れる花舗の裏
春そこに来てる鍋釜ひからせる
雪積る夜は寒くてあたたかい

吹田市　瀬戸まさよ

自然水ついに深海まで至る
ロボットの犬でストレス癒す世に
見終わって余韻に浸る映画無く
いたわりの欲しい自己愛九十歳
春一番今日はやめとこ美容室

吹田市　大谷篤子

四面楚歌雲は静かに流れている
嘴で古い傷口突かれる
逢うほどの事もないのに逢いに行く
喜々として舞台で歌う楽器たち
雨続き黙黙と猫顔洗う

東大阪市　森下愛論

鬼どもに裁かれるのか死の怖さ
老いの顔互いに見合い上等兵
飲む程に脱皮出来ない気の弱さ
カクテルが交叉しているカウンター
また明日があるのに二次会三次会

東大阪市　北村賢子

水ぬるむ鳩もスズメも群れあそび
目を閉じて太陽いっぱい感じてる
鬱の日へ飛びこんでくる孫の声
せちがらい世を拗ねている青テント
淋しげなふりは見せない故郷の父

大東市　児玉蛙

雑音のない図書室で落ち着かぬ
割り勘と言われておちる酒の味
ぜい肉を落としに寺の門くぐる
胸襟を開き情けに流される
一徹の父に天狗も寄りつけず

守口市　結城君子

もう花の便りに移る日の速さ
揚雲雀故姉に言伝て頼みたし
さくら餅と薬袋さげて夫帰る
Y2Kの火鉢活躍浅き春
敵はなく菫は唄う風にゆれ

守口市　井上桂作

初めてのラジオ出演髪染めて
宿の下駄音聞き歩く散策路
飼いやすし酒一合で旦那様
底靴に茶髪の母子入園日
我が孫も児童に変る春は来ぬ

枚方市　前　たもつ

教育の二字は未だに背なにあり
人が好き妻もわたしも電話好き
消息も夫婦の仲も読む柳誌
荒縄も水を含めば肌に合い
航空写真　運動場の静かなり

枚方市　森本節子

枯れ葦の根もと好んで犬かがむ
金色の東の空よ今日のいのち
夢のなか極くごく自然に亡兄がいる
浄融詠春信女はや満中蔭
野の花を摘んで手提げに入れたまま

枚方市　栗林光夫

視る聴く嗅ぐ触る味わう春が来た
清掃婦ゴム手外して水ぬるむ
てにをはを変えて鉛を金にする
一箸でいかなご十匹のいのち
二人三脚わが影となら息が合い

枚方市　宮川珠笑

孫がもう私支える手をつなぎ
美しい言葉が友を連れ戻る
ジャンケンでチョウムカツイている園児
写真ではいつも寄り添う妻がいる
酒癖が配転先に届いてる

枚方市　寺川弘一

最後まで主役でいたい枯葉舞う
少しだけ身構えてから読む社説
釣り銭を出さぬ自販機叩かれる
平均値超えると四面楚歌になる
不均等だから楽しい喜怒哀楽

茨木市　藤井正雄

箸捌きホウレン草を茹でる母
分からない侭でにこにこしてる祖母
じいちゃんのローマ字今もヘボン式
春障子孫が朝刊持ってくる
美しいうなじが横に振る返事

高槻市　傍島克治

七人の敵ではすまぬ四面楚歌
寄り道の書店で調べるカタカナ語
寺号は知らぬ春をたずねる花の寺
柩ゆく散華と紛う花吹雪
マネキンもガングロとなり春の装

高槻市　井上照子

健康の納豆まぜて元気出す
兄の愛健康食品さげて来る
おだやかな笑顔の友を忘れまい（栗谷春子さん）
夫の詩を頭に綴り日が落ちる
薬局で細かい話避けて買う

寝屋川市　岸野　あやめ

通院は老ドクターと仲良しに
母親の泣き百態を見てしまう
一張羅着ると正座が崩せない
武勇伝いっぱい持って好々爺
気忙しさ朝夕刊を続き読み

寝屋川市　柴田　英壬子

ナツメロを歌うと風邪がかるくなる
木の精が舞う春浅き陽の中で
願かけた記憶とげ抜き地蔵尊
青きドナウ明治の余熱流れくる
踊り場にてっせんヒヤシンス可憐

寝屋川市　高田　博泉

ジョギングに高い衣裳を用意して
ぞろぞろと寿命を告げる電化器具
慎重にことば選んで肩がこる
定刻で退社の出来ぬ席につく
自信ない顔で時々ふり返る

寝屋川市　江口　度

早寝早起きと限らないお年寄り
目白来ている顔の幅だけ窓あけて
若い娘もたんと来ている針供養
浮子にまであかり点して夜を釣る
病院から無罪の顔で妻帰る

寝屋川市　森　茜

どんよりとした日どんより脳細胞
おむかいの窓も頬杖ついている
吊りらんぷほどのあかりへ恋うひとよ
ただいま フランケンシュタイン君帰る
ひとひらの雪に唇うばわれぬ

寝屋川市　堀江　光子

横顔は笑っていないコメディアン
買う数は誰にも内緒バレンタイン
弟の僕を抜いてるチョコレート
大切に飾る一つのチョコレート
定年の風邪ゆっくりと静養し

寝屋川市　太田　とし子

ぷっきらぼうの花屋に桃のワイドショー
梅咲いた今日一日は無欲なり
閉店開店ビラがポストで睨めっこ
可も不可も旬のみかんを剝いている
春場所の土俵に大阪四股を踏む

寝屋川市　冨山　ルイ子

二十四時コントロールを上手くする
読書百回素敵に年を取りたくて
国民の怒り役職降ろされる
孫との関係展望見えぬまま
増幅されていく感情をもてあます

寝屋川市　酒井勇太朗

飼い主を選べぬ犬も浮気する
意志曲げぬ明治の母も鬼籍入り
次の世も一緒と頼み断られ
母送り肩の荷が降り気も萎えて
電車無料　放浪癖がまた芽生え

豊中市　田中正坊

おとなしい動物だから角がある
警察につける薬はないらしい
国も府も市も老人に冷たいぞ
たまさかに仏壇ひらく春彼岸
目をとじる兄弟のかお父母の顔

豊中市　吉田あずき

どっと来る春のパワーに喘ぎがち
うっかりや手抜きやうすっぺらな国
子の入試雪の日だった今朝も雪
春の駅人の流れを変えてゆく
親看取る人間らしくなった人

豊中市　井上直次

病友と検査結果を比べ合い
無駄話これも世渡り必需品
お誘いも歳考えてバスツアー
会えばまずまあまあですと医者通い
無愛想な医師だが人気抜群で

豊中市　滝北博史

あーんして妻からもらうチョコレート
紅梅と気づかず買うた大手柄
厄明けて家をリフォームした次男
無念でも誘眠剤で寝る私
飛び起きた本音を吐いた夢を見て

豊中市　湯浅馬洗

梅一輪枝も突っ張り精気見え
蛍雪の功死語になるハイスクール
下手でよい書ける喜び二重丸
社会面偶然必然気後れす
後れ雛タブーに困る母の顔

池田市　栗田久子

のせられて本音を出したもろかった
手鏡が歯抜けの口をのぞき込む
神様のいたずらだからお許しを
出直しに花も涙も添えられる
存分に咲いた野バラの実を結ぶ

箕面市　岩津ようじ

マージャンが嫌いで出世せぬキャリア
初恋の痛みが残る喜寿の胸
嬉しくも恋人に風邪移される
クォーツの遅速はなおしようがない
賞味期限切れても女つくるしな

箕面市　唐住実

高いけどシスコの街の豆腐買う
公園は雨　阿寒湖も摩周湖も
ローマ字の表札かけている義弟
その時に生きて居ればと笑うてる
ちょっとだけやるかと座り今日の酒

大阪府　籾山隆盛

春告げるなにわの町に触れ太鼓（春場所　2句）
大銀杏闊歩している御堂筋
大願へ拍手の音いと高く
感情のもつれの中に酒が立つ
日本に青い瞳をした兵隊さん

大阪府　米澤俶子

無器用に生きて瘡蓋また出来る
人馬一体ぜんまい仕掛の如くあり
犬嫌い犬はつぶさに感じとる
さくら色思わぬひとと逢えそうな
残った時のためと夫に手伝わす

和歌山市　川上大輪

富湖の死僕は終身刑のまま
この道を行けば富湖にまた会える
仏壇へ今日の機嫌を問うてみる
泣いても泣いてもやっぱりまた泣ける
一粒に思い出ひとつある涙

和歌山市　青枝鉄治

平穏な序列を乱す金とコネ
反旗振るチャンスないまま多数決
例外の措置で温みのある人事
知名士が食べると記事になる目刺し
美味い水うまい風ある過疎の幸

和歌山市　木本朱夏

いつか行く国のことなど帽子買う
恐ろしいことが始まる春の闇
夜叉面の横から見れば泣いている
百円グッズで飾るわたしの紙の城
小便小僧と並んで春を待っている

和歌山市　牛尾緑良

日が暮れてまた煩悩と二人きり
色即是空風は天から吹いたのか
良い酒に出会った喋りたくなった
B面に心を癒す歌がある
不器用に笑顔を溜めている遺影

和歌山市　西山幸

麻酔から覚め脚本を書き替える
失った顔を憚る眼鏡買う
ピノキオの鼻の高さをいとおしむ
砂落ちてしまってからの砂時計
行方不明のこころよ旅はままならず

和歌山市　桜井千秀

子ォ取ろ子取ろ孫は取られたまま無沙汰
オッチョコチョイ古希を越えてもオッチョコチョイ
南無大師ギックリ腰へ欲しい慈悲
コレクション始めはほんの気まぐれで
関ヶ原以来味方は信じない

和歌山市　福井桂香

小面にヒューラリ聞かす春の笛
石段を登りつめてもそこは風
閉じ込めてなお柊の花の思慕
背負い込んだ罪の重さか紅椿
ご存知でしょうか鳥になる星を

和歌山市　古久保和子

森の地図知り尽くしてる輪っぱめし
神様の声が聞こえる老父の耳
愛想よく笑えないのも親譲り
勝ち負けでないがやっぱり還付金
保護色にそろそろ飽きたカメレオン

和歌山市　楠見章子

遠足の足からマーチ聞こえそう
羽を広げてビュンビュン駆けていく子供
春の風頭蓋骨から溶けはじめ
床の間に拾った石を置いてみる
十九世紀のロマン見つけた蚤の市

和歌山市　玉置当代

またひとつ灯失くした冬の道（菅井智水庵先生へ）
一輪の椿散りゆく春の庭（川上富湖さんへ）
相槌が返ってこない日の孤独
不景気を猫と笑って耐えている
申告を済ますと旨い酒になる

和歌山市　山口三千子

点検の無料に落し穴がある
遠近両方お世話になっている眼鏡
嫁した子に連れられて行く梅見酒
進歩する科学リストラ比例する
見切り発車介護保険の先見えず

和歌山市　細川稚代

背伸びして春を迎えにゆくヒール
骨惜しみしながら春がやってくる
ふらふらとうまいコーヒー飲みにゆく
イベントになると張り切るおばあちゃん
ラーメン屋素顔にもどる彼を見る

和歌山市　堀畑靖子

母さんの杖に厳しい戻り寒
ため込んだ愚痴をはき出す春の窓
初午の幟に活気づく田舎
萎縮したヒラメキ少し戻る春
年金が細るぞ直訴いたさねば

海南市　谷口義男

聞く耳を持って世間を広く住む
移り行く街並尋ね万歩計
ピンチにも弱音を吐かぬ強い妻
偏屈な哲学だねと妻笑う
絵馬の数多過ぎ神様手抜きする

海南市　三宅保州

しびれている手足存在感がある
生きていることが競争だと思う
他人から見れば私も他人です
メートル法どうあろうとも五寸釘
僕が載ってない紳士録買わされる

和歌山県　中後清史

寄せ書きの温いハガキにほだされる
海山があり恵まれた土地に住む
変わり身の速さが運を取り逃がす
よく喋るおんなの唇がうすい
落ちこんだ迷路で見えてこぬ出口

奈良市　天正千楠

石庭の十五の石と対話して
早朝の砂紋引する僧一人
草餅の恋しくなりぬよもぎ萌ゆ
紅梅の蕾艶めき小雪降る
咲きて散る輪廻はここに沙羅双樹

奈良市　米田恭昌

啓蟄に明日香這い出た石の亀
石の亀権威誇示する古代都市
報酬と善意に揺らぐ介護法
黒い瞳のタンゴが青春を呼び戻す
援助米またテポドンに変わるかも

大和高田市　岸本豊平次

運が悪かった総理も国民も
二〇〇〇年孫大学の一年生
手に余る孫だが期待持てそうだ
ひな祭り過ぎたが重ね着まだ脱げず
好きだった鰻の脂が胃にもたれ

大和郡山市　坊農柳弘

加茂川に夏の序曲のユリカモメ
沖縄へ行こうサミット来る前に
ミレニアム僕の宝はお母さん
風薫る柿の葉眩し法隆寺
卯の花の蕾ゆっくり菜種梅雨

京都市　山海友熙

薫風へ母と歩いた二年坂
清水の仏様には逢えました
解脱した蕾のままで枯れている
うれしくて花もわたしも緑色
もう少しゆっくり歩こう登り坂

京都市　都倉求芽

国債で見えなくなった日本地図
大きな声でやり直せとＡＴＭ
どちらとも短い返事で済む夫婦
衣食住みんな昔のままで春
そこここに風が囁く春の地図

亀岡市　井上森生

鯉のぼり我が家も男の子欲しかった
香港の孫が我が家の姓を継ぐ（夫婦別姓）
松明が弾けて病　天に消ゆ　（喘息治癒）
日々折々思いを込めた句を寺に
亀になってこれからじっくり歩こうか（亀岡に転居）

京都府　稲葉冬葉

名取舞台に出費が嵩むうれしい日
佇めば晶子を偲ぶ覚応寺
とても楽しく笑ってた糸切り歯
大吉に疑いもなく宝くじ
仏の前で珈琲を飲むねえあんた

富山市　酒井輝

パソコンを買って会社にしてしまい
カタカナで呼ばぬと人が集まらぬ
住居だけ自立しているパラサイト
女性誌も読んで時勢に追い縋る
遺書めいた妻の日記と旅に出る

富山市　島ひかる

ふっと伯父うかぶ大阪弁の人
タイに来て同じアジアの顔がある（タイ旅行　2句）
王朝の栄華偲んでいる遺跡
花暦旅の夢路を駆け巡る
片言が祝ってくれた誕生日

富山県　増田紗弓

天候不順冬も悩んでいたんだね
長の椅子口ほど苦手じゃないらしい
酔うたふりしてます好きと言えなくて
逆風にめげないひとがひとりいる
筆先に彩色春がしのび込み

可児市　板山まみ子

家事雑事束縛のない亭主殿
いるだけでストレスとなる亭主殿
自己主張始め二歳もあかんたれ
美味いもの食べたい舌に背を押され
雑草がはえねば春もよい季節

富士宮市　渥美弧秀

酔い回りテレビの画面夢うつつ
誕生日よくながらえて八十五
矢印のたまりは喪服の人集い
曇り日の森は閑かに刻流れ
富士へ日輪時は流れて陽の沈む

静岡県　薗田獏沓

神様に言われた通りプロポーズ
初めてのスキー死線を越えて来る
焚火の煙消えた天国母おわす
適当な暗さの中の如来像
割り勘で上司の家族思いやり

横浜市　菱田満秋

国のため死ぬ老人はもう居ない
消息が喪中はがきで知らされる
慎重に審議してから多数決
来る来ない関わりもない花むしる
平凡な人と他人は恋をする

横浜市　清水潮華

花便り一期一会の切符買う
外人が英字新聞読んでいる
リクエスト貰い張切る夕支度
暑い日が来ると思えぬ霜柱
言い訳は苦手貧乏くじを引く

横浜市　菊地政勝

小走りにさせて妻とのウォーキング
輪ゴム持つ妻に油断は見せられぬ
切り出した妻の悩みは知れたもの
常套句離婚の二文字出してくる
大空へ飛んで行きたい鯉のぼり

横浜市　小野句多留

長支度思いやっぱり一人出る
静寂に一人ブツブツ電子辞書
罰金を払い普通の人になり
すり切れたジーンズ私のピエロです
還暦を過ぎても母のにぎりめし

川崎市　和泉あかり

備蓄した水でご飯を炊いてみる
若づくり首から下を褒められる
足あとがいっぱい古井戸を覗き
間引かれた双葉お前もリストラか
ハトの出る手品がいまだわからない

東京都　後藤早智

新しい空気と出会う自由席
雪しきり上り列車の遅れ待ち
長グツもホテルに並ぶ吹雪く町
湯けむりと雪ですっぽり沈む町
旅終えて桜の春の日が痛い

八王子市　播本充子

男男男マザコンにさせず
面識もない人からの果し状
すぐ傍にいるから見えぬ旗の色
満月に忍耐力をほめられる
病床の姑に怖いものがない

町田市　竹内紫錆

音色から楽器が言えぬ解説者
俳号を並べる苦闘キーボード
医学では味方と限らない酸素
関節の模型うごかす音痛し
傘寿から旅先でカサ買うとする

佐倉市　吉田笑女

心から祝う家族の誕生日
一日があっと言う間に今日も暮れ
また一つ年を重ねる誕生日
四男三女残る三女も八十路坂
朝夕に仏に祈る子等の無事

仙台市　川村映輝

長生きが運がよかったとは言えず
健康を優先させて生きている
奇麗だね　何時も歯医者に褒められる
人力の及ばぬものに運がある
盲導犬席も設けずバスに乗せ

弘前市　相馬銀波

来し方が一人芝居と言う自覚
断ち切れぬ想いが募るひとり酒
方言の温さを貰う旅最中
犬に尾を振られ始動の万歩計
背伸びする勇気を貰う師の色紙

弘前市　小寺花峯

右足がしびれ左脳が欠伸する
わびしさよじっくり見てる互いの手
振り返るおろかな過去で酒ばかり
悲しいことがあっても咲いた庭の花
葉が落ちて淋しがりやの遊園地

弘前市　一戸ツネ

地平線酸素いっぱい深呼吸
地に敷いた藁の温さに芽が育つ
地酒からこぼれる情けあたたかい
本当の女がひかる地味好み
地に伏して無罣礙の夢のホームレス

弘前市　今愁女

シクラメン篝火のよう燃えたぎる
冬越したパンジーいとし声かける
サボテンの蕾あしたの希望なり
無職でもなにがなんだか日々忙し
最良の日々を時間は速過ぎる

弘前市　高橋岳水

父祖よりも少し長生き出来ただけ
紫の袱紗に包む負けいくさ
人間が好きでたまらぬ縄のれん
雪国の少雪という猶予刑
人並みという物差しがまといつく

気配して小窓叩くと岩木山
岩木山 朝日ところを得て昇る
緑風の岩木の蟬の越天楽
教え子とお山の花に酔いしれる
ラッセルを辿りに辿り着いた谷

弘前市 櫻庭順風

顔出した土に思わぬもどり雪
還暦に嬉しい真っ赤なバラの花
青春の真ん中辺にある余白
プライドは捨ててはいない青蛙
食卓に立派な一品青菜汁

弘前市 小枝ふさゑ

勢いのついた炎好きな春だもん
一気にシャツ三枚も脱ぎ何処へ行く
雛の日の日本晴の花芽機嫌
爺握るおにぎりに雛来てたもれ
りんご一つ食べたら花の僕になろう

弘前市 蒔苗果林

五月晴れ心底開きうつ飛ばす
相槌の調子に乗せてくる電話
津軽弁にこだわり生きて天衣無縫
聞法の鏡に映る愚者の貌
父母唱和 仏間にぎしく正信偈

弘前市 岡本花匠

アルバムに孫に誇れる野球帽
チョコレート義理の分まで買わされて
エンデバー地球の夢を着々と
テレビから不快指数が高くなる
キャッシュカード銀行マンを知らぬまま

弘前市 中山雅城

弥生ですカラスも春の声で鳴く
もういいよ雪割草が打電する
キューピッド春一番の矢はどこに
嬉しいと素直に言えた春の午後
内緒なのにあなたの声が高すぎる

弘前市 宮崎ヒサ子

春の芽にほんのり染まる山の釣り
水温みしだいに活気づく山女
雪解けの水で寝惚けている岩魚
釣行の余韻を山の湯に浮かべ
釣果あり友を集めて岩魚酒

弘前市 福士慕情

三面鏡今日のワタシを組み立てる
青森のデッカイ土産核のゴミ
愛玩の犬がワタシの健康器
親戚の久しき訪問怖く受け
特選の酒にはすまぬ紙コップ

弘前市 須郷井蛙

十和田市　阿部　進

好きだから灰になるまでつくします
リストラの風が突然こちら向く
知らぬ振りしてたくらみに乗ってやる
目立たないように脇役気を配り
手さぐりで生きる明日の米を研ぐ

黒石市　相馬一花

三月になって暴れる虎落笛
究極のグルメも唸る菜っ葉汁
銀行の前まで被るたこ帽子
親指も小指も好きな薬指
おとなしい人が怒ると恐ろしい

青森県　西谷大吾

白鳥が去って津軽に春がくる
鈍行で春の出合いの旅へ出る
定年の椅子としんみり乾杯だ
三猿になれずに耳に鬼を飼う
星空へ向かってすすむ山頭火

砂川市　大橋政良

末席へ流れて来ない風通し
悠悠自適優雅に回る独楽二つ
お喋りなペットボトルの風車
ついてゆく背中何でも話したい
夕焼けは恥ずかしがり屋かもしれぬ

今治市　野村京子

頭をなぜてやるとかしこい僕になる
約束のかたちに遠いかたつむり
ちぎり絵が民話の好きな風と舞う
花ごろも炎ごろもまとうのは女

美祢市　安平次弘道

月の暈夢は無限だなと思う
身構えてみたが年には勝てません
十字架の向こうに首が干してある
病気にも慣れうす味にならされる

竹原市　三宅不朽

開け放つみどりの中の歯を磨く
湯上りの霧の幻想若くいる
風情なき車窓ガイドのひと休み
ご飯ですよいつもの妻の誕生日

竹原市　古谷節夫

申告を郵送やっと春が来る
シナリオへアドリブ効かす春の宵
人生が十二色では物足りず
色あせたサインボールが捨てられず

岡山県　福原悦子

駆けつけてくれた素顔は本物だ
忘れたい傷に他人が触れたがる
人生の大波小波知る日記
即席の童話終りが見つからぬ

松江市　川本畔

沸とうの鍋青葱で勝負する
耳あてて机の素性たしかめる
螺旋階段男の愚痴を逃げてくる
余命表手で押しやってパンを食う

出雲市　石倉芙佐子

卯月花月ひとりぼっちの朧月
たゆとうて卯の花くだし濡れてゆく
宿り木に思いがけない愛一つ
とおせんぼした友もなし風の里

出雲市　小玉満江

春日和乳の良く出る牛と居る
風しもで一つこぼれたスキャンダル
切り札があるので大きな声を出す
バンザイをしてからゆっくり飲み直し

島根県　森茂美

誤作動の議員選んだのは僕ら
不景気の影は追う度伸びてゆく
友野辺に送って老いを自覚する
芹を摘む老妻の指から春こぼれ

鳥取市　近藤佳子

帰ろうよ城跡の桜見おさめに
以下同文それさえもらうことがない
ねぎ坊主幼馴染みが欠けてゆく
父さんの歳になったよ逢いたいな

鳥取市　春木圭一郎

大空を言葉一つが漂流す
幸せが言葉一つでやって来る
いつまでもきつい言葉が減らせない
胸底に恩師の言葉生きている

鳥取市　福田登美

流しびな祈る子供の可愛い掌
美しい色が気になるまだ女
愚者の影引きずりながら欲を持つ
病む夫の介護ひたすら妻の愛

鳥取市　山本益子

若嫁をぼやく嫗は姨捨てへ
人生の企む舟は遠慮する
良縁をうららかな風運び来る
向き合ってぼやく戦は終らない

鳥取市　西村黙光

人のため世のため呆けを防ぐため
酒に酔い小鳥になって空を翔ぶ
幸せが酒を減らせと呼び掛ける
歳とるのは年に一度と限らない

鳥取市　前田一枝

ずる休みうっかり電話取り上げる
突然の出合い昔の胸痛む
もえつきて紅葉もやがて土に入る
塗ったって顔の小じわが目立つだけ

鳥取市　岩原喬水

のびた蕎麦酔った夫を待っている
ボケ防止財布に鈴をつけておき
ゼロいくつ兆の位はわからない
ロケットで旅行もやがてできそうだ

鳥取市　中村金祥

足元のゴミを拾って春を待つ
羊雲追って心は白いまま
厚底よ世の中広く見えますか
ハードルを越えて一輪花活ける

鳥取市　石上悦子

ケンちゃんのなりたいものは貯金箱
夢ノート今夜はこんなヒロインに
給食だけを食べに行きたいランドセル
着飾った美女からにおうサロンパス

米子市　神庭詩郎

簡単に約束してる電話口
手の懸かる呆けの介護は低ランク
何時死んでも良いは口癖医者通い
草花が好きで野草の小花壇

米子市　白根ふみ

連れ合って帰りの蜜をたくわえる
天心にことば放って鳥帰る
一夜ずつ捨て去る寒さ啓蟄へ
雪解けていろいろ草が立ちあがる

米子市　木村春枝

本流と分かれて長い水の旅
さあスタート若い世代の走る春
都市砂漠鬼も仏も往き来する
気が付けば緑の匂い囲んでる

鳥取県　石尾かつ乃

春雨に目覚める草も木も人も
実感の湧くふるさとの駅に佇つ
主人より長い付き合いこのミシン
よそゆきの仮面をつけて母の会

鳥取県　津村八重子

せい一杯磨いて心玉にする
春の味また口にする幸せよ
明日の朝きっと咲くだろいい蕾
湧き水に命長らう糧もらう

鳥取県　山本正光

警察はもっとしゃっきりなされては
神様のお許しを得て飲んでいる
いばら道ばかり踏んでた足のうら
母と言う役目背負って世を喘ぐ

鳥取県　国森武子

宇宙知り私小さな「ちり」みたい
鬼の面人の苦悩を秘めている
山野草　山野草程期待する
着飾って初釜に娘を出した日も

鳥取県　幸家単車

淡い恋心の中で燃やしてる
手さぐりの指に当った宝くじ
税金を払う幸せ噛みしめる
はっきりと言えば心の刺も取れ

鳥取県　太田幸枝

立止まり騒めき一寸待って見る
堂々と前の机で舟をこぐ
この広い宇宙でポツリ独り生き
見るだけで心安らぐ子の寝顔

鳥取県　権代康女

孫帰り老いた部屋にも花が咲く
花束をもったいないと言う暮し
渡し舟ロマン咲かせて消えてゆく
初恋の人はこの世にもう居ない

西宮市　亀岡哲子

ブランコの風に冷たく春香る
年末の買溜め消費して二月
生花展出ると粉雪梅の花
いろいろとあったが今を生きる幸

西宮市　菊池トミヱ

たんぽぽの小道を登る春遍路
草萌える鹿も子連れで寄ってくる
暇な時地図を広げて一人旅
一夜干し北の浜辺の味届く

尼崎市　的場十四郎

伸びる子へ母は手綱を締め直す
贈られて気付く八十路の誕生日
長生きのブランコ孫とともに揺れ
無駄のない歩幅で小金ためている

伊丹市　小熊江美

幸せが来る予言なら信じよう
好きな人黙ってそばに居てくれる
親の脛かじって暮す依存主義
雪を着て春を待ってる蕾たち

兵庫県　大谷幸次郎

世が世なら三下り半の妻でいる
お下がりでみんな間に合う三人目
味噌の香の漂う朝で目覚め良し
どっさりと予算書にない春の雪

大阪市　田中節子

始めての活字の思い生きている
胸の渦恋は思案の外にあり
樹海への招待帰路は保障なし
パソコンで優越感のナルシスト

大阪市　北勝美

医師ナース努力に容体もち直し
耳元へお早うと言えば目尻ぬれ
危篤状態耐えた女房へ神の慈悲
手を握り握り返せる力出来

大阪市　本間満津子

衣食足りて礼節がない貧しさよ
そんなこと厭やと顔が言うてしまう
段取りよう仕事捗り旨いお茶
お静かにどうぞ三日月春の宵

大阪市　川内叭笑

ヤセマシタ理由不明で十キロも
どの医者も応急処置は痛み止め
ネクタイをこの手で結ぶ日はいつか
税金を次々空にバラまいて

大阪市　清水利武

外人が当麻の牡丹賞めている
春の服見て着て買ってよく似合う
鯉のぼり四万十川を泳いでる
身の軽さ何をするにも気が進む

大阪市　鈴木トヨ子

娘をしのび大きく飾る桃の花
へそくりが顔出したがる合格日
ときめきが時どき道を迷わせる
春風が旅のポーチをふくらます

大阪市　寺井東雲

車事故親に修理を頼んでる
就職に靴三足も買わされた
北海道汽車にストーブ積んでいた
北風でペダル踏んでも進まない

堺市　柿花紀美女

煮えきらぬ話は図星金の事
きらめいた星の一つは気丈な亡母
風向きが変り本音を裏返す
宇宙から見れば争いなき地球

岸和田市　藪野けい子

ガングロに素顔がいいと言うおじさん
花嫁の父になるため母娘役
電話一本で借金が増す預金
医療ミス我が身にかかることもあり

八尾市　長谷川春蘭

雛の間のこけし薄目を開けたがる
卓に置くプリンふるえて春浅し
鼻声がいやな予感を誘ってる
受験後の子の家中の瞳の和み

八尾市　宮西弥生

北風と春風背合わせ山の駅
明日もまた甘えに来たい墓の石
一合の手酌にもどる女どき
人生のおまけはじまるいろは唄

八尾市　生嶋ますみ

サヨナラの別れを舞って鶴帰り
褒められて恥ずかしそうに笑む遺影
白梅に息ととのえて顔を寄せ
御仏の寝姿おがむ壺阪寺

吹田市　野下之男

ミレニアム景気の神は未だ昼寝
しばらくは夢でさ迷う宝くじ
物思う烏を急かす寺の鐘
遠吠えで仲に割り込むタイミング

交野市　山川日出子

大阪府女性初知事ニュー話題
宇宙士の伊能忠敬 毛利さん
長島3フラッシュぜめの平和な世
初孫をまるいこころで子守唄

東大阪市　安永春

朝焼けにわたしの心燃えている
梅林の山道冷える春がすみ
手作りの陶器雛様欲しがられ
出て行かぬ風邪の神さん押し返す

枚方市　二宮山久

吟声も艶もましたる酒の席
幸せはほどほどでよし地酒飲む
春うらら年を忘れた趣味の席
同郷のよしみで進む趣味の席

茨木市　堀良江

ビタミン剤くすりでないというけれど
煎じぐすり香りの中に母の顔
リズミカル机たたいている電話
指一本口にノーノー目が笑い

寝屋川市　北岡波留吉

誇りを捨て妻の介護に精を出す
法律に束縛されてする介護
清清しい嫁の介護で生きる幸
要介護の用意をしてる卒寿です

寝屋川市　平松かすみ

絵手紙に涙がポロリうるうの日（バースデー）
ジャンケンポン役が外れて背が伸びる
ホカベンにしよう手抜きの主婦の会
久し振り子供に返り雪ダルマ

寝屋川市　籠島恵子

頑張ってくれない冬の湯沸かし器
寄りそっていかねば冬の線路かな
小物入れの話にはずむ女の輪
留守電へ名前だけでも入れておく

寝屋川市　坂上高栄

少子化に老人目立つ切なさよ
歩くのが趣味で介護を遠くする
長寿国余り自慢と思わない
仕舞風呂凍死の記事がふとよぎる

豊中市　岸田知香子

ほっこりとする日もあってお水取り
老い知らず右見て左好奇心
いかなごが友の絆を運びます
次々と芋づる不祥事警察署

池田市　岡本吉太郎

お人好し評判ばかり気にしてる
何事もおよその所で老い妥協
ほんのりとしたお人柄得してる
老い二人ジェットコースター眺めてる

池田市　藤井計光

行きつ戻りつティッシュ一ヶが貰えない
姦しい女携帯もて遊ぶ
何としても勝たねばならぬ千日手
左遷地で本音の愚痴が闇歩する

箕面市　椎江清芳

伝統の味細腕でよく支え
参観日ママの顔見て手を挙げる
先斗町舞妓は汗の出ぬ修業
嘘つかぬ掌の部厚さと握手する

和歌山市　福本英子

二〇〇〇年陽だまりを行く縄電車
ぼんぼりを灯し今年も独りきり
一通り病んで覚えた医者選び
生きることこんなにきつい余寒なお

和歌山市　山根めぐみ

急な坂道これも仏のお慈悲だろ
心眼を開いて観れば春の色
何くわぬ顔で戻った浮かれ猫
楢山から何も持たずに来いと言う

和歌山市　榎原公子

溯る鍵は鏡の中にある
鏡の中はまさしく亡母の前屈み
石礫耐えて一枚厚くなる
落花生の自慢を聞いたことがない

和歌山県　鈴木政子

キックボード幼児の頃に遊んでた
カラオケのムードに酔えず音響に酔い
白良浜砂防ネットも消えて春
母弱し されど女は強い世で

富山市　舟渡杏花

歯切れいい答え白い歯をこぼれ
うどんの旨い街振り返る逃避行
想像力の不足 人後に落ちてゆく
雪しまき寄っていきなよ 駅のそば

横浜市　山下省子

チンをしただけの料理に美味かった
一日のおしゃれをきめて床を出る
衣食だけ足りても胸に穴が空き
よくもまあ夫に似てるホームレス

十和田市　小笠原敏人

毛利さん故郷のM灯涙する
卒業式雪がたっぷり花を添え
啓蟄に蜘蛛も挨拶して帰る
平和だと思う矢先の列車事故

この句 この人

橘高薫風

朝刊を読む時わたし素顔です

岸　桂子

確かにたしかに、起き抜け新聞を読むのにあらかた化粧を済ませてから、という人は少ないであろう。男なら寝床で煙草をくゆらせながらというのもあった。平凡を非凡に詠むとはこのような句である。

男と同様、女にも仁義礼智信というふうな型を人柄の上で識別出来るが、彼女は義理をわきまえた知的なたたずまいを持っている。

グウチョキパア土をもたげる春の音

木村富美子

北国の春はどっと自然の中から到来する。グウの姿は蕨、チョキは芹や楤の芽、パアは蕗の薹や現の証拠であろう。大山の麓の山菜採りは、それぞれの人が穴場を持っている。

川柳塔きゃらぼくの踊り好きのメンバーを統括するお師匠さん役で、貫禄が備わる。

春場所の土俵に大阪四股を踏む

太田とし子

大阪の春は高校の選抜野球と大相撲から暮が開く、と言われる。力士の四股を大阪の都市の活力に拡大解釈して、早期の景気回復に繋いだ。お隣の兵庫県では花博でわが世の春を呼び込もうとしている。とし子さんと坂上高栄さんは二十五周年を迎えるねや川句会のベテラン女流、この五月に合同句集が出る。

七十年雛も妻には負けず老い

八田　敏

初節句に親の買ってくれたお雛さまも七十歳、妻の皺に負けず古びて薹長けてこられた。淡淡と叙するが、その妻は介護を必要とする身、作者のご苦労の句も多く見られる。

今は埼玉の大宮在住だが、大阪の頃の楽しい仲間を思い出していらっしゃることだろう。

当て字には書き得て妙とひとり笑み

井上　松煙

複雑な日本語には当て字まであって、野暮とか出鱈目などから、明治天皇が好んで賞味された理由で鯣（ひがい）の字を当てた魚もある。作者はふと思い違いをして書いた文字が理にかなっているので思わず北叟笑んだ。中中に面白い句である。北叟笑むも当て字。

定年退職後、悠悠と趣味をたのしむという風情の人、現役時代からの囲碁は五段。

割り勘で上司の家族思いやり

薗田　獏沓

通夜とか告別式のあと、参列者が居酒屋で故人を偲ぶ。遺族である老人や子供たちを案じての話題となったが、上句のわびしさでこの句を際立ったものにした。平社員的処世。

静岡県の大井川鉄道の名物車掌さん。お座敷列車のユニークさは西尾栞主幹の時代に団体を組んで寸又峡に遊び、お世話を掛けた。

亡父と亡母バントマイムで楽しそう

安食　友子

娘の眼に生前の父母は仲が良かった。今も彼の世で以心伝心の対話を楽しんでいると思える。まるで手話を交わすような中七の措辞が温かだ。六十をちょっと過ぎたご年配のきちんとした方。郵便局の勤務だったので郵政の恒松叮紅さんの引きで川柳に入られたか。

手はすでに藁しべだけを握ってる

政岡日枝子

作者のご母堂石垣花子さんは、昨年十一月以来脳梗塞で植物人間のように眠り続けておられる。人は藁しべ一本で何時まで生かされるのか。五ヶ月程が永遠の時に思えて悲しい。

自選集

野村太茂津

四次元に自分を置いて呆けてみる
些細な疵を暴く輩が居て困る
個人プレー好きか余計な科白だナ
脳の重みを膝が知ってる石畳
雨が降る熊野路万葉韻き合う

二宗吟平

甘えてはならぬきっぱり跳ね起きる
格子から呼んで下さる趣味の友
年相当見て下さらぬ黒い髪
雪洞を待ってるように土手桜
福音はないかと開ける手紙受け

黒川紫香

食欲のない一日の長さかな（春風邪をひく）
風邪ぐらいなんやと叱りつける奴
食欲が出た日に届くメンタイコ
春めいて焼はまぐりが食べとなる
勢いよく飛び込んで来た春便り

越智一水

草の実を鳥が落として草がはえ
水音を立てずに寒鯉は動き
春よ春　猫が家出をしてしまい
僕の句碑伍健のそばに建ててくれ（句碑建立　2句）
句碑の庭　絶景と言う法南寺

宮口笛生

冬のオホーツク極寒体験の旅
冬厳し冬美しい北海道
着ぶくれて北海道の雪に立ち
ぬくぬくのバスで尺余の雪景色
流氷をごつんごつんとガリンコ号
幸せは摩周湖晴れて撮る写真

工藤吟笑

栄転の子に下積みの父が居る
喝采はないが一日昏れてゆく
次の世に縁が欲しい植樹祭
家建てて先祖に済まぬ土地を売る
心電図無理は効かぬと言っている

築城の苦労は知らぬ三代目
ツマミ食いヘルスメーターが見ています
木を伐って地球砂漠になってゆく
ふる里へ延びる線路が錆びてゆく
テトラポットに砕ける波の詩がある

木村あきら

不器用な足跡僕の履歴書だ
今もって妻を太陽だと思う
饒舌が過ぎてメッキが剝げてくる
見掛けでは分からぬ人の裏表
肩書を捨てれば笑顔戻るかも

川島諷云児

十年日記米寿まだまだ生きる気で
調子よろしいと医者に言われて元気出る
自業自得の果てを福祉に縋りつき
介護法私に用はないそうだ
長生きのコツつつましく生きるだけ

金井文秋

沈丁花誤解も一つ融けました
鬼薊昭和維新をくぐり抜け
叙情詩の真正面に女あり
埋めきれぬ溝をしずかに受けとめる
螺子一本忘れて薔薇が開かない

波多野五楽庵

雪だるま雌雄鑑別せぬように
空の青生命保険満期なり
アメリカ産「ふじ」が津軽を攻めてくる
立佞武多仰ぐと胸の血が騒ぐ
カルチャーは耕すことや文化なり

斉藤劦

十年の旅券世界の夢がある
どの顔もうきうき旅券申請書
ペン先が関空指してる申請書
あれこれとプラン練ってるシルクロード
あほらしい嘘で固めた辞任劇

芳地狸村

思慕ひとつ傘にかくして試す蝶
古里は蟹の味噌汁うまいとこ
三匹の鬼胸に飼い敵も来ぬ
カルテからそこそこせずに待てという
ヤジロベー燃えると揺れがおさまらず

小西雄々

山茶花が好きな野犬が垣を越す
前以て嘘を言う気はなかったが
人間の誠認めぬ多数決
勝ち負けの境にあった徳俵
なぜなぜがうるさくなった孫の知恵

月原宵明

青空を嫉妬している花の乱

白い雲恋せし人と対話する

大空へ飛び出す自由バラを買う

てまり唄教えてくれた鰯雲

見上げれば倖せそうな流れ雲

板尾岳人

学識はないが達者な出雲弁

力作を見ると絵心ゆさぶられ

あの頃の家計簿借りが多かった

若芽食う虫の知恵にはかなわない

風呂敷を拡げ調子のいい話

恒松叮紅

日当りのよい裏口を開けておく

楽しいな演歌の孫が大ヒット

することがないから妻の靴みがく

裏の裏読むほど知恵も欲もない

巣立ちした子の部屋がまた一つ空き

小林由多香

大役を買っている気のガードマン

成人の息子の眉に糺される

大臣の今日も景気を仄めかせ

今日も無事帰ったなぁと置くバイク

アルコール今夜のドラマ待っている

榎本吐来

善戦もここまでダルマ慰める

美しい女美しい嘘を言う

出生届父の名前に僕が居る

午前二時半青森とあり雪眠る

まっ白い大地渺渺雪の国

遠山可住

ケイタイがなくとも支障ないくらし

言うべきをはっきり言えば寒い風

一合で充電たわいない寝息

八十から月日が急に速くなる

板長の舌も帰れば妻の味

石川侃流洞

景気回復あかりが見えて道遠し

鼻の位置真ん中で無いゴッホの絵

乱高下 株もわたしの血圧も

足るを知るだけで幸せだと思う

国歌 国旗 卒業式が無事終る

堀端三男

添い遂げる夫婦に温い春日差し

悲喜半ば四月はいつも騒がしい

用心をして冬を越す炬燵守り

春らしい雲の白さに浮いてくる

球春に老いを忘れて血を沸かす

田辺灸六

孫が来る三十分ほど早く起き
軍歌うたって自ら鼓舞する後遺症
来年の約束しかねる七十歳
春が来たとてどうてことない古希の僕
似たような境遇似たような句をつくり

野田素身郎

海外は時効停止の逮捕劇
追打ちにノック神妙な大マスク
異状なし巡回直後荒らされる
その火照り冷ます素足や土ふまず
大阪弁切迫感が伝わらぬ

西田柳宏子

優しさを八等身で受けとめる
石ころに躓く五体不満足
約束を忘れていない北斗星
私が汚点になってゆく宇宙
肺癌にならないお茶を飲んでいる

土橋螢

春や春いきなり核が目を覚ます
世界中のサイフが風邪を引きそうだ
念仏はいらぬ安楽死が欲しい
大変だ閻魔が賄賂出せと言う
世紀末無職の首を売りに出す

両川洋々

何もかもよかったと顔で笑ってる
昔むかしよかった話してねむる
どうしても行くんかとこづかいわたす気で
まんざらでない顔でかど口までおくる
悪いくせが出たなとひげをそっている

正本水客

平和つづいて良識に迷いが出
夢でいい宇宙から眺めたい地球
奥山の温泉みどりに生き延びる
楽しい顔が集うぬくもりのある詩の道
柳友と酌みかわすぬくもりの別れ花吹雪

藤井明朗

水温む　めだかのお伽噺する
春や春　職場もなだれ注意報
ボランティアで残す田んぼという国土
置物も見栄で最高学府出る
民主主義の衣をまとう数合わせ

舟木与根一

不器用を努力で補ってる心算
明日の夢ばかり追いかけした火傷
歯に衣を被せ世間を狭くいる
ユーモアが通じず答出てこない
回りくどく言うから縺れ出す話

阿萬萬的

客も寝てやっと気付いた雨模様
花と居る写真美人は隣の娘
タンポポが風にまかせたとこで咲き
仏具拭く今日は釈迦の日花まつり
咲いたならきっとこの彩種袋

西村早苗

国なまり心なごんだ里の川
まな板の音から朝が明けて行き
その内になんとかなるさ夢を持ち
物忘れ年だ年だと笑っとき
年度末ここも道路工事中

弘津柳慶

ほっといて下さいうちの好みです
三日月の針に掛かって来た悪女
すれ違う犬とわたしは他人だな
悪人と知っていながらおじぎ草
八十の齢かぞえて何もせず

高杉鬼遊

両親と別れた日など指を繰り
初孫は形水さんの寺の主
ホワイトデーは殆ど孫の為にある
宝くじ買うたら詣る島がある
己が顔鏡で見てる自選集

田口虹汀

桃さくら陽炎 宇治の鐘の中
花の下 我が身に飾るものはなし
椿 梅 禅寺の庭づくし
一休寺の椿 問答掛けてくる
次の世もわたしを咲かす椿の木

八木千代

思い出は母にもあった夢二の絵
一粒ずつ苺つぶして反省す
決心のつかないままに地図たたむ
花育てしみじみ季節を知る余生
共通の友あり温い茶の間の灯

藤村〆女

出しゃばりに気付き出しゃばりひっこめる
脳みそを使うとお腹減ってくる
明けがらす次の一手を持ってくる
蟷螂のたまご出番を待っている
サラサラと流れる小川見にいこう

河内天笑

雪見酒かの家持も招んでやれ
わが庭にわれと名付けし夢見石
嘴の形に鳥の生きるすべ
ウインクの雁字搦めに会いにけり
春にして死ぬときの灯は月がよい

橘高薫風

川柳太平記(264)

川柳の群像

矢野佳雲

東野大八

本名・矢野勘一、大正五年七月一日今治市波止浜生れ。今治中学に二年ほど通い、そのあと父親の勤務先の北海道函館中学に転校したが、函館大火に遭い五稜郭へ避難したことなどの体験から、家族たちと東京へ引揚げたが、勘一だけは愛媛師範へ復校して、生地今治の地を離れなかった。

「今治は父祖の眠るお墓がある。ぼくはそのお墓を守るのだ」

というのが若い彼の信条であったようだ。

師範を出ると地元の小学校に勤めたが、旅行が大好きで、ボーナス月にはいつも受持ちの生徒5、6人を連れて、あちらこちらを写生旅行に連れ歩いたり、家族旅行と称して手近の街へ一泊旅行に案内したりして喜んでいるという、愉快なセンセイだったらしい。

ある日、数人の生徒を連れて銭湯に乗り込んだのはよいが、着物をそっくり風呂荒しの板場稼ぎにやられ、一人の生徒が家へきて

「先生がめがぬの他は着物全部を盗られたんです。裸で困るから代りの着物下さい」

というケッ作もあった。

とにかく生徒好きで、正月などは家へよく生徒達をガヤガヤと連れこんできて、ワイワイ騒ぐのがとても好きな人でした—とは、貴美夫人の思い出話であった。

「喜寿の祝いには、私たち夫婦のため、生徒や父兄の方達が申し合わせ祝いの席をわざわざ設けて下さいました。本当に感激いたしました。主人は歌舞伎・相撲・美術館に、寄席が好きで、よく連れ歩いて頂きましたが、老後は嫁に行った娘の家へ行くのがとても楽しみのようでした」

貴美夫人のお話の中には、教え子が天下の名監督黒澤明の弟子になった—との嬉しい話もまじっていた。

この人が川柳塔の同人になったのは、昭和59年2月ごろで、西尾栞主幹の頃だった。

母追うて走った道よ烏瓜　佳雲

立っていりゃ柱寝ころびゃ丸太ん棒　〃

花柄の花瓶が花の気に入らぬ　〃

大あぐびつき足すように妻がする　〃

「佳雲さんは愛媛師範学校出身で、約四十年間教育に挺身し、小中学校長を四校歴任し今治小学校を最後に、教育生活を終え、昭和52年河野記念館支配人の頃より、川柳と絵画を趣味に真剣に取組み、その頃汐風川柳社に入会し、川柳活動を始められました。

元来、教育者として文芸に素晴しい素質があり、推されて昭和55年汐風川柳社役員となり、その頃から柳誌『汐風』の表紙絵を描きはじめて約二十年間続け、遂に平成11年5月号のグラジオラスの表紙絵が絶筆となりました。

また55年12月汐風叢書として出版の『月原宵明…その人と川柳』句文集のその文章は、当時編集委員佳雲さんの担当で、実に立派に書き終え誰もが感嘆したものであります。」

(月原宵明悼文抄録)

立てるより腹は抱えて笑うもの　佳雲

このような作柄の中で、佳雲センセイの活躍は続き、平成十年度には次の句が〝路郎賞〟の金的を射止めた。

頂点に立つといくつも影が出来　佳雲

「四十年間教員をした佳雲さんの句は、素質の上に推敲と悟りがあり、いわば苦労の賜物だと思われます。

また、佳雲さんは、路郎賞を受けても同志に対し別に披露もせず、ただ黙々と勉強を続け、万事謙遜して表へ立たず、自己を慰める好きな酒も、誘われると応じるが、決して自分から発起せず、その場所も他人と逢うことを好まず、座して静かに語り、大声も歌も唄わないのが常でありました。黄金時代の句は次の通りです。

酒癖のさまざま酒に罪はない　佳雲
黄砂とは知らず賞めてる春霞　〃　〃
訳言えと言うから嘘を考える　〃　〃
変り身の速さで雲は勝負する　〃　〃
木から落ちた猿に学んだことがある　〃　〃
体調を崩した最近の句です。
旅もしつくし栖山だけ残り　佳雲
家中が乗り気本人だけ嫌気　〃　〃
看病三日されて死んだらなと思い　〃　〃
この歳までもった夫婦の化かしあい　〃　〃
深い川誘う男の声がする　佳雲

御子息は別居、俳人の奥様と二人で俳と柳を語り合ったお宅も、今は奥さま一人となり淋しい矢野佳雲居となりました」（月原宵明悼文余録）

今治の汐風川柳社は、昭和24年1月に、吹揚川柳社とみなと川柳社が一つになって創立されたもので、その折のリーダー格は花岡鬼外・長野文庫・月原宵明・岡田晴晴・石手向上庵・武田紫陽ら六人で、本部は文庫の家である今治市共栄町二の文学社だった。

機関誌『汐風』を発行したのは昭和24年2月からであった。この会の主な行事は、年一回川柳研究大会の開催の他、七面、綱敷天満宮へ奉納額や、同人連合句集の発行等を行っている。矢野佳雲は、創立当時から役員の一人として名を連ねていた。

この汐風例会に、当時今治市の新聞社員だった筆者も、激務の中を一回だけだが参加したことがある。その折のこと、親友だった長野文庫が一人の色の白い、謹直さを絵に描いたような人物を紹介した。この御仁が佳雲センセイだったわけだ。

「この先生は、今治中学の教師が仕事だが中々筆も立つし、会運営面でも先頭にたってどんな雑事でもコナして頂く便利な方だ」

そういって彼は「句はこれからだが、なかなか素質がある」とつけ加え、頭をゴシゴシ掻きながら「わが社は、伍健イズムの真善美がモットーでね」ときっぱりいった。

「まあそういうことでやります」

と佳雲先生はニコリともせずにそう答えられていたのを昨日のように思い出す。

汐風川柳社の系列は、玉川町畑寺句会・波方町の姫だるま句会・伯方町の灰皿吟社・波止浜町のはこがた吟社の四つがあったが、佳雲先生はこの一番あとのはこがた吟社の波止浜町生れときいたのもこの時だったと思う。

「波止浜町はいい町です。あそこのタコはよそより一番うまい」

と文庫が持前の口の悪さの何かのついでにそううつけ加えたものである。

平成十一年五月三十日死去。享年84。教堂智勘居士。

波止浜といえば、今は亡き古川鶴声を思い出す。彼もここの生れで、なぜか私を「兄貴―」と呼び続け、川柳塔同人にうるさがられたものだが、そのイミが今だにわからない。佳雲先生の名をきくたびにこの鶴声の―「兄貴―」の呼称をなぜかよく思い出す。

▼次号は「**定金　冬二**」

誹風柳多留二四篇研究 17

小栗清吾・橋本秀信
粕谷長生・山田昭夫
伊吹和男・大野秀二
清博美・佐藤要人

121 **けいせいのあいそづかしを舟でいゝ**

小栗 仙台高尾の句だろう。普通、愛想づかしは妓楼でいうものだが、高尾の場合は舟の中で言ったという句だと思う。

舩きりで玉のこしへはのらぬ也　一六5
よくふりおつたなと舟てむこひ事　天元仁2

清・佐藤 賛。

122 **年の暮明てくやしき嫁をとり**

小栗 年が明けてみるとくやしい思いをする嫁を年の暮れに娶ったという意味。いわゆる「暮の嫁」（年の暮にもらう持参金つきの花嫁）の句。

とりあえず年を越すために持参金付きの醜女を娶ったが、無事年を越してやれやれと冷静に顔を見ると、なんともくやしい思いをするものが身辺に残った。人間、窮地に陥ると長期的な判断ができないものなのである。

年立帰りうつとしい嫁を見る　二五7
極彩色の大津絵を暮に呼　二八17

粕谷 賛。浦島太郎の唱歌に「あけてくやしき玉手箱」とあったと思うのですが、当時の赤本などにこの文句がなかったでしょうか。

山田 御伽草子の『浦嶋太郎』に、

君にあふ夜は浦嶋が玉手箱
あけてくやしきわが涙かな

とある。

伊吹 『古川柳と謡曲』で、謡曲「海士」の「夜こそ契れ夢人のあけて悔しき浦島が」の文句取として主題句があります。

清 謡曲「海士」からの文句取に賛。

これは余談だが、明治の尋常小学唱歌もまさに文句取だったわけですネ。

佐藤 同右。

123 **三会目呑ミものんだり喰ィもくい**

小原 吉原の遊女は、初会・裏のうちは余り客と親しく飲み食いをせず、三会目で馴染みとなるに至って、飲み食いもし、肌も許すという約束事を詠んだ句。

句意は文字通り。言外に、そういう決まりではあるが、それにしてもよく飲みよく喰うな、とあっけにとられているところだろう。

三会目あたりなますへ箸を付ヶ　三34
籠の鳥三度めからハ餌つく也　二九17

清・佐藤 賛。

124 **とういなんばんほくてきへかり込れ**

小栗 「東夷南蛮北狄西戎」は古代中国で四周の異民族を表す蔑称であるが、ここでは、それを江戸の遊里に当てはめて洒落た表現で、それぞれの所在地の方角から、東夷は深川、南蛮は品川、北狄は吉原のことである。

主題句は、いわゆる「けいどう」によって捕縛された深川や品川の女郎が、吉原へ奴として送り込まれたことを詠んだもの。「けいどう」は、「私娼窟の手入れ。臨検。狩り込み。吉原の公娼保護と岡場所の風紀取締を目的として不定期に町奉行が行った。多く吉原よりの訴えによる。捕らえられた私娼は奴と呼ばれ、吉原の河岸などで勤めさせられた」（『江戸語の辞典』）ものであるが、歴史的経緯、実態などは、花咲一男氏『岡場所図絵』、石井良助氏『江戸時代漫筆』などに詳しい。

とういなんばんほくてきと国家らう　安六礼3

中丁にの、字を入れて三年住ミ　安二義1

清・佐藤　賛。

125　**来た当座下女吹がらを手へはたき**

小栗　奉公に上がったばかりでまだ田舎の生活丸出しの下女が、煙草の吹殻を掌へはたき、これを次に煙管に詰めた煙草の火種にする動作を詠んだ句。田舎の労働で手の皮が厚くなっているので、吹殻を転がすようにしていればそんなに熱くないのである。

手の内でせなあふきから廻ス也　一五6

すこすぼめつきや吹から手へはたく　三五22

橋本　賛。吹殻は吸い殻

山田　賛。但し、本句は単に田舎の風習を詠んだ田舎蔑視の句。

清　賛。この動作は野良仕事の一服で鍛えた技術。

佐藤　賛。

126　**土俵からしろうとを呼急な事**

小栗　相撲興行の時、観客に急用ができたので、土俵の上から呼び出しが観客の名前を呼んだのであろう。呼び出しは本来プロの力士を呼ぶものであるのに、この場合は素人を呼んだと洒落たのである。

清・佐藤　賛。

127　**御短気引ことにして又いひり**

小栗　引き事は、①古言故事などを引用して事を説くこと。また例として引用すること。②相手に無心をいうこと。（『江戸語の辞典』）

具体的な状況がよく解らない。ご教授を乞う。

①「いびる」にこだわって嫁姑関係とすると、嫁が姑に怒られたのを「御短気な」とでも口をすべらせたので、それを根に持ってまたいびる様子。

②殿様の短気故に御殿女中がなにか失敗。それを長局辺りがうじうじと。

③「御短気」といえば浅野内匠頭刃傷。それを「引き事」にして「いびる」ということになると、仮名手本七段目の九太夫が由良助に蛸を強いる場面。

たん気故名代の潮も人のもの　明二礼3

橋本　「御短気」とあるので、浅野刃傷。それを種にして、姑が「若い時はがまんが肝心」などと恩着せがましく嫁に説教しながら、ねちねちいびるという情景を考えた。

山田　橋本説のような事か。

大野　橋本説妥当か。

清　松の廊下の引き金ではないか。吉良上野介が浅野内匠頭を……。この説「御」がちょっと邪魔だが……。

佐藤　『仮名手本忠臣蔵』から、この場面を捜し得ない。礎稿③の七段目かも知れないし、清説も魅力があるが、この説を裏付けるためには、他の忠臣蔵脚本を調査する必要があるでしょう。

秀句鑑賞

同人吟　川島諷云児
―4月号から

平成四年十月以来約八年振りの秀句鑑賞の機会を頂き感謝に堪えない。同人諸氏の玉句を、一句でもおろそかにしては申し訳ない思いで、三七一人一八一四句を老軀に鞭打ち丹念に拝読させて頂いた。それにしても至難の業であった。毎月選句される薫風主幹のご苦労が偲ばれる。

十人十色人それぞれ感性に違いがあるように、句の解釈方にも違いがあると思うが、私なりの見方で、作者の句意と相反したものになったものもあると思うが、ご容赦願いたい。

今回特に印象に残ったことは、思わず手を叩きくすっと笑いが込み上げてくる上品なユーモラスな句や痛快な時事吟が意外に少なかったことである。紙数に制約があるため十二句程度しか鑑賞の対象句にあげられなかったことが心残りであった。

どうしょう富湖おなかが空いてきた
ごめんよ富湖今日も涙が出てきたよ
川上大輪

読む者の胸をえぐるなんとも言いようのない悲しい句である。

生者必滅会者定離とは言いながら、あまりにもむごい神の仕打ちだと思う。これからという時に、突然最愛の伴侶を亡くされた大輪さんの心情を思うと、なんとお慰めしてよいのか言葉もない。一人残された戸惑いと、寂しさと悔しさが句に如実に吐露されており、思わず目頭が熱くなってくる。妻を憶う素晴らしい句と思う。

鬼の目を盗んだ筈の花名刺
松本ただし

うまく言い逃れた筈が、うっかり仕舞い忘れた証拠を突きつけられては、どうしようもない。迂闊でしたね。男なら誰もがかつてはこれに似たようなことを一度や二度体験したであろう。浮気もほどほどに……。

時計から逃れてのたりのたりかな
徳山みつこ

蕪村の句
「春の海ひねもすのたりのたりかな」
を思い出した。何気なく見落してしまいそうな句であるが、じっくりと味わって見るに価する内容を秘めている。最初は、宮仕えの辛さから逃れたい男性の句と思ったが、作者が女性と知り視点を変えてみた。

子育てや、姑との確執、煩わしい家事から逃れ鬼の居ぬ間に命の洗濯をしたい気は、男女を問わず誰もが持っている。偽らざる願望が手に取るように伝わってくる。

春だ春　化ける小道具買いに出る
堀畑靖子

待ちかねた春の跫音を聞くと、花も虫もそして人間も浮かれだす。

特に女性ともなれば、老若を問わず着るもの、身につけるもの、化粧も派手になる。

中七の化ける小道具とは女性ならではの心憎い表現がおもしろい。

追従の笑い定年から消える
大橋政良

サラリーマンの悲哀をけれん味なく詠い、仄かなペーソスを匂わせたところは、さすが百戦練磨のベテランらしい句である。

言いたくもないお世辞、泣きたいようなお追従笑いの世界から、定年でやっと解放されほっとした気持ちが、句全体からにじみ出ている。何とも言いようのない切ない気持ちを、なんの衒いもなく淡淡と読まれているところ

はさすがで、共感を呼ぶ句である。

ふる里で何方ですかにされてくる

酒井　輝

なんとはなしに、都会の荒んだ気持ちをなごませ慰めてくれるのがふる里の筈。訳があって五年振り否十年振りの里帰りだろうか。実家には既に父母もなく、近所も二世三世の代替わりとなっており、自分を知る人は誰も居ない。反対を押し切り田舎に見切りをつけて都会に出た報いなのだろうか。

何とも言いようのない切ない気持ちを中七の何方ですかが全てを物語り、一抹の淋しさと後悔が句からにじみ出ている。

喧嘩しても一日笑ってもいちにち

神夏磯　典子

言葉や感情の擦れ違いから、人間である以上親子、夫婦、兄弟、友達等々の口喧嘩は、日常茶飯事のことである。新聞記事を賑わすような喧嘩は困るが、後で笑いあえる喧嘩ならむしろ刺激があっておもしろい。

句から想像すると多分夫婦喧嘩を詠まれた句ではないかと考えたが誤りだろうか。

夫婦喧嘩は犬も食わないの例えのとおり、そこは適当に願いたいものだ。

感じた通りを何の修飾もなくすんなり纏められ味のある句である。

紳士面しても男は狼よ

川村映輝

女性側から見ればその通りと言いたいところだが、全ての男性が狼とは限らない。

男の中にも本当の紳士は存在することを確信している。それにしても、作者自身から男はみんな狼と告白されている正直さと勇気を称えたい。作者の警告を真摯に受け止めよう。逆にこんな言葉を思い出した。

外面似菩薩内心如夜叉

苦労かも知れぬがもう一人産もう

高田　美代子

子供を持った親なら、生みの苦労育ての苦労を知りつくしている。いろいろと人に言えない事情から、簡単に生み、簡単に捨て、簡単に殺す。嫌な世の中になったものである。

折角この世に生まれ来て、親のエゴから尊い幼い命が奪われてゆく世情に義憤を覚える。少子化が進み、日本の将来が危惧されている折から、作者の心意気に拍手を贈りたい。

底無しの袋に詰める欲の皮

井齋　一齋

金欲、物欲、色欲と人間の欲には切りが無い。あまりあれもこれも欲ばっては、どっちも付かずになってしまい結局は泣きを見ることが多い。欲はほどほどに……。

手ぶらでは三途の川も渡れません

坂上　高栄

三途の川どころか、現世では賄賂がないと生きていけない住みにくい世の中である。

エリート官僚を始めとして、これを取り締まる警察官までが毎日のように三面記事を賑わしている。昔からの日本人の悪い癖だ。

消費税がつくかも知れないが六文あれば渡れる筈です。上五でこの句が生きおもしろさを醸しだしている。

最後にどうしても鑑賞の対象句としたかった句と作者を羅列させて頂くことにした。

不機嫌な街で流行色は黒

西出　楓楽

日の丸は折目正しく箱の底

古川　喜美子

悔い一つ畳んで落ちてゆく眠り

岸　桂子

いたいいたい言うてるうちは大丈夫

菱田　満秋

好きという負い目が君を待つ時間

志田　千代

わたしにも欲しいと思う象の鼻

三好　専平

満ちておごらず欠けてくじけぬ月冴える

三宅　保州

河内天笑選

精神は真っ直ぐだけど字が曲り
味噌汁のさめない距離も好し悪し
子宝の湯とは知らずに老い二人
へそくりの顔もふくらむ花だより
水温み専業主婦も落ち着かず

八尾市　田中トシエ

息潜め土筆と出番待っている
子育てに五感奮わせたちむかう
シンプルに始めることが愛なんだ
電線にカラスの16分音符
甘辛のどちらか一方やめなはれ

松江市　松浦登志子

ひとつ買ってひとつを捨てる日をかさね
不器用に一病を抱く冬ごもり
好き嫌いあって愛とはむずかしい
さりげない言葉に痛み分る人
聞き上手とぼけ上手な大きな耳

羽曳野市　川口信子

はよ蓋をせんとこっちも匂いだす
家計簿と意見が合ったことがない
神さまのミスかもしれぬ冬の蠅
リストラのない猫といる南縁
脳みそに余白ないのかまた忘れ

綾部市　藤田芳郎

籤引で議員選べばいいのです
ぼくの銀行 行ったら名前変わってた
警察の悪事で社会面埋まり
判決が出る頃事件忘れられ
あちこちが悪いまとめて加齢症

堺市　梶本哲平

病院を隠れ家にする金バッジ
悪徳の報い忘れた欲の皮
人間を叱ってくれる神が欲し
性が愛となる青春の一ページ
育児室明日の日本が眠ってる

鳴門市　八木芳水

銭勘定してから医者にかかる老い
心肥大ご苦労さんと言うべきか
開発が川の流れを変えた故里（ふるさと）
薬より安心感が先に利き
三人でやれば出来ると誘われる

岸和田市　亀井皎月

会席の梅一輪が雅添え
いい葉書貰う　頭痛が消えてゆく
ホークスを背負った人も虹と消え
グラウンドに銭を残して旅に立つ
忙しい筈リハビリに追われてる

河内長野市　水谷正子

ライバルの笑顔に何かかくれてる
体中ストレッチして春を待つ
夫婦して涙腺緩むテレビ前
方言に通訳ほしい囲炉裏ばた
青空が元気にさせて留守多い

横浜市　田中笑子

角が出て若嫁さんも家に馴れ
出る度に打たれる杭も気の毒だ
頼母しいのは金だけと教えられ
愚痴不足鎌で刈ってもまた生える
土蔵壁白の空間語りかけ

鳥取市　河田のり代

肩書のない再会を笑い合い
装飾に過ぎないピアノ置いてある
時計を五分進ましておく律義者
その時はその時介護法知らん
うどん派とそば派に分かれ旅の昼

今治市　渡邊伊津志

出しゃばったことはしないという遣り手
変らない姿勢が画風創り上げ
変らない心真実探し出す
波に身を任せて波に乗る鷗
暖流に漁師の汗がまぎれ込む

横浜市　川島良子

自己紹介川柳一句披露する
住職も昇進をした朱の衣
手術する為に体力つけている
もったいないもったいないで腐らせる
親だけが悩まされてる通知表

鳥取県　澤裕子

蟹づくし至福の顔がならんでる
雲行きを見つつ一番後を行く
ペンだこは私のくせ字知りつくす
背かれたショックをバネに強く生き
いざと言う時の見せ場は持っている

大阪市　尾崎黄紅

うめ桃さくら　わたしは桃に生まれたい
マニュアルのような笑顔でお大事に
検査値にふりまわされている主治医
ドアチェーン心の鍵もかけました
苦しくてそして楽しい五七五

岡山市　大森純子

廃屋の梅花に意地を教えられ
母からの童話の夢がまだ消えぬ
中卒の子を堂々と言う和尚
笑わせて笑えぬ自分悲しすぎ
二人三脚姉と絆の介護坂

倉敷市　森本文子

梅林から春の序曲が動きだし
和解したつもりの夕餉骨がある
追伸の母の温みに和まされ
孫を真似わが家にはやるカタカナ語
鶴千羽折っても届かない祈り

岡山県　国米きくゑ

春愁か小さい言葉引っかかる
やがてくる老いの設計ままならぬ
白い目のなかで笑顔の人に会う
細ぼその暮らしに育つ愛もある
一言が纏まる話ゼロにした

鳥取市　横田春名

休日はのびのびしたい割烹着
老いひとり一番ほしい人の声
合格へ家中上がるオクターブ
目一杯頑張るなよと肩がいう
おしゃべりを一区切りさす俄か雨

鳥取市　有沢せつ子

充実の時間はすぐに消えてゆく
自信つけ間もなく晴れの舞台踏む
めでたさが満開となる披露宴
二日酔理由に使い別の用
行きずりに立ち寄った店常連に

鳥取市　福島庸二

リストラ後　土と戦い生きのびる
啓蟄にもの申したい腹の虫
じっと堪え春をうかがう新芽たち
着膨れてころんでも怪我いとうない
白足袋がきりっと似合う女坂

鳥取市　谷岡清子

すてきだねトリプルデートするなんて
若い日を重ねみている娘のデート
川柳とでっかいデート続けよう
骨折もいいな川柳塔を読む
喜びを五七五へラップする

鳥取市　山宮愛恵

正念場母の強さを見直した
貫いた一本道は長かった
不祥事の噴火がとめどなく起こる
飢えた日を思えば不況怖くない
暖冬の予想はずれて山眠る

鳥取市　録沢風花

陽のあたる方を選んで歩く道
嬢ちゃんか坊やか見分けつかぬ服
旅をするにも薬を提げる年になり
財よりもゼロで元気の方がよい
簡単に臨終ですと医師は言う

鳥取市　山口千代子

声からし般若心経心こめ
杣屋にも神楽舞来て気が休む
七草の粥から春が萌えてくる
あっさりと身をかわされたやるせなき
からころと木履音たて神詣で

鳥取市　西尾敬之介

川柳と出合いこころの窓が開く
二十世紀終わりゃ梨の名どうするの
天国へやがて追いかけデートする
武装する心の紐がほどけない
心の鬼退治せぬまま年を食い

倉吉市　猪川由美子

このあたりまでが縄張りらしい顔
晴れた日は誘いの電話忙しい
気晴らしの種を二三コ持っている
じゃんけんに負けてばかりで鬼になる
モナリザも今日はなんだか伏目がち

米子市　足立由美子

脈脈と続く老舗が子に重い
父さんは夢の中まで仕事する
過労死になるほど仕事するものか
酒のんでようやく父の顔になる
年齢に合った輝き忘れまい

鳥取県　山下節子

献立に大根かかさず冬もすぎ
春うらら心に花が咲いてくる
春日和布団ふっくら眠りすぎ
鶯に鍬を休めて耳たてる
山菜が五月の風に匂いだす

鳥取県　山岡久枝

選ばれて二倍嬉しい自信作
ぼたん雪眺めて浮世離れする
6Bをくれる人有り初句会
町民の未来を思う街造り
反省はきっと飲めなくなってから

鳥取県　河本照子

鳥取県　鳥羽直市

傘となり杖にもなって忙しい
生涯を鉄路と生きて悔いはない
週休二日大正生れなじめない
乾杯をしたが賛成していない
大山の雪化粧みて夢つなぐ

鳥取県　鳥羽玲子

夫婦だけ分る合図で右左
挨拶をされてあわてる眼のかすみ
通帳の利子をしみじみ確かめる
化粧のり悪くどんより気もくもる
工場も遠慮しがちに煙出す

出雲市　佐藤治代

炊きたてのいかなご届く春一番
分け前を貰った私黙ってる
平凡に甘え刺激がほしくなる
老いたくはない老体に鞭を打つ
淋しさも笑いも分けて日向ぼこ

出雲市　加藤スズコ

雪かぶり庭の八ツ手の呻き声
年始め親孝行を貰う旅
ステッキを休め焚火の熱いお茶
雪の花見せて上げます仏様
乾杯の指名うなずく年かいな

出雲市　城多喜

身ぶるいをしてわたくしの殻を脱ぐ
有頂天鼻から欠けてくる兆し
私をふるい立たせる旗を振る
もう春の声がしてくる電話口
初対面メガネきっちり拭いておく

安来市　原煩悩児

けもの径男のわたし怖くなる
我が墓地をぼつぼつ用意して置こか
前狼後虎 中でわたしは金縛り
女房の家来になって旅楽し
古女房労りバスツアー楽し

松江市　銭山昌枝

魂胆の透けるお世辞を軽く聞く
陽水のラプソディー聴く春の宵
春うらら時効の日記陽にさらす
春の使者美白パックでやって来た
春嵐友の訃報が舞い上がる

益田市　岡田たけを

墓の前でどっちが先か議論する
孫巣立ちインコ無口になってくる
貧しさに負けない花を植えている
足下を見られシンドイ小商い
手塩にかけ育てて今は余所の花

水仙のうなじくすぐる春の風
こんなとき水が飲みたい蘭の鉢
風花がふんわり解けた鼻の先
けんけんをして見せ烏さっと飛び
蓑虫がぶらりぶらりと春を待ち

島根県　菅田かつ子

いい仲間時には夫のたなおろし
リラックスさせてくれます出雲弁
腹の立つことも寝顔に拍子抜け
あれやこれ義理立て家計簿の吐息
雑草の強さ這いつくばってでも

島根県　武島ちよえ

寒椿心の隙間満たされる
腹時計の十時三時にのむ渋茶
一合をふっくら炊いて二人前
洗顔へ部分レンタルする入歯
ぼんやりと鏡と語る一人部屋

島根県　多々納テル子

草原の風が奏でる馬頭琴（旅行吟）
人生の会うは別れのステーション
ローカル線淋しく過ぎる無人駅
国会は国民不在のにらみ合い
自販機で五百円玉泣いている

島根県　毛利幸

年金があって大事にされており
毒舌の裏に哲学あるらしい
背が伸びて日本魂細りゆく
警察はほんとは何をしてくれる
万歳をすると淋しくなってくる

島根県　福間博利

平和な村敵と味方にする選挙
無学の母が説いて聞かせる人の道
レントゲン胸の秘密も撮られそう
日記には書けぬ想いに身を焦がす
老いてなお恋の直球変化球

宇部市　高山清子

ずる休み同士と馬が合うのれん
啓蟄に老いも冬眠から覚める
吊橋を揺すって見たくなる妬心
電線の凧はミイラのままで揺れ
出足から妻のペースに狂わされ

宇部市　中田忠夫

キリストの助けを借りて仲直り
親友はちょっとお先と天国に
父は母に感謝感謝の金婚式
定年後嬉し恥ずかし受験生
プレステ2子供はみんな知っている

八幡市　粂野和俊

時間軸テレビにおいたスケジュール
雛の日を忘れぬ妻のちらし寿し
足腰に喝を入れてる万歩計
正直にノーと言うから嫌われる
レンジでチン父に手馴れた燗徳利

北九州市　岡田幸生

打ち明けて友達になる苦労人
物言えぬ妻が涙で愛想する
潮時を陰暦で読む上棟式
咲く度に昔の苦労実を結ぶ
便利さになれて肥満に悩まされ

香川県　松村輝夫

風花の裸祭りに湯気が舞う
前ばかり向いた子供の尻拭い
日月が糾うてきた土性骨
片意地になれば何処かで蹴躓く
飲み仲間桜前線待ち構え

香川県　瀧井勝

金毘羅の空にぎわして幟立つ
梅香り試歩の杖にも慣れてくる
広い背に好きという字を書いてみる
野良の母一番風呂が好きだった
めんそーれん愛嬌にサンゴ買わされる（沖縄旅行にて）

香川県　清川玲子

シャトルまで夢のばしたい凧の糸
チョットだけ見せてとナース裾めくり
タレントの人気で拾う浮動票
母さんの女心がゆれる夜
点滴と明日の命指切りし

高知県　近森功

金婚のわが手をじっと見て無言
波風の立たないように黙ってる
久しぶりはてこの人の名を忘れ
戦友の死に米寿の夢がくずれそう
こんな時携帯電話なけりゃ良い

高知県　百田幸

宝石のように若い歯美しい
メンバーのユダに人の輪崩される
酒を愛し酒に命を奪われる
いい顔だ苦労に耐えた笑い皺
梅から桃 桜へ移る春の色

今治市　野村清美

母の忌の近し桜のふくらめば
ほっこりとお豆が煮えて恙なし
蝶になれそう大好きな帯結ぶ
美しく自分の為に咲く蕾
古家に二人となって春幾度

愛媛県　黒田茂代

今治市　中村好恵

髪染めて心は十も若がえり
度忘れが度かさなって二軍おち
仕入れ帳メモを一言足しておく
トンネルを抜ける続けてよかったな
身だしなみ程にほんのり紅をさす

愛媛県　中居善信

ストーブを囲み地酒とスルメいか
気を許す包み隠しの無い人へ
あらいざらい言うて女がわぁと泣く
気むずかしい男と言うが芯がある
したたかな男と思う良く笑う

愛媛県　安野案山子

メーデーの列満たされた顔ばかり
御仏に許しを請うてまた明日
すっきりの顔に仕上がる理髪店
冷や酒をぐっとあおって物申す
慰めを言われ悔しさ倍になる

横浜市　北沢街湖

日付けより五感が決める期限切れ
屁理屈をつけて怠ける万歩計
一杯のコーヒー朝の羽づくろい
パソコンの機嫌に一喜一憂す
周囲の目とんと気にせぬ古い服

横浜市　長島亜希子

暖房の部屋でゴキブリ追いかける
波風もなく惚けそうな昼下がり
観戦を終えて運動した気分
評判の寿司に不平を言わぬ列
百年はアッという間と言う百歳

横浜市　巌田かず枝

好物が身体に悪いものばかり
実力を敗者復活戦に見せ
妻だけが年をとったと思ってる
口実の風邪はいつでも流行ってる
弱虫で言訳だけは上手くなる

横浜市　福田由美子

着る物が行事あるたび増えている
退職の理由に本音隠される
貧乏の尺度に親と子の違い
安心を買ってる塾の授業料
サザエさんわが家の昔想い出す

横浜市　金森徳三

まだ元がとれないようで生きてます
聞き返す言葉がふえて共に老い
お隣と義理が行き交う土産物
エンデバーやっぱり富士が人気もの
君が代を千秋楽に口ずさむ

横浜市　近藤道子

春の宵はげしい野良のラブコール
古木からつぼみふくらむいとしさや
じゃが芋を植えて春雨待ちわびる
ダシを取る昆布に礼を言ってみる
おしゃべりも薬と母はよくしゃべる

横浜市　秋元和可

お財布に診察券が増えてゆく
コーヒーの香り夫が台所
娘の愚痴を活かして嫁と仲がいい
とりあえず頭を下げて丸くゆき
セールスの訛に心ついゆるみ

横浜市　山梨雅子

無料パス春をさがしに遠出する
検診のカルテ人生狂わせる
焼きいかの匂い梅見に似合わない
限りある命存分楽しもう
外貨預金して関心を持つ世界

横浜市　芦田鈴美

スタートの一歩でゴールまで読まれ
予定ないけど定刻に目が覚める
店先の花いっぱいに春の風
愛犬を撮って旅行を終らせる
任地から二泊三日の客で来る

東京都　清原悦子

どの人も活字にすれば標準語
木洩れ日に疲れた心癒される
手の甲にサンプルパック塗っている
子の笑顔宝にしたい母子家庭
テーブルに軽い財布のメニュー置き

静岡市　中西雅

福耳にもいいことばかりとどかない
道路工事左折右折と迂回させ
辰年のくじの大安よい予感
あの人もこの人も消す住所録
山を越え谷越え北へ桜道

日立市　加藤権悟

一泊の旅に頃よい還付金
暖衣飽食ヒト科よ驕り過ぎないか
母さんが譲った嫁の台所
人間に言い分があるムツゴロー
両軍の野次将軍がおもしろい

新潟県　高野不二

しみじみと春を感ずる此の眠さ
体重をへらす苦労を思い知る
割り勘にしましょうと言う焼とり屋
ヘルパーが来て女房の有難さ
女房へ言いたい事が言えぬ今日

秋田県　湊　修水

一握りの長老税を食いあらす
神戸にも春を忘れず桜花開く
どもどうーも秋田言葉に生返事
白寿まで生きるつもりの力瘤
天も地もなく吹雪舞い狂う

札幌市　三浦強一

口下手の手足がボディーランゲージ
流れには逆らってみる天の邪鬼
出来た句は妻に検閲してもらう
振り出しに戻るサイコロばかり振り
野地蔵に白いマントを着せる雪

和歌山県　村中悦男

太っ腹いるものいると妻静か
恐い夢だったと目覚めほっとする
助手席の妻はこまめにガラス拭く
老農夫田を売る話もってくる
渋滞の中で予約の時刻来る

田辺市　大峠可動

慟哭へ妻子を捨ててホームレス
雪こんこん咳もこんこん待ちぼうけ
足跡を妻とみつめる傘の中
年金減額　天の氷室が溶けた
老けゆけば悩みがたまる後頭部

和歌山県　森下順子

一人でもおいしい炊きたてのごはん
みじん切りにしてみた今朝のおつけもの
マニュアル通り食後のクスリ二年間
子等巣立ち勉強机目立つ家
おつきあい金がからむとおかしなる

和歌山市　福重美子

警察犬くさい男に慣らされる
永遠に地球は青と信じてる
招かれて弥陀の御殿に行ったきり
勿体ない使わず遂にバザー行き
好奇心何でもブーム乗ってみる

和歌山県　中村君枝

選択を日々せまられている頭悩
だまされてやったと老いのやせ我慢
統合のブーム少子化高齢化
知恵の輪が解けてご機嫌元通り
叔母送る母の面影偲びつつ

和歌山市　木村親踏

忍び寄るボケは足から来るみたい
不自由な時代を生きてたくましい
フレッシュな風に会いたく旅に出る
いい加減にしろと言いつつ見るテレビ
ティータイム女の夢は無限大

和歌山市　吉村さち子

日々戦尽くしきれない白寿看る
デイケアの車へ母は喜々と乗り
人様に親の介護は頼らない
仲よしを通すに言わぬ事もある
ひびき合うものあり便りまだ続き

和歌山市　上地登美代

強く生きる決意してから消えた愚痴
割り切ってプラス志向へ切り替える
待つ人が居るから強く踏むペダル
脳伝達時どき電池切れをする
割り安の群れにいつもの顔並ぶ

京都府　前上英一

真実に触れると円座崩れだす
主導権握ってからの風当たり
通院の憂さ拭い去る風五月
雲流れもとの二人の軈が軋む
歳月の流れ噂も消しながら

京都市　高島啓子

包帯を巻きにくいとこやけどする
番号は正しかったか留守電話
菜の花も一緒にとった捕虫網
お祭りが続く四季咲シクラメン
ままごとは東京弁の京わらべ

奈良市　上村季世恵

電飾の街で人形客を呼ぶ
兄弟子に援護射撃のうわて投げ
荒海に生き抜く老いの底力
風花にミニスカートの膝小僧
すき焼きに何時も並肉買って来る

奈良県　江波正純

ふきのとう鼻先で聞く春の音
山菜は春のお膳の人気者
縄のれん今夜おめあて初鰹
戎橋子ギャルの潮に流される
どないする遊びざかりがママになり

三重県　佐々木森哉

雨の午後嘘と気付いた妻の耳
憎しみの言葉を研いで僕を刺す
昼の月　祝いの酒気をゆるされよ
川濁る　この世の罪を海へ海へと
こころ砂漠に孤独のぼくの足跡が

尼崎市　森安夢之助

顔は磨くが包丁は錆びている
退屈の日々ひとり言多くなり
仁王さんにも盲点があるらしい
落書の裏に隠れている不満
試着室鏡にケチをつけられた

尼崎市　野瀬昌子

うきうきと産院を出る孫抱いて
散歩道風の噂も聞きながら
外に出て浮世の風に逢うている
ふるさとの駅　旅人となり降りる
始めての挫折親には語らない

尼崎市　河津正治

保育器で伸ばす手足に明日の夢
また飲みに来てねと女将如才ない
虚を衝かれどぎまぎとした照れ笑い
歳月が不運の文字を消してゆく
金婚式贈る祝辞に一句添え

尼崎市　清水久美子

マージャンのつきが傾く二十五時
横に居るだけで安らぐお母ちゃん
天王寺の亀に鳴かれて帰れない
妹に親を看させている引け目
ライバルに見せてしまった勇み足

姫路市　服部一典

嫁と姑（はは）亀裂を埋める孫ができ
朝早く声だして読む老眼鏡
老いらくの恋二年逢わぬとあんた誰
三世代休む暇ない洗濯機
大正は見せる下着へ気絶する

姫路市　北条てる代

冷たさの裏で火種を抱く女
声高に追い越して行く塾通い
いつ見ても亡母の写真は笑いかけ
巻き返しきかぬ人生悔いばかり
となりから見れば我が家も青い芝

神戸市　木村忠義

散髪は事あるたびに後回し
散髪をすると頭が活気づく
困ったな上等過ぎるのし袋
この人に義理を果たせばあの人も
気にすると心の傷を深くする

宝塚市　飯西ミサヲ

程程にぼけて可愛く老けましょう
ほどほどに欲は捨てたが物捨てず
宝くじ当った時の胸算用
弁当も半分ですむ淋しさよ
カラオケのボリューム上げて総仕上げ

川西市　西内朋月

風邪気味のメニュー鍋焼き玉子酒
鈍感な僕から逃げる風邪の神
寒行の瀧のしぶきが美しい
ノーサイド悔いなき握手美しい
震災を越えたラガーの眼に涙

篠山市　円増純子

読めたふりして後にする書道展
前向き志向 胸にはいつも光るもの
老いもまた愉しきんさん光ってた
一声の温もりうれし床に臥す
順送りと思う介護へありったけ

三田市　久保田千代

ちらし見てやっぱり女血が騒ぐ
胃袋の中で薬が自己主張
茶柱の立つ朝一日夢がある
うどん打つ手で幸せを手繰り寄せ
ただいまを犬から先にかけてやり

兵庫県　広瀬房江

年金がお財布の口キュッと閉め
芽ぶいてた猫柳さえ風邪を引く
もう一度眠る義務あり午前二時
オパールの指輪は亡母の幸の彩
うかつにも抱きしめられた改札機

大阪市　一本勇太

気負わずに縄一本に溺れよう
脱帽はしても拳は崩さない
ほろ酔いか雑踏をゆく戯画の影
花切手遠い響きを乗せてくる
前向きに進むと落ちている喜劇

大阪市　中澤伽羅

出不精が出たら鉄砲玉となり
いい人と出合い頭に目が合った
ネクタイを選る定番のプレゼント
子と孫が読んだ絵本で捨てられぬ
餌持たぬ私に鳩はよりつかず

大阪市　榎本舞夢

初めての出合いが今の主人です
いい出合いほしくて歩く春の街
街の子の声が弾んで春休み
髪型を変えて夫の気を計る
祝酒飲んで主賓が寝てしまい

大阪市　榎本日の出

消しゴムで消した言葉を覚えてる
大イビキ聞けぬ今夜は眠れない
売り切れが嬉しいうちの冷蔵庫
偶然に出合った振りをするわたし
カリスマと呼ばせて側へ寄せつけず

大阪市　星野きらら

参道で善男善女もめている
雑踏を避けて通れど人恋し
オーイお茶の声はしないが仏壇へ
街の子へせめてひと日の銀世界
春を呼んでる水仙のおちょぼ口

大阪市　中村叡子

風邪抜けずのどの奥から笛が鳴る
眠りにも努力が要ると老いて知り
眠る時片方の手の邪魔になり
カチャカチャと夫が茶碗洗ってくれ
老妻の病祈祷に加太の宮

大阪市　奥村五月

ひと間でも俺とお前の暮らす城
ランドセルいらぬと怖い不登校
親切に惚れた筈やが騙された
他人に良し俺には怖い惚れた妻
年金に教えられますダイエット

大阪市　中村忠敬

美酒佳肴タバコのけむがぶちこわし
無神経くわえタバコで幼児抱く
愛煙家と分り破談にする縁談
灰皿のけむりの行方に気をつけろ
タバコ吸うな　テレビ画面に怒鳴ってる

大阪市　亀井円女

残り火をいとおしみつつ祈る日々
まだ八十翔んで夢見る二千年
背のびした後の空しさ馬鹿らしさ
あり余る元気が仇の勇み足
日に一度腹の底から笑いまひょ

大阪市　小泉ひさ乃

差し上げるお方がいないチョコ売場
娘も嫁も来れば持たせる物さがす
こんがりと妬くのも妻のテクニック
ひったくり引き摺られたがバッグ無事
通夜の席足の痺れは笑えない

堺市　丹後屋肇

抱き癖をつけて夫婦でぼやき合う
托鉢の僧素通りの青テント
へべれけを背負って送る幹事役
抽斗でみつけた遺書の文字を追う
流星を見てフライトを見合わせる

堺市　荻野像山（正雄改め）

目立ちたくないのに葬儀委員長
熱い舌戦明けて普通の今朝の風
雪国の陸揚げ想う蟹せせる
いぬとこがなくて女房強くなる
世話焼いてくれた看護婦好きになり

堺市　和田つづや

挫折した人だからこそ出す魅力
万病に効能がある風邪薬
枕元雑多に置いて風邪に寝る
御忠告腹の底まで浸みてます
自己管理のみ肝機能血糖値

健康な証拠娘がよく笑う
定年後孫にパソコン習ってる
現役をひいたら視野が広くなり
イエスノーはっきりさせず出世する
タコ焼きとビールで済ます妻の留守

堺市　村上玄也

頃合いを見計らっての見舞状
一日を終える鏡に笑顔して
談笑に不安を隠す夫を見る
思い出し笑いは後ろ向いてする
朝昼晩同じ顔見てする食事

堺市　矢倉五月

変わってる事も個性と言っておく
一言が重い空気にしてしまう
輪の中にいて相応の歳を知り
春野菜たっぷり朝のお味噌汁
ふる里の匂いをつれて甲子園

大阪狭山市　矢野梓

新語には弱いが生き字引の白髪
あの人は欠点ないがおもろない
渋滞で近道行けばまた渋滞
ひと昔前の服着て個性出し
歌舞伎座の男子トイレは女子ばかり

堺市　田中紫

浪速場所一先ず知事は寄り切られ
趣味仲間梅見へ集う春麗ら
保父さんとちょこちょこ散歩小さな春
折り込みもメモに綴じてる親ゆずり
旨かった　その一言に気も和む

堺市　喜多美波

転ぶ度地下の夫に支えられ
ベランダで空の青さを独り占め
華やいだ後が淋しい落椿
矢の如く時は流れて二〇〇〇年
振り返りまた振り返る墓参り

堺市　見本ちゃ子

赤い糸ときに縺れてまた戻す
心地よい眠りを誘うバスツアー
だんごより花を楽しむ年になり
いかなごのくぎ煮コトコト母思う
隠しても心配ごとが顔に出る

堺市　斎藤さくら

パレードのバトンガールはうちの孫
川柳が好きな女将の店で呑む
退屈と退屈が会い呑んでいる
憎いほど八等身の隣の娘
借金も持病も忘れ花見酒

富田林市　山原昭水

富田林市　中井アキ

もろもろの春が弾ける絵馬の彩
ひとときを観音さまに抱かれる
廃屋に去年と同じ梅が咲く
ケセラセラひとり住みにも春は来る
親友が少し渇いた音を出す

富田林市　中崎深雪

年をとるほどに長生きしたくなり
咲いた梅二月の風に震えてる
卒業式日の丸君が代自由です
ミレニアム インターネットが支配する
犬の背を撫でてわたしをなぐさめる

富田林市　大橋鐘造

雷を忘れた父の座り場所
老醜の男も過去に炎のドラマ
のし袋少し未練も入れてある
カルテには内緒の酒を飲んでいる
愛と憎すべてこの世は夢芝居

河内長野市　杉谷カズエ

大丈夫杖が頼りの大じょうぶ
十年も前の話をよくしゃべる
鮮明に見て辻褄合わぬ夢
泣き虫の妹だった年忌来る
持たされたマイク音痴ですみません

河内長野市　柏本靖子

わたくしを散歩に誘う初夏の風
黙々と写経に励む母の背な
手料理の味を娘に特訓中
いろいろな試練待ってる角隠し
力泳はしない余生はまだ長い

河内長野市　木太久正一

誕生日長生きしてねと娘より
旅先の娘からクールのたらば蟹
外形課税 都知事の姿格好いい
缶詰でぜんざい作る午後三時
スーパーへ春の陽気の軽い足

高槻市　生田義一

路地裏のお地蔵さんは笑顔よし
柳会で五十年振り旧友に会い
やっと春浪速の街にふれ太鼓
バラ一輪剪って隣へプレゼント
女性知事土俵の外でうっちゃられ

高槻市　執行稲子

ひとことのミスが疎遠のラブレター
絵の餅で老母はよろこぶバースデー
不整脈をプールサイドに試される
辻地蔵もカタカナの花のパラダイス
背のびした予約の席でそれっきり

高槻市　江原秀夫

方舟の世論に揺れるグル教祖
年だけが熟し頭は青いまま
人の世がどう変ろうと花は咲く
柔らかい握手にほだされ投票所
雲の上のキャリアに冷える春の風

高槻市　乙倉武史

道草が過ぎた今更悔んでも
思考力鈍るアレソレ多発して
赤飯をチンして独りの誕生日
今が底塩漬株に低金利
がん黒の顔に地肌が泣いている

高槻市　左右田泰雄

お悔みはだまって目と目合わすだけ
リストラの波をかぶった埋立地
朝シャンの香りと並ぶバスの中
この頃は空気のような老い二人
春を待つ乙女のような欅の芽

吹田市　穴吹尚士

仲人が矢鱈に褒めて法螺になり
公園が青いテントの村に化け
合戦のように蟹食いバスに乗る
青春のなごり高値の鯨食う
性懲りもなく誕生日やって来る

交野市　森本益弘

休肝日におでんを作るにくい妻
針なんか持たぬ女の針供養
予報では降るはずだった重い傘
妻が見る日記にうそを混ぜておく
字余りに指を切りたい五七五

寝屋川市　井上すみれ

老いらくはみずから悟り開くのみ
自転車の置き場わたしの社交場
B・C三〇〇〇インダス文明恐ろしや
星占い良いことだけは覚えとく
デイサービス友と自分に会いに行く

八尾市　中島春江

手出しせず見守る愛はよりふかき
ひもじさも寒さもなけど喜寿孤独
足弱りかわりに口が達者です
不況です百円ショップこの人気
プラトニックラブ夢みてる白髪の

八尾市　與田明

漁火が沖に並んで海眠る
薬石の効あり老後もて余し
春近き明日を信じている夫婦
車椅子見おろす人の眼に耐える
妻だけが暗証番号知っている

八尾市　山本宏至（ひろし）（宏改め）

下積みの苦労が人気押し上げる
しあわせは今日の御飯のうまいこと
太るのは妻の料理がうまいから
瀬戸の海バスで渡った遍路旅
声出して笑って若さつかまえる

八尾市　井尻民

灯に未練残しかけこむ終電車
屋台から匂うおでんに釣り込まれ
カニが出ておしゃべり一時棚にあげ
飽食の猫ダイエットする気なし
腹のたつテレビへ箸が進まない

羽曳野市　川田晋

衰えを感じて開始する散歩
神前に不倫せぬとは誓わない
湯煙と地酒求めてひとり旅
正論を通し地方へ飛ばされる
降りてみて途方に暮れる無人駅

藤井寺市　岸本寿代

面倒とわかっていてもほっとけず
信号で今日の運勢きめている
ハイキング春を探してゆっくりと
寒ぼたん静寂の園石光寺
助けてえエアポケットにおちる夢

泉佐野市　備後三代子

紅梅の一りん開き誕生日
独り居に闇のしじまの這うように
妊娠で辞めるナースの口惜しさ
子と孫に労られつつ能楽堂
病上り幸せを噛むさくら餅

泉佐野市　稲葉洋

字余りの一語に駄目を押してある
字に出来ぬ点点点にある余韻
老いの今昔の無駄が生きてくる
背後霊幾つ背負って行く老い路
酒の許可素直に受けぬ天の邪鬼

岸和田市　村垣鹿太郎

真面目すぎ何時も人生後手ばかり
義理が立つ断り方を妻に聞く
飾らない阿阪仲間と酌み交わす
客去れば良妻の顔消えている
ひょうきんな孫にお茶の間ドッと湧く

大阪府　澤田和重

怒る気がしない根も葉もない噂
追うそぶり見せぬ男の自負がある
お節介少し重荷になってくる
断って冷えた空気の中にいる
嫁の留守わたし好みの味にする

大阪市　辻川咲

郵便受コトリと春の音を待つ
病院へ行くにも少し紅をさす
夫と言う宝なくして早五年
人の輪に入って一番よく喋る

大阪市　平井露芳

福耳でないのにどうしてお金持
前に川あってよかった雪下ろし
ええ日やで言うて売ってる宝くじ
外人は居ないが英語のアナウンス

大阪市　櫛田秀策

きどらずに腹わた物言う男唄
ぎこちなさテクニックよりちからあり
生きる死ぬどちらがいいかいとしき子
ヘタがいいそれが川柳のミリョクだよ

大阪市　伊藤博仁

子が来れば一緒になって舞う埃
店改造年中無休が横を向き
八百万の神総掛かり願の処理
籠の貝　活きがよいぞと舌を出し

大阪市　熊代美智子

我儘を言って言わせて五十年
義理チョコにすこし本音を入れておく
夫には笑顔の武器が役にたち
燃えつきぬほどほどの恋さがします

大阪市　筒島文枝

散歩道主人と一緒で距離倍に
寒くとも犬にひかれて老いに鞭
沈丁花主なき家の空しさよ
遠き日に想い出くれた人も逝き

大阪市　大川道子

すえ膳がうれし悲しい初入院
神様が時に休めと即入院
老いている主治医に少しある不安
道ならぬ恋の路肩にあるスリル

堺市　大橋錦

けんかして同居別居をしています
頑固さがまた台風の目になった
きつい人ここらで図星さしておこ
東北の娘夫婦の温い文

羽曳野市　森田四三郎

キャリア県警麻雀ゴルフ酒おんな
援助交際女の操死語となる
川柳で老いた右脳の縒り戻そ
ゴマスリの栄転祝う苦い酒

羽曳野市　山本たけし

心電図検査即入院と医師
ホルダーに束縛された十五日
同病を相憐れみて四人部屋
消灯に百万ドルのビル夜景

吹田市　須磨活恵

耳鳴りも命の証生きる音
心地よく私を包む春の風
春風に少し燻る女の火
原点に返るとわら靴わらぞうり

吹田市　後藤志津香

春一番山の上より便りくる
二〇〇〇年子の卒業に乾盃す
家計簿もママのやりくり卒業まで
パソコンに鈍な私で笑われる

吹田市　大谷昌子

子が二人爪の短さ慣れました
あの人に英字で包む誕生花
おかあしゃんねおかあしゃんと声かすれ
飲み込んだ愚痴がたまったあごの下

八尾市　高橋明子

職さがしリストラ父さん終電車
中卒を金の卵と言った日も
今の世は栄枯盛衰特急車
よくもまあ逝った母さん着物持ち

八尾市　平川幸枝

春愁のショートヘアーにカットする
鼻歌が家事の能率アップする
洟をかむ風邪のくずれを立て直す
食べながら競馬予想の赤じるし

河内長野市　大西文次

万札を重ねて張れば治る肩
泣き叫ぶ声を乳房が聞き分ける
花嫁に息子取られた披露宴
買うてまで読む程でない処世術

河内長野市　印藤智子

お日様と杖に誘われ散歩道
夢の中にまで杖をついていた
締切りが迫り作家になったよう
変人のレッテル貼られ楽だなあ

東大阪市　今岡貞人

天下りしては赤字を増して行き
卒業をして失業の群に入る
濁ってる海で育った出世魚
大海の真っ只中に見た太古

泉佐野市　大工静子

どこから来たのか一匹の蟻ひざに
婆さんへ長生きせよと先に旅
年忌する古い身内の顔揃う
長生きをし過ぎて悶悶と生きる

門真市　矢阪英雄

査定する人の罪悪介護なし
老人の介護施設がさんぜんと
老人の大国誰が担うのか
年号に介護とつく日もう間近

和泉市　横山捷也

野の花が一輪ざしに生きている
姿見をはみ出しそうな髪を結う
定年で追ってた夢を捨てる朝
何事も慌てぬ妻のそばにいる

岸和田市　不破仁緑

ひょっこりと力士に逢うた御堂筋
合格の後に別れが待っている
久々の再会皺を見詰め合い
猛犬に注意仔犬が顔を出す

豊中市　江見清

安売りを伝える主婦の長電話
大事な日　空見て予報確かめる
訊きたくも訊けぬ隣の子の入試
風邪ですか訊かれて咳で先ず返事

松原市　和気慶一

天神様もほっとしている新学期
親と子のストレス溜る新学期
警察のゴシップばかり続いてる
定説でグルが刑事を煙に巻く

和歌山市　土屋起世子

捨てられるカイロと燃えた八時間
ポケットに蹲いた石入れておく
負け犬と仲よくパンを齧ってる
美少年　包容力があるのかな

和歌山市　武本碧

美しい刻が止まったままの過去
歌わねば愛の泉が涸れてくる
恋文を貰い少女はさくら色
丸文字で恋の花咲くラブレター

海南市　堂上泰子

赤い糸に成長をしたEメール
白銀に心洗いに行くスキー
厚底の靴に生命を奪われる
嫁褒めて姑色に染めていく

和歌山県　坂東和代

機械で買った切符機械がひったくる
乾杯の音頭を下戸がとっている
もったいない性が私を太らせる
かまうのは止そう潮時かも知れぬ

尼崎市　内田美也子

ひとり居の部屋暖めるひな人形
すぎし日の瞳にもどす国言葉
春風に女めざめの旅に出る
春の陽に忘れた恋が目をさます

尼崎市　軸丸勝巳

毎年の工事を嘆く渡り鳥
明日香宮　亀は万年待ち続け
老骨の補強によいとくぎ煮くる
暖冬に馴れた五体を攻める寒

伊丹市　延寿庵　野　鶴

俎板に向かうとなぜか弾む妻
ラベンダーの香りと届く花切手
街道に葵祭の牛車行く
のほほんと肩ひじ張らず生きてます

兵庫県　安　達　厚

立春の声へ木の芽はあわてない
大安を選んで雨にたたかれる
原点に戻れば未来見えてくる
未来への切符母からもらってる

兵庫県　谷　田　多美子

両隣寒椿咲く過疎の村
お受験へママ洋服をまた新調
皺とれずせめて紅引く初舞台
七十五歳なっても夫に叱られる

倉敷市　家　守　政　子

ゴミ袋涙も愚痴も入れて出す
奥さんの座をいつからか下りている
病人へビデオで見せる学芸会
本好きが農家の嫁でほろ苦し

倉敷市　撰　喜　子

ミスばかりうっかりですむ年になり
ごみステーション横文字にあるやわらかさ
厚底の靴ほめてあげいたわられ
介護保険わかったような顔できく

岡山市　清　水　金太郎

未だ生きるつもり新車を買うとする
免許更新やめたらどうと妻が言う
ぶらんこが妻の助言で静止する
長生きは出来たが絶えぬ悩み事

鳥取市　福　永　ひかり

早く空く一升瓶へ言うこごと
他人にはゴミだと思う宝物
コンビニの弁当舌がすぐ飽きる
朝咲いて次の日はない沙羅双樹

鳥取市　田　村　邦　昭

変化球知って大人の仲間入り
愚痴一つ言わぬ男に惚れなおす
しぶしぶと始めた趣味で生かされる
神様と組んで不況にたち向かう

米子市　小　塩　智加恵

いつからか私のリンス使う夫
うす化粧口紅三年買ってない
寝る際の浮かぶ一句が朝消える
炊きたての御飯に似合う新若布

鳥取県　山　内　芳　江

景気良い話半分聞いて置く
巣立ちする雛が滑走繰り返す
苦労した顔に相談持ちかける
空腹になると意欲が湧いてくる

鳥取県　加藤公子

襷がけ深山の春の川下り
満天の冬の星座よ久し振り
サワサワと羽音連ねた十三羽
福寿草　外泊許可の庭に咲く

鳥取県　橋谷静江

歌好きの私の周り皆陽気
畑仕事楽しさとして無理をせず
退職の夫へ合わす周波数
子育てに疲れた娘へバラの花

鳥取県　竹森富久江

まぼろしの世だ焦らずに咲かす花
ひらめきが文のこころを解いてゆく
酸欠のこころ渚で生きかえる
寒さには降参ですね花芽どき

鳥取県　平井栄翁

しみじみとこたつで妻の皺を見る
エアコンも在るがこたつが性に合い
同窓の宴あの頃の国言葉
起きようか寝ようか迷う窓の雪

松江市　山根邦代

日足伸び今日の予定を消化する
枯れ木かと思わせ春の身づくろい
知らぬ間に芽生え出してる花畑
友を見る目の位置変える発表会

松江市　小川注湖

新世紀戦争だけはしたくない
ふるさとの湖夕映える嫁ヶ島
たっぷりの自由を独りもて余し
言い過ぎた言葉は元に戻らない

出雲市　伊藤玲子

毒舌を快く聞く仲になり
欲一つ捨ててあなたの側に居る
喜びをいっぱい混ぜて米をとぐ
責任を追えば泣きそな人がいる

島根県　持田多輝子

呼び捨てにされても不平言わぬ嫁
我が心丸く丸くと香を炊く
米寿とは思えぬ艶に乾杯す
老いの春温めあって趣味に生き

香川県　原賢

前向きの言葉が友と別れの日
喝采を浴びたところが始発駅
定位置に銚子が見えぬ妻の乱
戦争を知らない人の改憲論

高知県　桑名孝雄

だみ声が生きてた路地の紙芝居
背伸びしてどうなるものでない余生
礼服のお供がつらいのし袋
饒舌を腹で笑っている無口

知らぬ人が聞けば本当にしてしまう
大欠伸している罪のない無職
暑い時見せる難儀な毛皮ショー
ひとくぎりついてめし屋の遅い昼

今治市　塩路よしみ

夫呼んで蜂の居ぬ間に巣を落とす
まんさくに兄を偲べば空が揺れ
おぼろ夜の道のゆるやかなる起伏
火を噴かぬ山は息吹を噴きはじめ

愛媛県　宮本末子

生かされて手を合わせてる酒徳利
ガラス窓脳震盪のこの小鳥
捨てがたい資料何時かは燃やされる
発禁本よくも集めた集大成

唐津市　岩崎實

石の屋根に島の歴史をかいま見る
柿右衛門の壺に出合って旅終る
京都弁やんわり的を突いてくる
ハンカチを敷いてデートの席が出来

福岡県　岩崎和女

平服でと言われて服がむつかしい
托鉢の僧に出会ったバスの中
息子もちヴァレンタインが気にかかる
母からのチョコはポイッと冷蔵庫

京都市　三宅満子

芽吹く木に老春淡く紅をぬり
適当なボケも演じる三世代
外出も法事のことのみ老いの日々
ど忘れ帳閉じては開ける仲よしで

京都市　勝山美千代

半生記嫁ぐ娘に話す夜
指輪はずしあなたに背く日の涙
まっさらな哲学持った子の巣立ち
生乾きの傷をひっかく捨てゼリフ

奈良県　渡辺富子

ゴールにはテープに勝る顔が待つ
シンプルが良いと会計課の好み
チームより私のために打ちました
御意見は伺いましたアンケート

三重県　尾崎勤

好青年にっこりドアを開けてくれ
ひよどりの腹立たしさと愛しさよ
啓蟄にうっかり出たが運の尽き
買う時はバラ色の夢宝くじ

尾張旭市　三浦きぬ

盛り上りすぎてぐったり古希の宴
蟹解禁寝てた街並み活気付き
花見の宴はやりのダンゴ仲間入り
汽車の窓春の息吹を連写する

滋賀県　中宗明

採血の慣れた手つきがほっとさせ
荷も欲もスリムにさせる心がけ
気軽さを優先させる旅プラン
罪意識薄く罰則無視をされ

横浜市　生坂サト子

イチローの打率あやかる願いごと
腕ほめて庭師の技を盗みとる
雪降ればパブロフの犬酒を飲む
梅凜と咲きふきのとう天をさす

横浜市　布山嘉信

母さんの寝顔はじめて看たベッド
大掃除明日は大事な客らしい
来客と摂る食卓は小さく見え
睦まじい夫婦も来客帰るまで

横浜市　鈴江純子

井戸端会議もリッチなバイキング
ゲーム機に洗脳される子の躾
公園の朝はカラスのカフェテラス
首切りも深刻にせぬカタカナ語

横浜市　荒井広和

仲間だが時に謎めく人がいる
春が来た第一幕は花と蝶
締め切りが見えて手の先動き出す
幾山河越えて二人でつくる地図

横浜市　伊藤ふみ

境界線高く高くし会話消え
故郷と同じ風吹くあぜの道
啓蟄に足踏みしてる土筆んぼ
金額が行ったり来たりのし袋

横浜市　三村八重子

美しい人が思わぬ文字を書き
愛されていたい尻尾を振り続け
切り札はハートやんわり負かされる
論客のいつも桟敷の人で居る

八王子市　井上京一郎

目の鱗落ちて行先見えてきた
矢印を信じ一つの山を越え
子の矛盾祖母はにこにこ耳を貸す
三代も続く糠床丸い味

静岡市　増田扶美

靴下の穴で判った単身者
呼び合って意気軒昂の受験生
ルーズソックス穿いて三歳若く見せ
合格の祝つづいて金工面

静岡市　大村正雄

リサイクルと思って嫁のお下がりを
シクラメン雪に負けない白い色
海峡線作った人の労偲び
カラフルな髪が風切る二〇〇〇年

青森県　福士トキ

何百回の点滴も無事十五年
気おくれて外に出られぬ日が続き
ご先祖をしっかり守る有難さ

鳥取県　高尾　京

一人住む家にも月の明り差す
この人もあの人もまた一人住み
四捨五入一度は入れてほしい僕

鳥取県　西沖彰雄

忙しさの中に春の香がまじる
春よはるプラン楽しや翔ぶつもり
雨だれを聞いてる愛が遠ざかる

大阪市　三浦千津子

岡惚れが多く本命絞れない
決断を下した後も未だ迷い
虫の音に哀れ感じる年となり

東京都　吉田土風

行き詰り夫の過去をねたにする
妙薬の前に戦く副作用
相槌を打って責任取らされる

横浜市　保田絹子

夕映えに背なを押されて塾通い
ショックです鏡に年は隠せない
ハンカチをタオルにかえた定年後

松山市　山之内八重美

春ですねゲートボールは花盛り
二千円札 資源節約役に立つ
保険屋さん介護保険に手を染める

千葉県　大川晩翠

テキパキと捌いてレジの良い笑顔
紅梅の含み笑いを見る窓辺
胃に自信無いのでカメラ止めにする

東京都　井上つよし

お茶習う妻の本音が別にある
何かある今朝の茶筅の弾む音
春風に乗って誘いの電話鳴る

出雲市　岡あきら

窓際が好きでデートの席をとる
窓際で舟をこぐのが上手くなり
春の風 恋猫ふえて眠れない

倉吉市　大下智子

夕焼けを見ている二人影一つ
誓詞読むチャペルの空気澄んでゆく
暇多くなって日溜りありがたい

尼崎市　松下比ろ志

雪山の遭難ニュース孫思う
いつの日もポストあければちらしだけ
マラソンをこたつの中で応援し

川西市　田中喜俊

湯煙の地酒のうまい旅の宿
米を研ぐ新妻の手に光る幸
春一番吹けよ吹くなと花粉症
伊丹市　樫谷郁子

髪洗い脇の下から返事する
道しるべお城が遠く手まねきす
生命力つよくてもどり生きる幸
姫路市　勝間タツヱ

風花に私の夢を問い直す
夢枕に出た母偲び気力湧く
風花と共に舞いたい病室
兵庫県　徳平毬子

小指立て誘いことわる帰り道
声揃うこれがコーラス初参加
湯につかりツララ見上げる窓の外
兵庫県　黒崎美紗子

力まない自然に生きていたいから
泣けてくるクシャミと鼻水花粉症
特技等なくて心を届けます
兵庫県　山本泰子

淋しさをまぎらすために電話する
思い出が楽しい淋しい老いの日々
風呂の中そっと息つく気持ちよさ
和歌山市　和田美寿子

エコノミー空気枕で喜寿の夢
桜餅葉も食べるのと子の口へ
炭焼の転職めざす若夫婦
奈良市　田中賢治

受付も看護婦さんも皆やさし
親切のトップはやはりリハビリ士
患者には話題豊富な人が居る
橿原市　西本保夫

躁鬱の花よ桜が咲く時節
声変わり父とおんなじくしゃみする
うどんにはうどんの粋がある七味
橿原市　居谷真理子

不便やなあ居留守が効かん携帯電話
喜寿迎え態度も腹も太うなり
ネタ眺めどれにしょうかと回る寿司
高槻市　西谷治三郎

マニュアルに引回された電気器具
定休日義歯はずしてて日が過ぎた
暮れぬうち夕飯食うのも退職後
豊中市　みきわきみ

食べて寝て牛とはならず成人病
携帯電話㊙にできる満足度
ヒバリ鳴くレンゲ畑で寝てみたい
寝屋川市　岡本勲

紅梅のほのかに香る墓参り
春うらら隣の猫も恋をする
力まずに生きる私に友多し

枚方市　二宮紫鳳

リハビリのペダルが重い冷える夜
留守番の寝間着姿に鳴るチャイム
てこずった次男優しく看てくれる

岸和田市　木村正剛

鉢植えの花も待ってるお水取り
海流が機嫌損ねてエルニーニョ
天満宮合格お礼声も跳ね

羽曳野市　永田章司

御馳走はないが笑いが膳にのる
すてられぬ柳ごうりに亡母匂う
いい出合いそれから余生塗りかえる

鳥取県　西垣美知子

雪だるま笑うゆとりも無い寒さ
ゆったりと窓ごしにみる春の音
指先の細工いろいろボケ防止

鳥取県　藤山弘子

心から踊れば手足ついて来る
やっぱりな見手もなくては踊れない
川柳もライバルあってはりになる

鳥取県　岡嶋金子

一年の御無沙汰でした内裏雛
いてほしい　いてほしくない老いた親

大阪市　中井正秀

健康術ツボの切抜き貯めている
消したかと家のアチコチうろうろと

八尾市　鷲見章

誕生会春の昼食和やかに
開ケゴマ　エレベーターに声をかけ

枚方市　大昇隆広

また出たと心くすぐる古代跡
やさしい目に戻してくれた里の川

和歌山市　前岡健三郎

森の顔開発し過ぎ泣いている
天の邪鬼そうとは知らず美辞麗句

尼崎市　尾宮弘治

母は素手娘等はゴム手でする厨
辞めたくも情義からまる二度の職

倉吉市　牧野芳光

幸せな話聞いてるうわの空
わたくしの家にわたしの場所がない

出雲市　栂ミツエ

田舎道都市計画の嵐くる
たまに出るスーパー本日定休日

横浜市　豊田羊子

島根県　松本聖子

これからはどんな人生もへいちゃらだ
眠れぬ夜子供にハロー叱られる

宇部市　藤本一規

この世には絶対という事はなし
親心出してわが子を追い詰める

高知市　澤村哲史

大まかな司会が肩の荷を降ろす
礼儀作法いくつ出来たか指を折る

米子市　森脇麗

じゃんけんで負けてきっぱり吹っきれた
姉の傘の下でぬくぬく生きてきた

米子市　猪森スミヱ

厄という鱗落しに行くお寺
一坪にジャックの登る豆蒔こう

鳥取市　宮脇道子

春遠し得意顔する予報官
それじゃねの後が止まらぬ長電話

定本　西尾　栞句集から

張り替えた障子の中に母います
最後の最後の味方は妻なりき
お互いに中毒ですなと酌ぎこぼし
牛の瞳に人間何をあわてとる
てっちりや路郎門下の生き残り

鳥取市　岡田信恵

ゼロ同士夫婦になって城築き
二〇〇〇年飛躍発展歩みたい

あおば川柳会　五周年記念句会

日　時　**6月25日**（日）正午開場
会　場　青葉台フォーラム　2F青葉の間
（東急田園都市線青葉台下車2分）
講　演　「わたしと川柳」　河内天笑
課題と選者　（各題2句・字結びも可）
「年」　板尾岳人選
「五」　松岡葉路選
「葉」　鈴木柳太郎選
「青」　唐沢春樹選
「浜」（事前投句）　八木千代選
「横」（事前投句）　橘高薫風選
事前投句・懇親会締切　**5月31日**（用紙自由）
当日出句締切　13時30分　欠席投句拝辞
句会費　1000円（句会報後日送付）
懇親会　7000円（終宴18時予定）
投句先　〒227-0062　横浜市青葉区青葉台1―7―5―909
あおば川柳会
問い合わせ先　TEL&FAX 045―982―4056
菱田満秋

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこゝろ (112)

橘高薫風

春寒炉辺　森　東魚

子供が靴を右左間違えてはいているのは、間々見ることだが、大人のは珍らしい。私がある工事場を受持っていた時の事であるが、朝、例の通り監督員詰所へ挨拶に行って、主任のK氏と炉を隔てて向き合って馬鹿話をしていながらフト気付くと、オーバーシューズをかけた短靴をはいて居る彼氏の足がどうも外の方へ反っている。

「オーバーシューズがあべこべじゃないですか」私は遠慮なくこう言った。やや周章た彼は、足元へ目を落すなり、爆笑した。

「ワッハッハ、家内の奴め、ウアッハッハ」そうして、そそくさとオーバーシューズを外したのであるが、見ると其の下の短靴そのものも、あべこべだったのである。妻君のエラーでは完全になかったのである。

「どうも歩いてながら変だと思った」彼氏は、こう言ってツルリと一つ顔を撫でた。

それから数日経ってである。私は電車の座席からすぐ前の足を見た。大人の足である。ゴムの短靴である。そして、右と左がアベコベなのである。私は過ぐる日の滑稽を又思い出した。粗忽者も随分あるものだと感心しながら、フト目を上げて見ると思わずハッとした。忽ち笑いは消え去った。冷たいもので顔を撫でられたような気がした—。前のその人は、黒い眼鏡をかけていた。彼は盲人なのであった。笑えぬ滑稽、それこそ、一層哀れが深い。寧ろ盲人のカンの良すぎるのは哀れが薄く思われる。

憎らしい程に盲目のカンのよさ

この頃俄かに債券が人気があるようである。

「三万五千円当ったのは、まさか、サクラじゃあるまいな」。こんな馬鹿口を叩き乍ら昼休みの事務室は賑かである。債券の籤は、確かに当るに違いない、当るのである。只いつも自分でないのである。

「禁酒して、債券を一枚でも買おうか」

私は女房にこう言った。

「当りますか」。彼女は、実に明瞭極まるものである。私は、黙って二階へ上がってしまった。

債券の当った話皆ナ話

S百貨店で光筆写真の展覧があった。実によく出来ている。原画と並べても区別がつかない位である。華山も竹田も栖鳳も——が、然し、それが似れば似る程一層そこに何か知らない一抹の佗しさが私には深かまさる気がされてならない。

わからないわネと新ダイヤわかるなり

「路郎は摺り切れやしないか」本当に私はそう感じたのだ。旧臘、キングを訪れた時に。摺切れたという感じのある人物に、私は児玉源太郎、小村寿太郎両氏を偲ぶ。全く両氏は日露戦争で摺切れてしまったのではなかったか。川柳人では、卯木を思う。川柳江戸砂子に尊くも摺切れたのである。嘗て私の友人で「油が切れた」と一ト言を残して死んだのがある事は本誌に書いた。油が切れたのは、油さえ差せばまだ動いて呉れそうに思ふ。然し摺切れたのは、油をやっても間に合わない。

無暗に、摺切れるな。そうしてお互に、有効に摺切れようじゃないか。

摺り切れる人間もいる春の風

愛染帖

波多野五楽庵選

幸せの演技はこなせないピエロ
和歌山市　青枝　鉄治

世渡りの下手な男で掌が温い
究極のグルメが食べる握りめし
和歌山市　楠見　章子

惰性から抜け出すまでの北おろし
水の絵に呼ばれ捨て身になる椿
米子市　政岡日枝子

春の訃が続く風花舞う中で
ひとつずつ母から彩があせていく
八尾市　村上ミツ子

勘定はぴったり合っているんだが
やまびこが思い通りに返らない
大和高田市　鍛原　千里

寡黙なる風にときどき騙される
大胆になってみたらと春の風
今治市　塩路よしみ

産む産まぬ女が決めていいじゃない
かごめの輪抜けて爪かむ天邪鬼
和歌山市　木本　朱夏

行方不明の昨日を捜すダンボール
ゼンマイの切れた玩具の猿はわたし
倉吉市　野口　節子

頼られて踵が少しちびて来た
舎利となるただそれだけの物語
八尾市　村上　剛治

姿見におきばりやすと励まされ
出る杭の頭をそっと撫でておく
横浜市　清水　潮華

意地悪は愛だと思うことにする
線を引くから真ん中で揉めてくる
弘前市　高瀬　霜石

貧しくて東の空を見て暮らす
ひと嫌い同士　お茶でも如何です？
弘前市　斉藤　劦

ミレニアム戦を知らぬ子が走る
啓蟄の夜だったなあ一周忌
富田林市　大橋　鐘造

騙されてやろうあなたが淋しそう
まだ脱げぬ仮面抱いてる肩の凝り
松原市　玉置　重人

約束の重さ軽さを知る小指
肩書きがつき肩書きに縛られる
和歌山市　西山　幸

春雷に亡父の鞭打つ音がある
薬袋　命ひとつをもてあます
大阪市　一本　勇太

白い歯をこぼす仮面に疲れ切る
水中花胸の乾きは見せられぬ
鳥取県　西沖　彰雄

正直に言えば二の矢の的になる
口下手でいつも頭を下げたまま
綾部市　藤田　芳郎

父の来た道をなぞってまだ会えず
故郷に傷口洗う川がある
鳥取市　夏目　健一

不用意な言葉は檻に入れておく
どこがどう変わったのかと言われても
西宮市　奥田みつ子

春愁に書棚の本は役立たず
いつかいつか消える日思う人想う
和歌山市　榎原　公子

思索する背は丸くなり無口なり
言い足りぬ言葉が喉にからみつく
八尾市　生嶋ますみ

劣性をしっかりと継ぐ子の育ち
爪を切り新陳代謝くり返す
西宮市　門谷たず子

思い切り悪くて越せぬ水たまり
まだ夢があってやさしい眉を引く
富田林市　中井　アキ

とりあえず横一列にいる野心
喪のあけた足袋がキリリと紅をさす
枚方市　寺川　弘一

ノックする神の扉が多すぎる
人生もあの世もみんな指定席
鳥取県　石谷美恵子

色褪せた仮面まだまだ用がある
拡大の地図から探す兎小屋
鳥取県　西原　艶子

歯が欠けてそれから狂うスケジュール

飛ぶだけで行くか算数などよして　唐津市　田口　虹汀
千代紙の中に入った女の子　鳥取市　坂田和歌子
七十余年ハナハトマメは忘れない　尼崎市　春城武庫坊
影法師俺が死んでも生きとれよ　鳥取市　春木圭一郎
友達にすぐなれそうな周波数　大阪市　小林　周信
人脈の藻にからまれて流される　和泉市　横山　捷也
美しい耳です噂溶けてくる　和歌山市　吉村さち子
土下座して過失が消える訳でなし　横浜市　菱田　満秋
捕れたのは好きなあなたの尻尾だけ　鳥取市　上田　宣子
どのキーを押せばわたしが消えますか　美祢市　安平次弘道
再会の握手であける第二幕　鳥取市　福田　登美
どこまでを嗜みというコンパクト　堺　市　山本　半銭
木枯しと話がはずむ北の窓　鳥取市　岸本　孝子
そこそこの資産残して逝くつもり　倉吉市　米田　幸子
噂話ぴたりと止める救急車　羽曳野市　森田四三郎

節操のなさに言う事ありません　大阪市　三浦千津子
ときどきはわが罪状を裏返す　富田林市　池　森子
少子化へ町の小店が一つ閉め　今治市　月原　宵明
悪口を聞くとつかれがどっと出る　岡山県　富坂　志重
喜劇悲劇の種はわが家にこと欠かぬ　鳥取市　植田　一京
連日連夜働きぬいて糸を吐く　和歌山市　山根めぐみ
分校のローカ走ってみたくなる　寝屋川市　江口　度
帰郷するたびに振り子が止まってる　倉吉市　牧野　芳光
体臭が淫らになった古本屋　和歌山市　古久保和子
教育勅語そらんじている痴呆症　弘前市　高橋　岳水
校庭の時計は冬に負けないぞ　弘前市　中山　雅城
目玉焼き急かせて今朝も風歩む　弘前市　岡本　花匠
読みかけのまんまできっと死ぬだろう　鳥取市　小谷美ッ千
人間をやめたら生きてゆけますか　海南市　三宅　保州
信用をされたか会釈してくれる　寝屋川市　森　茜

少年のもはや開かぬ玩具箱　青森県　西谷　大吾
閉店を告げる貼り紙風が裂き　川崎市　和泉あかり
愛されて愛の形の化粧する　今治市　野村　京子
作業服着ればその気で霜をふむ　和歌山県　村中　悦男
悲しみを置き去りにして春の風　和歌山市　川上　大輪
百態の走る樹氷に酔いしれる　弘前市　櫻庭　順風
歳時記に背いて咲いた花の鬱　枚方市　海老池　洋
限界の力をためす棒グラフ　岸和田市　井齋　一齋
石積んで今夜は夢の中で逢う　京都府　稲葉　冬葉
何しても他人が口を出して来る　河内長野市　植村　喜代
この左遷きっと捨て石かも知れぬ　奈良市　米田　恭昌
いてついた脳にいっぱい陽をあてる　米子市　木村富美子
五月病派手目な服を着ていこう　東京都　清原　悦子
道草の水はさらさらあとがない　弘前市　一戸　ツネ
魂がどきどき飢えてゆく時間　鳥取県　土橋　螢

雪消えた白いブランコ漕ぎに行こう　弘前市　蒔苗　果林
淡雪が素直になれと降ってくる　弘前市　宮崎ヒサ子
カリスマへ走る心の落とし穴　和歌山市　武本　碧
七草が咲いて亡母の忌がめぐる　岡山県　福原　悦子
冷凍魚海の記憶もそのままに　札幌市　三浦　強一
お人好しちょっと淋しい妥協癖　大阪市　北　勝美
善悪が隣合せに住むこころ　尼崎市　田辺　鹿太
窓際に馴染みまわりが見えてくる　横浜市　鈴江　純子
ぼかぼかの陽気が誘う物忘れ　大阪府　籾山　隆盛
無駄骨を折っては口が重くなる　鳴門市　八木　芳水
絵筆持つ目には一点しか見えぬ　大阪市　稲本　凡子
キーボード慣れるしかない五月闇　八尾市　高杉　千歩
方円の器の水が落ちつかず　高知県　桑名　孝雄
隣の塀がとても疲れた顔みせる　松江市　川本　畔
点火するマッチ一本まだ残り　堺　市　桜沢　千世

新雪の白こそ真の白ですね　鳥取県　林　露杖
誰だって叩けば塵の二つ三つ　尼崎市　長浜　澄子
膨らんだ夢だしばらく突くまい　堺　市　矢倉　五月
そこそこの欲で満足する余生　和歌山市　上地登美代
瘸癩の火種を煽る言葉尻　横浜市　保田　絹子
お雛様　私は年をとりました　富田林市　藤田　泰子
目には見えないけど風の存在感　高槻市　左右田泰雄
我が道をゆけばいずこも薔薇の棘　和歌山市　福井　桂香
誘いたい人だが今は遠く住み　羽曳野市　酒井　一壺
手枕の痺れ気付いてくれぬ女　弘前市　福士　慕情
台本の通りにだけは生きられぬ　米子市　青戸　田鶴
ぞっとするビデオで撮った僕の声　鳥取市　岸本　宏章
自分より私を知っている他人　尼崎市　春城　年代
泣き寝入りせずに大きな山を越す　貝塚市　池田寿美子
蟹を選る女の肘が邪魔になる　鳥取市　武田　帆雀

新聞の隅に灯ったいい話　唐津市　市丸　晴翠
妻の言う悪友いちばん温かい　唐津市　樋口　輝夫
人生に筋金通す泣き笑い　大阪市　鈴木トヨ子
アイディアを出すと保守派が蓋をする　鳥取市　美田　旋風
匂いから崩れ始めた寒牡丹　今治市　渡邊伊津志
熟年の笑顔の裏にある火花　横浜市　田中　笑子
ワンマンショー生き方変える気はしない　鳥取県　小西　雄々
一生の頼みと金に土下座する　黒石市　相馬　一花
コンタクト外して母になる夕餉　鳥取県　田村きみ子
自画像がすこし美人になって春　八尾市　高橋　夕花
これしきの風にくずれた砂の城　藤井寺市　高田美代子
小さくても温い話を待ちわびる　大阪市　町田　達子
善玉も悪玉もいてコントなり　寝屋川市　平松かすみ
ガラス屋が儲けるようなビルばかり　和歌山市　池永　正匍
引出しの中から答え出てこない　愛媛県　中居　善信

秀句鑑賞

―4月号から

竹治　ちかし

―水煙抄

髪切った訳をみんなが聞きたがる

銭山　昌枝

恋をするのか、失恋なのか。とかく雀は噂をたてたがる。良い方のイメージチェンジなら良いのだが。

水平線でっかい海の曲がり角

野村　清美

なる程そうだったのか。水平線はただの線ではないのだ。作者の眼の付けどころには敬服。

了見の狭さを海へ捨てて来る

渡邊　伊津志

悲しい事、辛い事があれば、海に行くが良い。偉大なる海、母なる海は、きっと受け入れてくれる。

ときめきを抱いて女のかえし針

国米　きくゑ

女性ならではの句。佳句。

空缶が一つ転げて汽車を待つ

左右田　泰雄

ノスタルジックな句だ。絵にしたいような光景が眼に浮かぶ。

相談をしておきますと逃げられる

矢野　梓

同感。断りの方法として、よく使われる言葉。誰にも経験あり。

ほとぼりが冷めたらあれは何だっけ

松本　聖子

よくあること。当人は平気の平左、踊らされた周りの人は、いい迷惑だ。

就職が出来ず大学院へ行く

木村　親跻

時代は変わったものです。目的のない修士さんが増えるのも困ったもの。

新聞に載る程悪いこともせず

久保田　千代

悪いことをして新聞を賑わしている人は、すごいエリートばかり……。履歴書に賞罰なしと書く凡人で良かった。

無添加の豆を鬼にも撒いてやり

平井　露芳

遺伝子組み替えとか、外国産とかで騒いでいる昨今。鬼にも無添加の豆を、という心が嬉しい。

ダイエットやがてすらりと痩せる筈

鳥羽　玲子

「筈」という言葉がよく効いている。

未だ生きているかと現況届くる

森田　四三郎

差し詰め年に一度の年賀状。疎遠になる一方でも生きている証。大切にしたい。

ハードルを一段高くして転ぶ

録沢　風花

転んだら人に見られぬうち起きる

岡田　たけを

人生は七転び八起き。向上心があるから転ぶこともある。転べばすぐに起きること。

裏方に徹した母の丸い背な

澤　裕子

良い母を演じ続けてくたびれる

中崎　深雪

昔の母と今の母。上手く言い当てている。

始めまして曽祖母でちゅよ彩菜ちゃん

谷田　多美子

婆ちゃんになる日の爪を丸く切り

有沢　せつ子

バイバイがもうわかるのか十ヶ月

大橋　錦

思わず微笑みたくなるような句。このような句も大切にしたいもの。

女性コーナー

前香の雫

宮西弥生選

流されたところにあった川が好き
二本の足でこの世を歩く難しさ
敗者なり犬も一日小屋を出ず
赦すことばかりで心やせてくる

心まで売ってはならぬ手を握り　芦屋市　黒田　能子
愛が重くて愛を少しずつ削る　和歌山市　西山　幸
春が来た女は風になりたがる　吹田市　山本希久子
さくらにも人にもこころ一重八重　藤井寺市　高田美代子
なげくまいうちの煙ものぼり出す　倉敷市　小野　克枝
針山に女の業が錆びている　富田林市　藤田　泰子
らくらくと山動くとは思えない　大和高田市　鍛原　千里
底力の底を泳いでくれる人　寝屋川市　平松かすみ
春うららことば捜しの旅に出る　鳥取県　さえきやえ
一言の多さ少なさ余生だな　今治市　野村　清美
厚化粧罪の匂いがしてならぬ　米子市　政岡日枝子
野仏が天からもらう雪帽子　富田林市　池　森子
茶など点て女ひとりに馴れてゆく　和歌山市　福井　桂香
合わせ鏡に昨日の鬱がまだ残り　大阪市　稲本　凡子
許すとは独り溜息つくことか　今治市　塩路よしみ
じんじんと女を責める冬木立　鳥取県　西原　艶子
重い荷を背負いに神は森を出る　八尾市　宮崎シマ子
思い違いばかりして来た出入口　西宮市　門谷たず子
まん丸が描けない儘に晴れ着きる
外反拇趾おしゃれのつけがついてくる
花の下話せばみんな良い人だ
これほどのスリルはないと靴に乗る
お幸せですかと神を売りにくる
脱皮して口紅すこし濃ゆくする
春風がやさしくそして強く打つ
鋭角の視野に見えない蜘蛛の糸
子も親を選びたい時あるらしい
迷わずにシルバー席に腰下ろす
取れそうなボタン見過しにはできぬ
遅咲きの春にも拍手してやろう
雛まつるふるさとよりも長く住み
流したい過去煩悩が許さない
あしたへの道はわたしの手でひらく
寝たきりの視野にも四季の花咲かす
プライドをすっぽり包む黒い服
身びいきにとっぷり漬かるおでん種
これからを思う私の持ち時間
他人事今日は我が身と置き替える
挫折したこころにバラが紅すぎる

羽曳野市　吉川　寿美
藤井寺市　太田扶美代
米子市　木村富美子
和歌山市　吉村さち子
鳥取市　坂田和歌子
堺　市　志田　千代
西宮市　奥田みつ子
大阪市　川久保睦子
堺　市　桜沢　千世
八尾市　高橋　夕花
西宮市　西口いわる
鳥取県　岩崎みさ江
横浜市　巌田かず枝
横浜市　清水　潮華
和歌山市　古久保和子
鳥取県　山内　芳江
尼崎市　春城　年代
貝塚市　池田寿美子
池田市　栗田　久子
岡山県　矢内寿恵子
大阪市　神夏磯典子
寝屋川市　森　茜
大阪市　三浦千津子
出雲市　園山多賀子
香芝市　大内　朝子

骨の位置ずれたか話嚙み合わん　倉吉市　野口　節子
出過ぎても一途な杭で叩けない　島根県　伊藤　寿美
モナリザの微笑は謎のままがよい　横浜市　豊田　羊子
見上げる子春の別れは普通の子　米子市　小塩智加恵
瓶で咲く水が命のヒヤシンス　愛媛県　宮本　末子
紅梅にわたしの不徳詫びている　熊本市　永田　俊子
無位無冠平和の中で早く惚け　鳥取県　土橋　睦子
のら猫も寄らぬ立派な石の庭　和歌山市　楠見　章子
世紀末ノストラダムス肩すかし　八尾市　井尻　民
高台寺タイムスリップ四百年　大阪市　津守　柳伸
後列に並んで尻尾見届ける　和歌山市　福本　英子
ディズニーに孫の目線で招かれる　横浜市　保田　絹子
親と子の形で並ぶ雲と会う　西宮市　牧渕富喜子
燃えた日はさだかにあらずうす化粧　藤井寺市　鴨谷瑠美子
席ゆずるギャルに躾が生きている　八尾市　生嶋ますみ
冷蔵庫さらえて無国籍料理　羽曳野市　徳山みつこ
言い訳をすれば矛盾がこぼれ出る　鳥取市　福田　登美
美しい雲ともしもの話する　富田林市　中井　アキ
勇気出そう明日は何かが変わるかも　尼崎市　長浜　澄子
しまいごとこれで一日減ったんだ　大阪市　本間満津子
歳月やおんなじパズルを解いている　寝屋川市　籠島　恵子
ペンの先過去が静かに歩き出す　岡山県　福原　悦子
亡母さんの命日義母のバースデー　東大阪市　北村　賢子
就職と入試のピーク孫九人　寝屋川市　岸野あやめ
気がつくととびこえていた水溜り　八尾市　村上ミツ子

わたくしにやっと戻れたしまい風呂　鳥取県　田村きみ子
男の子いない家系の柏餅　横浜市　秋元　和可
肩パッドはずして視野を広くする　鳥取市　岸本　孝子
水たまり越して命の音を聴く　弘前市　一戸　ツネ
地図めくる風と気楽な旅したい　川崎市　和泉あかり
三階建のチラシに縁のない暮し　八尾市　高杉　千歩
イヤリング噂の種をキャッチする　伊丹市　樫谷　郁子
気負うことなくふるさとの水流れ　松江市　川本　畔
北帰行ボスは決断まだつかず　和歌山市　桜井　千秀
落ちぶれた絵馬に復活芽が伸びる　倉吉市　最上　和枝
姥桜春の息吹のなかにいる　倉吉市　山中　康子
王侯のロマンも秘めたワイン樽　東京都　後藤　早智

能子さんの句―砂漠化した生活から、一条の光にめぐり会えた心の居場所、それが川であろうか、母なる川にも見えたのであろうか。「川が好き」で終止しているのはそれを意味している。山と川は特に心の安堵を意味する不思議なものがある。気負いも虚飾もない作者がふと浮かぶ。**幸さんの句**―川柳塔復帰おめでとうございます。これまでの長い道を幸さんは正直に私たちに訴えてくれました。そうです。健康な「二本の足」、動く限り精いっぱい頑張ってゆきたいものです。**希久子さんの句**―犬も人間と同じ、一緒に生活すれば顔も心も似てくると言います。人間も同じ状態に陥ればもっと始末が悪いかも知れない。精いっぱいの犬の抵抗がとてもユーモラスで感心しました。**美代子さんの句**―作者の実感かも知れない。「気は長く、心は丸く、腹立てず、人を大きく」の格言通りはいかない。赦すことも時にはほどほどに。美容に影響が出てはつまらない。

あっさり

森松まつお選

あっさりと端役は死んで役終える　ちかし
あっさりと手の鳴る方へひるがえる　清史
あっさりと紙一枚を渡される　ひかる
リストラがあっさり捨てる人情論　健一
あっさりと喋ってしまえば楽になる　勝美
ひとり娘があっさり鬼についていく　孝子
プロポーズご冗談ねと歯が白い　像山
移り香を残しあっさり背を向ける　孝雄
喉の小骨あっさり妥協せぬという　寿美
あっさりと近づいて来る終着駅　扶美代
あっさりと昨日の事は口にせず　よしみ
くどくない妻よほんとに有難う　勝視
青竹を割った形で和解する　政良
再出発あっさり切った長い髪　淑子
あっさりが取りえで人に愛される　(高)美代子
男にはあっさり負ける強かさ　螢
切札へあっさり体をかわされる　あずき
胸のすく啖呵を切って出す辞表　徳三
胸襟をあっさり見せぬ国がある　隆盛
あっさりと巣立つ子供に持つ未練　彩子
あっさりと許せば弾む毬になる　めぐみ
文学も食もあっさり自分流　和歌子
あっさりと春にはしない雪が降る　正雄
百歳とあっさり返す達者振り　登美
ご意見も酒もあっさり受けて呑み　さち子
正論はあっさり白を白と言う　度
失恋の穴は造作なく埋まる　充子
パーティーに一夜漬など所望する　(志)千代
悔いもせず欲も持たずに散る桜　りつえ
病名を医者があっさり口にする　(川)ひかり
あっさりと許した父も同じ傷　シマ子
薄味に仕上げて品を光らせる　大輪
予備の矢を持って来たのにうんと言う　芳郎
ハードルをあっさり越えて欲が出た　雄々
大往生あっさり死んだ訳でなし　満秋
衣食住あってあっさり夢を捨て　哲男
それにしてもあっさりとした謝罪文　保州

島

原　みさを選

佳

美しい嘘にあっさり騙される　朝子
あっさりと基地はなさない星条旗　みつこ
あっさりと別れて小石蹴っている　たず子
躊躇した呼鈴笑顔で迎えられ　珠笑
あっさりの読経に悩む布施の額　靖巳

人

あっさりと過ち認めジャンプする　ヒサ子

地

一言であなた嫌いと断られ　たもつ

天

一枚の辞令あっさり人を替え　西沖　彰雄

軸

ライバルにあっさり水をあけられる　一花
とつとつと蛇皮線を弾く黄八丈　ひかる
酸性雨だんだん島が溶けてゆく　雄々
欠航の離島へ雪の横なぐり　たもつ
はぐれ鳥磁石は何時も島を指す　強一
いかなご漁島に釘煮の春がくる　章久
疎開の恩小島に返すボランティア　めぐみ
島国にのぞみを託す玩具箱　高明
遭難へ島は一日喪に服す　幸次郎
潮騒も哀しむごみの島になる　正剣
貧しくとも基地には媚を売らぬ島　哲男
物産展干魚を売る島言葉　周信
山登る故郷の島の見えるまで　隆風
よいと巻け島の岬にへばりつく　鐘造
玉砕の島に溢れるツーリスト　俊路
玉砕の島を夕陽が赤で染め　愛論
荒波の島の太鼓の乱れ打ち　和枝
しまなみの橋を見上げている櫓櫂　宏章
島を返す約束をしてそれっきり　洛酔
潮の香も載せて故郷から島便り　佳子
隠岐の島恋しと唄うしげさ節　頌悩児
焼畑の蕎麦が嬉しい島暮し　保州
生いたちは語らぬ島に来たおんな

どこからも海が見えてる島の道　あずき
島へ帰ると島のリズムで咲く椿　啓子
定期便島に活気を連れて着く　岳水
遠島をされても犬掻きで戻る　はるお
島帰りそんな言葉が胸を刺す　喜子
嫁が来る島は朝からさんざめき　あずま
遍路から仏の島は春になる　シマ子
迷うまい一本釣りの島がある　帆雀
やまんばを乗せて離島へ船が着く　芳郎
島唄を一つ土産にして帰る　玲子
何から話そうか島からの電話　扶美代
少年の扉の奥の無人島　霜石
ふだらくの渡海行き着く島がない　清史
児のいない島で童話が枯れてゆく　彩子
橋架けて島の掟が狂い出す　大輪
　佳
北の島 冬の音符が風に舞う　清芳
震災の島にも春を呼ぶ花芽　英子
少年は老いたり夢の宝島　俶子
島抜けの伝統を継ぐ舟が出る　螢
橋出来てそれから島が病み始め　ちかし
　人
息子の部屋は連絡船の無い小島　弘一
　地
上向いて歩こう信号機のない島だ　俊子
　天
むかしむかしの鱗を自慢してる島　政岡日枝子
　軸
結論を出しにときどき帰る島

闇

中塚礎石選

遠花火消えてときめく闇がある　正剣
私をなくしてしまう恋の闇　日枝子
墳丘の飛鳥の闇に内視鏡　克治
椿ポトリ闇の深さを意識する　よしみ
幼虫の耳に届かぬ蟬時雨　慕情
臓器移植麻酔の闇の中で終え　美子
石積んで積んで男が闇を抜け　充子
なにげない言葉に心闇となる　智加恵
　劦
闇の中みんな花火を待っている　霜石
ありがとう言わず別れてからの闇　潮華
闇に馴れ恥じる事さえ忘れられ　(松)輝夫
闇米で繋いだ命未だ燃える　晋
暗闇で吸う談合のうまい汁　活恵
手さぐりで自分を探す闇の中　愛論
極限の闇へ織りなす花の彩　たず子
うすら闇人恋うことは咎なのか　大輪
面会謝絶ただ今闇を通過中　徳三
消しつぼの中でうごめく闇の声　彰雄
自分史の闇の部分は秘めたまま　和歌子
暗やみが好きな私は赤い花　妻子
闇抜けて明日へつなぐ舟を漕ぐ　勇太
負け犬は悲しく闇と妥協する　俊子
身を焦がす蛍の恋を誘う闇　扶美代
言い勝って心の闇を深くする　あずま
黒幕のメモから闇が切り裂かれ　岳水
疑えば立ち木も動き出す闇夜　政良
リストラの真昼の闇に立たされる　りつえ
暗闇で真実見てる深海魚　ひかる
ご免ねが言えず闇から抜け出せぬ　時弘
羊水の闇に育ってゆく命　武史
寝たきりの不安一寸先は闇　清芳
闇に住む鬼で情けに飢えている　剛治
一本の電話で闇がパッと晴れ　英子
戒壇を巡り懺悔はまだ出来ず　重人
亡母の名を呼べばあかりがともる闇　せつ子
物あふれ心の闇に流される　靖巳
闇市が振り出しでした立志伝　(川)睦子
　佳
夕闇に悲しい影を消しに行く　彩子
四コマ目修正液で闇にする　雄々
夕闇の別れに軽い罪一つ　正雄
疑問符をさぐると闇が深くなる　銀波
暗闇の中でも刺さるうしろ指　宏章
　人
情念の虜となって闇を這う　凡々子
　地
闇の目も心で弾く津軽三味　久保　正剣
　天
廃坑の闇に炭車が裏返る
　軸
被告席心の闇に灯を探す

初歩教室

題―焼く

吐田公一

〝句は一人歩きする〟と言われる。これは何も句（川柳）に限ったことではない。卑近な例が憲法第九条の解釈にも狭義・拡大解釈がなされている通り。

川柳も一旦発表されると同時にその作家の手から離れて、作家の意図とは別に他人の鋭い観賞眼に晒される。そこに句の独立性があり、その独立性が多くの観賞者の共感を呼んだ時、これは名句となる。

この多くの観賞眼に耐えるためには、先ず一人よがりの句であってはならない。そのためには誰にでも解る句、平易な言葉を使って誰にでも作れない句というのが理想的。

初歩教室は以上を目標に学んでゆきたい。

添削句

○七輪で私も負けずさんま焼く　煩悩児
七輪でが冗長。もう少し叙情的に詠むこと。

▽さんま焼く独り暮らしの煙沁む

○妬いている連れあいこんな人だった？　秀策
疑問符はできるだけ避ける。連れあいという表現も一考を要する。

▽こんなに妬く女と知らずに来た老後

○手を焼いた子が世話を焼くぼけの俺　好勝
焼くを二語重ねるより素直にされるとすれば―。又下五の表現がきつすぎる。言い古された言葉だが車椅子を小道具に

▽手を焼いた子に世話される車椅子

○踏まれても焼かれても吹く草の意地　像山
この場合は中八になっても芽吹くとすべき。

○潮焼けの顔に白い歯又来ると　栄翁
下九音字の表現が説明的で感動を誘わない。

▽潮焼けの顔なつかしい故郷の友

○吹雪舞う屋台で一ぱい焼き鳥で　四三郎
下五へ焼き鳥でと持ってきたのが失敗

▽焼き鳥の酒が恋しい吹雪の夜

○類焼で夢も希望も水びたし　舞夢
全くその通りで説明句

▽火災保険見直してみる火事騒ぎ

○日曜日ゆっくりこねてパンを焼く　深雪
説明句に近い。中七は冗長。情景は異なるがパンを焼く匂いで覚める日曜日

▽ガングロでない素顔の日焼けさわやかで　靖雄
着想は実にすばらしい。

▽さわやかな日焼けガングロ寄せつけず

○うん蓄と一緒に焼そば出来上る　サト子
下五が単純に結んでしまっている。

▽うん蓄も盛った焼そば娘の自慢

○現役で暮らそう孫の世話を焼く　純子
人情の機微に触れるような内容を―

▽孫の世話焼いて親から疎まれる

○拘りの舌へ秋刀魚を炭で焼く　千代
秋刀魚を詠まれた句が多かった中でも、この上八の表現はお見事。ただ私なら

▽拘りの舌へ秋刀魚の炭火焼き

○枯葉焼く温い心を取り戻す　ひさ乃
焚くの中には香を焼く（新明解国語辞典）などがあるので

▽幼少の頃なつかしむ落葉焚き

○目刺し焼き老いた夫婦に夕の宴　五月

▽目刺し焼く日が続いてる老いの膳
本来目刺しは焼いて食べるものだから焼くを詠み込まなければ

▽年金の暮らし目刺しの日が続き

○世話焼いて伸びる芽を摘むおばあちゃん　君江
お年寄りの自己満足を表現するとすれば

▽世話焼いて伸びる芽を摘む老いのエゴ

○舞い過ぎて手許不如意の目玉焼き　㈱玲子
舞い過ぎての解釈がむずかしい。ひとりよがりの言葉遣いにならないように

▽振舞いが過ぎて今夜は目玉焼き

○元気な娘裏表無く焼き上り　つよし
ドラマ性が乏しい。少し創作を―
▽見違えたハワイ帰りの日焼けの娘
○手の焼けた子が誰れよりも親思い　芳江
手を焼かせた子が親思いとか親孝行という句は従来より沢山詠まれている。
▽手を焼いた子の行く末が案じられ
○いも匂い焚火の周り靴動く　賢治
下八音字はご自分だけが分る内容
▽子等集う焼き芋匂う落葉焚き
○孫にまで世話を焼かせて八十五　すすむ
下五は言わずもがなの言葉。あっさりと
▽孫にまで世話を焼かせる歳となり
○朝焼けに夫の顔がうきうきと　志津香
夫の顔というより擬人法を活用すると句に拡がりを呼ぶ。
▽朝焼けにゴルフバッグがうきうきと
○子ら集い久方振りに肉を焼く　智加恵
焼肉を擬人法（待っている親）にすれば
▽帰省する子を焼肉が待っている
○一筋の煙になって火葬場　よしこ
原句では一抹の哀愁がただよわない。
▽火葬場の煙無情を呼ぶ涙
○土手焼の煙が春の風になび　洋子
土手焼のあとから土筆などが生える様を
▽土手焼きの煙に春が目覚めだし
○野焼して明日の豊作祈る農夫　宗明
農夫では下六。農夫の代役として鍬などを用いれば―。擬人法
▽野焼して明日の豊作祈る鍬
○たこ焼が待つ塾帰りの子達　志重
中八下三で語呂が悪くギコチない。
▽塾帰り待つたこ焼の灯と匂い
○天寿全う煙は天へ駆け上る　てる代
全うより感動詞を用いれば
▽ああ天寿煙は天へ駆け上る
○あの人と思えぬ焼けた白い骨　(鳥)玲子
お骨で焼くは含まれる。黒と白を対象的に詠んでみた。
▽腹黒い人だがお骨白かった
○落日に焼かれてきれい茜雲　章司
人間が詠めていない。
▽夕焼けの道ミヨちゃんと手をつなぎ
○旨そうな匂い追い出す焼鳥屋　郁子
追い出すは奇をてらいすぎ。
▽旨そうな匂いふりまく焼鳥屋
○草餅を焼く野の匂い広がりて　トシエ
下五を単純に結んでいる。
▽草餅を焼いた匂いに故郷の春
○焼け焦げで嫌煙権をやんわりと　方子
この句も下五に難
▽焼焦げから嫌煙権の味方する

佳句

今日もまた焼き場に煙たなびいて　トキ
世話をやきやかれてみたい独り者　春江
焼け跡の戦後ゼロから立ち直る　晩翠
焼鳥が男の愚痴を聞いている　円女
想い出を焼いて煙の行方追う　彰雄
焼きもちはどれもこんがりめがベスト　一歩
ばあちゃんが昔話で餅を焼く　宏至
焼き餅を焼いた昔が花でした　和可
合格の祈願重たい絵馬を焼く　満子
ネガ燃やし残像となる胸の内　(三)八重子
世話を焼き過ぎて嫉妬の種を蒔く　美子
夕焼けの空に明日の彩がある　梓
メザシ焼く鈴せわしげに猫かえる　民
寒餅を焼く老母の背に春が寄る　美也子
焼芋の拾い読みする包み紙　幸枝
思い出を焼いて第二の道を行く　(山)雅子
（第二の道が効いている）
ダイエット話す最中に芋が焼け　(清)玲子
（ユーモラスな見付けで成功）
焼けぼっくいの火種あちこちクラス会　宏子
（見付けもいいし表現も）
焼くほどに旨味でてくる恋もある　昌子
（全くうまい）

私の句

身を焼いて人に温もり贈る榾柮（ほた）

川柳塔社各賞の受賞句一覧

二〇〇〇年という節目の年に当り、川柳塔社各賞の足あとを振り返ってみました。

各賞とは川柳塔欄（同人吟）を対象とする「路郎賞」水煙抄欄（誌友吟）を対象とする「川柳塔賞」、各地柳壇の佳句地十選から選んだ「各地柳壇賞」、愛染帖は銀河系・渺湖抄と名称が変わり、作品群から選んでそれぞれ「愛染帖賞」「銀河系賞」「渺湖賞」。また、茴香の花も作品群から「茴香の花賞」、一路集（課題吟）の各題天位句を対象とする「一路賞」の六つの賞です。

六賞は創設の年度も異なり、選考の方法も違います。特に路郎賞・川柳塔賞の二賞は昨十一年度から、今までの一句対象から八句対象の作家賞と変わりました。

既に七三七号（昭和六十三年十月号）と八〇〇号（平成六年一月号）にも受賞作と作家名を掲載しています。

路郎賞

昭和四十一年度（一九六六）＝第一回

内職に藤色があるたのしさよ　　内藤きさ子

〈準優秀作〉

春に咲く花をわが手で咲かせた気　　寺田　花宵

疲れてるまぶた閉じれば音がする　　宮川　珠笑

昭和四十二年度（一九六七）

身よりなき老婆いくさのことにふれ　　森田　布堂

〈準優秀作〉

僧正ヶ谷雨も寿永の色なるか　　正本　水客

人生の傾斜へころげまいとする　　不二田一三夫

昭和四十三年度（一九六八）

似て居ない父に足音だけが似る　　木山　遠二

〈準優秀作〉

添わしても根じめの花はあっち向き　　西出　一栄

炎天をテクテクと自嘲する　　工藤　甲吉

昭和四十四年度（一九六九）

足跡を残そう砂のある限り　　本田恵二朗

〈準優秀作〉

父の歳より長く生き父を識る　　後藤　梅志

情熱の枯れた時　樹氷のようになりたい　　酒田　清子

昭和四十五年度（一九七〇）

握手した手が離れないまま坐り　浜田久米雄

〈準優秀作〉

冷戦中なのに仲人頼まれる　野田素身郎

ふところの金がいや味な口をきき　有信新之助

昭和四十六年度（一九七一）

灯台の夕陽神話を抱きよせる　尼　緑之助

〈準優秀作〉

久々の素足へ女たかぶって　八木　千代

煩悩は裂けし柘榴に極まれり　吉岡　美房

昭和四十七年度（一九七二）

瞼閉ず耐える苦痛が洩れぬよう　堀江　正朗

〈準優秀作〉

耐えて来た拳を悔いもなく開き　水粉　千翁

余生など牡丹は知らぬいさぎよさ　三井　酔夢

昭和四十八年度（一九七三）

揚っても揚っても雲雀に空がある　小浜　牧人

〈準優秀作〉

落ち着かぬ心へ香を焚いてみる　本田恵二朗

片目の達磨いつも心の隅に抱く　小出　智子

昭和四十九年度（一九七四）

楢山へ背負うて呉れる子もおらず　藤井　春日

〈準優秀作〉

一と粒の種　太陽は見逃がさず　本田恵二朗

石だたみの余韻　歴史が通り過ぎ　正本　水客

昭和五十年（一九七五）

悔いのない汗千金の夢追わず　林　瑞枝

〈準優秀作〉

花芯をのぞいて花を哀しませ　岩田　美代

生きてゆく蟻に日向も蔭もなし　小浜　牧人

昭和五十一年度（一九七六）

染め替えて羽織は過去を喋らない　岩田　美代

〈準優秀作〉

ポケットに蜜柑が一つ落着かぬ　谷垣　史好

生き難き死に難き貌　檻の鶴　三宅　不朽

昭和五十二年度（一九七七）

生き方の違いを敵のように言う　森井　菁居

〈準優秀作〉

女三人ふっと話題の無いこわさ　垂井千寿子

春めぐる母なる匂い蓬摘む　水粉　千翁

昭和五十三年度（一九七八）

満開の花に誘われ修羅出土　香川　酔々

〈準優秀作〉

菜を漬ける女の業と楽しさと　岩田　美代

樟脳よ君と僕とは痩せるべし　高杉　鬼遊

昭和五十四年度（一九七九）

ペンシルの芯は脇道など知らぬ　松原　寿子

〈準優秀作〉

銀髪になったら着たい色があり　本間満津子

児のおしめ換える十指にある祈り　和田維久子

昭和五十五年度（一九八〇）

女と妻のあいだで好きな彩を着る　小出　智子

〈準優秀作〉

秋の蚊よお前これからどうする気　野田素身郎

ためされているとも知らずまだ喋り　児島与呂志

昭和五十六年度（一九八一）

順々に嫁くそれだけを羨まれ　大矢　十郎

〈準優秀作〉

上役と打ち出してから棋力落ち　野田素身郎

元旦の心四恩をかみしめる　工藤　甲吉

昭和五十七年度（一九八二）

来る人が来て去に元日黄昏れる　市場没食子

〈準優秀作〉

御身ぬぐい大仏様のお手に乗る　高橋　操子

雨や憂し家庭医学の赤い本　谷垣　史好

昭和五十八年度（一九八三）

歳月やゆるし合うより他はなし　西山　幸

〈準優秀作〉

水褒があふれて朝を疑わぬ　八木　千代

馴染客犬へも土産買って来る　川口　弘生

昭和五十九年度（一九八四）

エトランゼ前もうしろも風が吹く　林　はつ絵

〈準優秀作〉

現代の落人かくれ里がない　西出　楓楽

ぽんぽこ山の月は狸を眠らせぬ　林　瑞枝

昭和六十年度（一九八五）

春ざわざわ一級河川まだ眠り　谷垣　史好

〈準優秀作〉

薬玉を迂闊に割れば核になる　渡辺　独歩

春風に可愛い嘘の二つ三つ　奥田みつ子

昭和六十一年度（一九八六）

聞かせとこ九官鳥が喋るから　高橋千万子

〈準優秀作〉

月の砂漠を妻と歌ったことがない　波多野五薬庵

裏切りの話はしない手話仲間　辻　白渓子

昭和六十二年度（一九八七）

この夫に草書のかすれがちと欲しい　松川　杜的

〈準優秀作〉

混浴の吃水線を心得る　土居　耕花

叱られてみたくて軽い嘘をつく　樫谷　寿馬

昭和六十三年度（一九八八）

アトリエのみかんころんだものでない　高橋　操子

〈準優秀作〉

空調の音かすかなり美術展　奥田みつ子

灯を消してただそれだけの夫婦なり　榎本　吐来

平成元年度（一九八九）

さくらさくら今年も皆に逢えました　宮崎シマ子

〈準優秀作〉

どの彩を足しても虹が落着かぬ　福本　英子

女郎花やわいおとこが多すぎる　田中　正坊

平成二年度（一九九〇）

ああ夫婦おんなじ時に胃が痛む　奥田みつ子

〈準優秀作〉

雲に来てひばりはやっと巣を想う　栗谷　春子

わが恋は褪せずあかねの炎ゆる中　春城　年代

平成三年度（一九九一）

千本を伐り一本の植樹祭　斉藤　劦

〈準優秀作〉

ひょうたんの駒を出そうとあせってる　吉岡きみえ

光らない釘が一番きいている　松下たつみ

平成四年度（一九九二）

頂点に立つといくつも影が出来　矢野　佳雲

〈準優秀作〉

六十から女に生きる差がうまれ　片岡智恵子

ひとりよがりの席に画鋲が落ちていた　丁坪サワ子

平成五年度（一九九三）

ああ余生つるべ落しに日が暮れる　永田　俊子

〈準優秀作〉

残ったのはロボットだった消去法　安平次弘道

酉の年サンズイ偏も要りますな　岸野あやめ

平成六年度（一九九四）

季の移ろいを追うていて歳をとり　菱田　満秋

〈準優秀作〉

散骨もいいがお墓に妻が居る　弘津　柳慶

安心のかたちに妻も子も眠る　池　森子

平成七年度（一九九五）

本番になると小さく見える的　平田　実男

〈準優秀作〉

羅災再び割れない亡母の碧い壺　亀岡　哲子

来た道に残して置こう花の種　園山多賀子

平成八年度（一九九六）

うたかたの世や晩学の手暗がり　舟渡　杏花

〈準優秀作〉

水族館の硝子に映る恋人よ　桑原　道夫

この街が好きで自転車漕いでいる　金山　夕子

平成九年度（一九九七）

母乳呑むまるで太鼓を打つように　政岡日枝子

〈準優秀作〉

古き良き時代優しく貧しかり　矢内寿恵子

一徹の骨の硬さが邪魔となる　北山　悟郎

平成十年度（一九九八）

大文字亡夫が好きな位置にいる　山海　友熙

〈準優秀作〉

奇を衒うものなし石臼の重さ　牛尾　緑良

折鶴の溜息を聴く深い闇　岩崎みさ江

平成十一年度（一九九九）

プロポーズ君を終身刑に処す　川上　富湖

コスモスになりたい刺を抜いてみる

バレンタイン今日限定のコントだよ

やわらかい要塞を持つオムライス

ストローの穴に詰まった好奇心　高瀬　霜石
輪の中に人数よりも多い耳
文学の少し手前で売れている
終電車明日がソロリと降りて来る

〈準優秀作〉

青空が「進め」と手旗振っている　山本希久子
働けるこの手に感謝手を洗う
宿題が続く子の旅父の旅
くたびれた旗だが風を待っている
日本晴れよきライバルに巡り合う
老母が待つ芋の煮っころがしが待つ
いちにちに一ミリ虹を織っている
丸木橋生まれる時も死ぬ時も
ロボットの腕に介護をされそうだ
微熱つづく未練を少し溜め過ぎた
誤解されたまま紅葉はまっさかり
仏壇の裏に答えはきっとある
人恋し女の駅に灯をともす
全身で笑ってくれる赤ちゃんよ
男と女どこまで続くかくれんぼ
切り札のエースはないが負けられぬ

川柳塔賞

昭和四十二年度（一九六七）＝第一回

雲の峰あるけばあるくほどひとり　三宅　不朽

〈準優秀作〉

情熱の残りを犬とじゃれて見る　前田芙巳代
理性に負け執念に燃え筆をとり　小谷　葉子

昭和四十三年度（一九六八）

消えるから雪は刹那を浄く舞い　高杉　鬼遊

〈準優秀作〉

このままで良いとつくづく思える日　増田　次章
銀婚へ曲りくねった道で着き　八木　千代

昭和四十四年度（一九六九）

宝石の悲哀永住権がなし　王　紫

〈準優秀作〉

縫い上げて羽織って妻のものでなし　両川　洋々
何げなくいっしょに洗濯してあげる　樋口　一峯

昭和四十五年度（一九七〇）

倖せな女にふだん着が似合う　小出　智子

〈準優秀作〉

老夫婦縦に並ぶ歩乱さない　河野　君子
金魚すれちがう互いに目もくれず　岡元　春昇

昭和四十六年度（一九七一）

モナリザの笑いへ私も笑ろうてみる　生信　笑子

〈準優秀作〉

空白の欲しさが草をむしらせる　榊原　秀子
ひと眠りしたら小さな欲だった　阪上十止庵

昭和四十七年度（一九七二）

飾り壺一枝さされた事もなし　谷岡　芳枝

〈準優秀作〉

亡母点となりて心の海に佇つ　嘉数千代香
雑然とテトラポットは役に立ち　玉置　重人

昭和四十八年度（一九七三）

めでた　めでたでひとり娘をもってかれ　堀江　芳子

〈準優秀作〉

鉄骨の夏雲湧かすエネルギー　谷　のぶお
春風に唯なんとなく遠廻り　荒田　つる

昭和四十九年度（一九七四）

小出しする愛円周をかけている　小谷　葉子

〈準優秀作〉

春闘の夫を信じてみごもれり　谷川　渥子
引金に指掛けたまま説く平和　麻野　幽玄

昭和五十年度（一九七五）

末法の世の新聞をたたみけり　安藤寿美子

〈準優秀作〉

鴉の目柘榴割れる日知っている　梅本登美也
朝の靴働く方へ向けてある　大林曲ん手

昭和五十一年度（一九七六）

お早ようと豚が正しくささやいた　安達　潮音

〈準優秀作〉

てのひらの温みも投げたお賽銭　山田スミ子
本当の甘さは塩が知っている　江口　度

昭和五十二年度（一九七九）

咲いて散る　ただそれだけの世に疲れ　西山　幸

〈準優秀作〉

ぼろぼろの心を洗う旅に出る　納　史葉
善人のその日その日を音たてず　大林曲ん手

昭和五十三年度（一九七八）

デッサンのままで成長して女　古谷　節夫

〈準優秀作〉

考える蛙ポカンと浮いてみる　矢野　佳雲
私だけ入る小さな円を描く　川上　富子

昭和五十四年度（一九七九）

一匹がはねればみんな跳ねる魚篭　岩田　三和

〈準優秀作〉

仁王像の阿吽の間にある笑い　辻　文平
飛びついてからをどうする青蛙　桑田　静子

昭和五十五年度（一九八〇）

該当作なし

〈準優秀作〉

大胆な女は踵返さない　園山多賀子
○歳の瞳の中にいる私　古田　寛子
もう一人の私がいればぬりつぶす　橋元　美恵

昭和五十六年度（一九八一年）

この街の機械の音を愛す父　西村芙佐女

〈準優秀作〉

和の中に生きて夕日のすばらしさ　天満三千代
逃げ過ぎて風が変ったとも知らず　矢野　佳雲

昭和五十七年度（一九八二）

太陽の笑顔を独り占めにする　奥山美智子

〈準優秀作〉

この城に生きたあかしの石の苔　松本はるみ

人生はどこかに抜ける穴がある　岸本豊平次

昭和五十八年度（一九八三）

渡し舟みんないい顔して渡る　澤田　千春

〈準優秀作〉

春夏秋冬　草の匂いの母でいる　寺田　裕美

こだわりを捨ててダルマは起き上がる　石原　淑子

昭和五十九年度（一九八四）

不器用な夫婦で植える柿の種　吉川　寿美

〈準優秀作〉

目の鱗みたいに外すコンタクト　福井　桂香

正面に山ありゴミを焼いている　田中　叶

昭和六十年度（一九八五）

順番に咲いて散るなら事もなし　赤木　和子

〈準優秀作〉

寝ておれと叱るが何もしてくれず　今西　静子

定年を待たずに定期券が切れ　高崎　雀声

昭和六十一年度（一九八六）

鶴の瞑想或は人より深からん　永田　俊子

〈準優秀作〉

投げられた小石をひとつ持ち歩く　清水　康恵

寡黙なる大樹の下の思いやり　桜沢あか里

昭和六十二年度（一九八七）

裁かれているのだろうか寒すぎる　河瀬　芳子

〈準優秀作〉

昔むかしの話が好きな藁の屋根　流　奈美子

人の世の長し短しどっこいしょ　藤井　高子

昭和六十三年度（一九八八）

思いきり眠ってみたいねむり草　土居ひでの

〈準優秀作〉

追伸がずっしり重いしだれ梅　野村　京子

今に見て居れと雑巾掛けをする　児玉　歌子

平成元年度（一九八九）

もたれ合う人と喧嘩をしています　池　森子

〈準優秀作〉

姑さんと嫁とでなしに出会いたい　山根　八重

千羽鶴北の序曲を思いだし　森　茜

平成二年度（一九九〇）

泣きに来た海が他人の顔をする　野村　京子

〈準優秀作〉

人並という幸せがありがたい　石尾かつ乃

桐箪笥のしみはおんなの夢のあと　清水　絹子

平成三年度（一九九一）

桜咲く放浪癖はまだやまず　高杉　千歩

〈準優秀作〉

子育てが終って消えた力瘤　高田美代子

鮒ずしを食べて近江の息を吐く　森崎　忠禄

平成四年度（一九九二）

嫁ぐ子に正座で話すこともなし　松浦登志子

〈準優秀作〉

運動会おわって長い夕ごはん　酒井　靖子

花ひととき人ひと盛り冬木立　宮崎　菜月

平成五年度（一九九三）

したたかに生きる女の返し縫い　児玉　歌子

〈準優秀作〉

主のない鍬の楔を抜いてやる　原　章峰

狙でみじんに刻む消費税　尾宮　弘治

平成六年度（一九九四）

疑えば海の碧さも空の蒼さも　永田　暁風

〈準優秀作〉

女もう女になった日を忘れ　榎原　公子

児の寝顔いくさにご縁ないように　森田　文

平成七年度（一九九五）

貧乏は気楽泣きたい時に泣く　渡辺　南奉

〈準優秀作〉

伴走の妻が時どき先を行く　村上ミツ子

待つ人がいるしあわせな急ぎ足　岩崎みさ江

平成八年度（一九九六）

洗うてもまた洗うても軍手なり　倉垣　恵美

〈準優秀作〉

取り巻きになるには骨が硬すぎる　一本　勇太

困った子困った子だと自慢の子　早川　盛夫

平成九年度（一九九七）

仲のよい夫婦で通すバスツアー　篠原いつふみ

〈準優秀作〉

子育てを終えて夫と恋をする　川島　良子

往復の切符がないと落ち着かぬ　立蔵　信子

平成十年度（一九九八）

社説書く人大臣になって欲し　長谷川　淳

〈準優秀作〉

おかわりを言わぬ仏へてんこもり　野村　清美

真心を軽い私の武器にする　山根めぐみ

平成十一年度（一九九九）

歯を磨く美味しいものが食べたくて　和泉あかり

ときどきは自分のために手を叩く

指切りをしようと土筆伸びてくる

灯を消すと厨の浅蜊はなしだす

丁寧に蜜柑を剝いて聞き上手

背くらべしたどんぐりのかすり傷

一坪の庭に見飽きぬ秋がある

仏さまになって大事にされている　田辺　鹿太

〈準優秀作〉

体臭を失くした父の日向ぼこ

無駄骨と知りつつ天に吠えてみる

霊園の待合室で見る夕陽

閑居して妻と欠伸をうつし合う

栄転のたびに遠のく子との距離

飽食の裁きを受ける皮下脂肪　大橋　鐘造
毒のあるアンタ毒消しゃ要らんかね
ブランコで身の振り方を考える
聞き上手腹の底まで喋らせる
真っ直ぐに歩いて風に笑われる
エレベーター互いにそっぽ向く他人
有頂天壁の厚さをまだ知らぬ
お互いにとぼけ上手で回る独楽
炎を抱いて女になっていく少女
相づちを打って相手を確かめる
遮断機の向こうも仮面つけている

各地柳壇賞

昭和四十八年度（一九七三）＝第一回
握手など知らない母の低い腰　大矢　十郎
昭和四十九年度（一九七四）
ガラス切る一直線の音さやか　土井　鹿蔵
昭和五十年度（一九七五）
和を願う別れの嘘が美しい　岩本雀踊子
昭和五十一年度（一九七六）
能面の裏に烈しき血の通う　高橋　夕花
昭和五十二年度（一九七七）
抱き上げた母の両手の広さかな　大路　美幸
昭和五十三年度（一九七八）
遺影おがむ心を風が吹き抜ける　竹中　綾女
昭和五十四年度（一九七九）
よく出来た積木ゆすって見る他人　梅原　憲祐
昭和五十五年度（一九八〇）
捨てられた姿で葱は根をおろし　新谷　笑痴
昭和五十六年度（一九八一）
嬉しい日悲しい日にも花は売れ　狭間希久志
昭和五十七年度（一九八二）
独り居の耳が大きくなってくる　本間満津子
昭和五十八年度（一九八三）
砂山のもろさを知らぬ少女たち　八木　千代
昭和五十九年度（一九八四）
サインペン女は妻になり切れぬ　遠山　可住
昭和六十年度（一九八五）
どのペンにかえてもやっぱり僕の文字　田中　正坊
昭和六十一年度（一九八六）
そろばんに合わぬ律儀が捨てられず　永田　俊子
昭和六十二年度（一九八七）
来年も生きるつもりの花の種　田中　正坊
昭和六十三年度（一九八八）
子を五人産んでひとりの米を研ぐ　赤川　菊野
平成元年度（一九八九）
菊活けて心変りを追いかけず　吉岡　美房
平成二年度（一九九〇）
森を抜けると風は無色になって吹く　春城武庫坊
平成三年度（一九九一）
青空を見ると洗濯したくなる　井崎ミサ子

平成四年度（一九九二）
一生をスペアで終る鍵もある　池永　正雄
平成五年度（一九九三）
頭打つ度に男の顔になる　柿花紀美女
平成六年度（一九九四）
野次馬の中に我が子がまじってる　野瀬　昌子
平成七年度（一九九五）
一月十七日　晴　街がつぶれた　小林　一夫
平成八年度（一九九六）
安いのでいいよ最後に入る箱　新家　完司
平成九年度（一九九七）
片方の靴が昭和を脱ぎきれぬ　梅田　宣司
平成十年度（一九九八）
断ち切ったはずの心が揺れて秋　長浜　澄子
平成十一年度（一九九九）
古傷は何度なめてもほろ苦し　西出　楓楽

愛染帖賞

昭和六十二年度（一九八七）＝第一回
呼び鈴に妻よりも猫速く来る　木山　遠二
九十には恋人がなし長閑なり
寝たきりがお天気博士のファンとなり
老夫婦お花見猫も来て座り
寝たきりに妻はにこにこ叱られる
昭和六十三年度（一九八八）
三界の万霊雪となって舞い　工藤　甲吉
荒武者に似る鱈の顔北の貌
山一つりんごの花に包まれる
原爆の日はみちのくの果ても照り
二人寝てチンチロリンを聞いている
平成元年度（一九八九）
書きすぎぬように大事なひとへ書く　八木　千代
今はたましいの時間で月の下
書き終えた手紙と二枚貝の殻
思い出のありすぎるのも刑のうち
すすき野に小さな弓を負うてゆく

銀河系賞

平成二年度（一九九〇）＝第一回
きのうより重いバットを振ってみる　新家　完司
連敗の力士の顔を見ておこう
なつかしい人なつかしい歩きかた
子供らよ虹にふりかえりもせずに
ある時は鯨になって群を出る
平成三年度（一九九一）
風船同士重さを比べあっている　土橋はるお
銭を喰う子供がなけりゃ淋しいぞ
エッチな写真入れた財布を子が覗く
面白いことにも個人差はあるよ
D51の煙が入る喫茶店
平成四年度（一九九二）
幸福が続きますよう腹八分　藤田　泰子

流される方が楽だと知っている　高橋千万子
青信号ばかりで眠くなってくる
差引零　余さないのもむつかしい
誤魔かしてみても白には戻れない

平成五年度（一九九三）

紙コップ　ビールの重さ手にこたえ　藤田　芳郎
ごみ箱は世帯ゆずった事を知る
一つの輪うなずく顔としぶい顔
財布拾うて咄嗟に浮かぶ善と悪
許すこと出来ればなおる不眠症

平成六年度（一九九四）

熱いお茶久しく妻に礼言わぬ　林　荒介
空気にはなれない妻で笛が好き
ぼろくそに言うて無口に負けている
お見舞に和尚スーツで来てくれる
気をつけろ資格不問と書いてある

渺湖賞

平成七年度（一九九五）＝第一回

生かされた時間の中の焚火跡　斉藤　劦
み仏のうしろ姿も見て帰る
まだ明日がある掌中の白紙
わたくしの影を匿う樅の下
追い風が助けてくれた坂だった

平成八年度（一九九六）

朝の電車で青春に囲まれる　古久保和子
軽音楽聴かせておこう種袋
川が澄んでいるこの街の身だしなみ
りんご園に脚立ある風景が好き
ふる里の山に落ち着く旅疲れ

平成九年度（一九九七）

合鍵を売りに行こうか朧月　池　森子
存在感あるかあさんのいなりずし
皿を割る爽快感が怖くなる
ピンキング鋏で冬の絵を切ろう
座ぶとんの縦横知らず五十年

平成十年度（一九九八）

罪状もなく身の丈ほどの我が塔よ　佐藤　季顕
寒椿　わたしも両親も離婚
一人暮らしの首に吊り革温かし
万策が尽きて白さを売ることに
吽行で転んでからの遺書がない

平成十一年度（一九九九）

水仙の目線たどると海に着く　西山　幸
忍耐は真夏のカラスほどでなし
日常を手許において老いてゆく
朝顔のリズムで皿に目玉焼き
備忘録に私の名前かいておく

茴香の花賞

昭和六十二年度（一九八七）＝第一回

許せないものは許さず秋を待つ

母の忌の薔薇も牡丹もにくむべし
紬着て素直なものを取り戻す
今日も元気ですかいたずら電話さん
表札もひとり暮らしに草臥れる

昭和六十三年度（一九八八）

木守柿　刻を飾ろうかと思う　後藤　正子
ほうれん草の僅かな紅が衝いてくる
心ぼそい日暮れを愛撫してしまう
両肩を絹の重みにみたされて
山の名をひとつ刻んでから越える

平成元年度（一九八九）

蓋をしておけば誰かが開けにくる　西口いわゑ
晴着きる女に年はないのなり
マネキンが冷たく笑う飾り窓
パッチワーク恋のかけらを継ぐように
姫だるまやさしい顔で起き上がる

平成二年度（一九九〇）

蝶になるまでのプロセスたのしもう　佐藤　奏月
トマトを切るとなまくらなのがよくわかる
雨の日のポストに頼りがいがある
鞦韆の漕げない友と乗るシーソー
寂しくてもいちど声を掛けたくなる

平成三年度（一九九一）

五十五歳柱の傷も深くなる　松本　文子
ぼろぼろの心に化粧して出かけ
笑ったからすこし体が軽くなる
一つ加えて人並にしてもらう
名月や母に電話がしたくなる

平成四年度（一九九二）

一気に書いた便り一気にポストまで　田中　輝子
水漏れの早さを忘れないでおく
せせらぎを宿すわが体内の哀
梨も林檎も一度皮ごと食べてみる
見守って下さる蘇生する時間

平成五年度（一九九三）

失った時間を抱いているたまご　木本　朱夏
一隅を照らす灯と親密に
迎え火を焚けば子猫も畏まり
夏の疲れが少し滲んでいる手紙
時雨きて身を庇うものなにもなし

平成六年度（一九九四）

敵持たぬ人を信じてよいものか　西出　楓楽
ちりめんじゃこの雄か雌かを考える
一流の下っ端になることにしよう
何かにとり憑かれたようになまけてる
ほころびはほころびのまま生きている

平成七年度（一九九五）

種を蒔く話をせねば始まらぬ　古久保和子
いざと言う時の輪ゴムが腕にある
しんどいと言えば空気が洩れそうで
綻びから漏れる話がおもしろい
野あざみの棘が守っている立場

平成八年度（一九九六）

沈黙の箱に乗り込む地階まで　牧渕富喜子
振り出しに戻るに要ったエネルギー
影長しわたし私が先に出る
少しずつ捨てていたのも自己保身
納期限この世の事は納まりぬ

平成九年度（一九九七）

ゆっくりと回る地球に住んでいる　石垣　花子
亡夫の打った釘もぼつぼつ錆び出した
鈴付けてから面白くなった猫
今日も元気にポストへ種を播きにゆく
広口の瓶　手を入れて見たくなる

平成十年度（一九九八）

結び目の中に答があるだろう　小野　克枝
天才と言われた人の小さい墓
炎の橋を渡り終えると駅に着く
人生の午後を考えまいとする
雑木林を抜けると哀しみも抜ける

平成十一年度（一九九九）

咲く前の庭でいちばん美しい　藤田　泰子
欲を抱く瞳は生き生きと光ってる
マンネリの回転木馬で落着ける
耐え忍ぶそんな言葉も死語となり
色褪せてやっと私の掌になじむ

一路賞

平成元年度（一九八九）＝第一回

山ほどを語り尽して夫婦かな　牛尾　緑良

平成二年度（一九九〇）

幸せはじっくりがよし豆を煮る　田中　正坊

平成三年度（一九九一）

ほつれてはならぬ絆だ深く縫う　西原　艶子

平成四年度（一九九二）

花束を投げると海の喪があける　椎江　清芳

平成五年度（一九九三）

百の修羅越えて静かな夫婦の絵　川島諷云児

平成六年度（一九九四）

少年のいびつな穴に合った鍵　本田　忠男

平成七年度（一九九五）

一喝がとどろきそうな父の墓　玉置　重人

平成八年度（一九九六）

遅れても我が道をゆく蝸牛　山根めぐみ

平成九年度（一九九七）

縄文の壺で咲く日を待った種　海老池　洋

平成十年度（一九九八）

仲直りパンがふっくら焼けました　高田美代子

平成十一年度（一九九九）

器より大きな欲を盛りたがる　三宅　保州

第五回オール川柳賞
大賞に川上大輪氏

第五回オール川柳賞発表記念大会2000は3月25日12時半から、三井アーバンホテル大阪・ベイタワーで開かれた。大賞を本社同人・川上大輪氏（和歌山市）が受賞した。同氏は昨年の第四回オール川柳賞準賞に引き続き「時間の中で」と題する二十句で大賞を獲得。なお、第三回オール川柳賞大賞は一月に急逝された川上富湖さんが受賞され、夫婦揃っての大賞は全国的にも珍しい。

本社同人の西谷大吾氏（青森県）の「雪変化」が準賞、佳作に高瀬霜石氏（弘前市）の「だんだら坂」・海老池洋氏（枚方市）の「四B」が入賞した。

また、当日の宿題6題・事前投句1題（8人共選）の各特選3句の本社関係の受賞は次のとおり。

「誘う」　尾藤三柳選

絵手紙で誘うとみんな来てくれる　西出楓楽

大野風柳選

誘ったら素直について来た妻だ　宮崎シマ子

斎藤大雄選

春らんまん嫌いな奴に誘われる　濱田良知

柏原幻四郎選

おとこだと思っていないから誘う　立蔵信子

竹本瓢太郎選

誘われた訳は聞かない方がいい　川上大輪

岩井三窓選

誘われた訳は聞かない方がいい　川上大輪

「時事川柳」　前田咲二選

新聞は白紙で届く朝がいい　川上大輪

「膨らむ」　奥山晴生選

膨らんだ恋はモンシロチョウになる　立蔵信子

「窓」　小松原爽介選

小さな家の小さな窓に雪月花　高田美代子

「シニア」　泉比呂史選

喜寿傘寿まだ機関車は錆びてない　川上大輪

「雑詠」　橘高薫風選

四月馬鹿亡妻が帰って来ると言う　川上大輪

富湖からの贈り物

川上大輪

今回の受賞は喜びと言うより「まさか」「嘘やろ」「えっなんで」ドッキリカメラのように「はい、冗談はここまで」といつ言われるのかなと思っていました。

第二回大会からオール川柳賞に応募し、読者柳壇賞、第三回は佳作、第四回は準賞と毎年幸運にも恵まれてきましたが、今年に入って富湖が急逝、娘が車に撥ねられ入院、息子も大腸カルチノイドという場合によっては癌より怖いというポリープが見つかり入院と最悪の事態が続いていました。また第三回の大会で富湖が大賞という栄誉に輝き、これで当分和歌山県に大賞は回って来ない、まして夫婦が大賞を受賞することはあり得ないと思っていましたので、会場で私の名前が呼ばれた時は本当に「まさか」「嘘やろ」「えっなんで」と半信半疑でした。本来なら飛び上がるほど嬉しかったはずなのに、それが出来ませんでした。いつも一緒に居た富湖の姿がなかったからだと思います。でも今回の受賞は富湖からの贈り物だったような気がします。

「お父さん頑張って」と天国から励ましてくれたのだと思っています。川柳を教えてくれた父大矢十郎といつも一緒に川柳の道を歩いてくれた富湖、そして薫風主幹はじめ川柳塔のみなさんのあたたかい励ましやご指導に感謝したいと思います。そしてこれからも亡妻富湖と一緒に川柳を楽しんでいきたいと思っております。

本当にありがとうございました。

本社 四月句会

四月七日(金)午後五時半
アウィーナ大阪

春たけなわ、満開の桜の下入学式風景もみられた七日、96名の出席により四月句会は定刻開催された。

はじめに先ごろ亡くなった参与の奥谷弘朗さんの御冥福を祈り一分間の黙祷を捧げる。

お話は西田柳宏子さん、原稿も用意せず、ぶっつけ本番とことわって、最近のニュース、世相に思うこと、自身の日常など話す。

最近の大きなニュースは、有珠山の噴火、そして小渕首相の突然の病気から、政権引継ぎ、森氏の総理就任等である。噴火により避難している人や、漁場への影響を案じ、そこで働く人々への行政面からの一層の支援をお願いしたい。自身は、昨年大病を克服してからも一ヶ月のうち22日程、各地の句会に出席、残る日も川柳に関わっている。皆様の励ましを頂き、川柳を生き甲斐としているお蔭で、こうして元気でいられること等話す。

初出席に大阪市の東條芳香さんを迎える。

月間賞は石原靖巳氏(吹田市)に輝く。

(司会—遠野)(記名—朝子・澄子)
(受付—美代子・義)(清記—希久子)

席題「さくら」　小林周信選

あの人もこの人も散り咲く桜　洋
さくら咲く頃に逢えますいい便り　あやめ
西の丸の桜へ誘うEメール　千歩
さくらから風へ伝言板がある　森子
露命とは知っても桜燃えて咲き　遠野
花散ると花蕊(しべ)毛虫落葉掃き　哲男
愛でられず惜しまれず咲く山ざくら　典子
ある時の節目に桜植えてある　アキ
せり売りのサクラが今日のアルバイト　倫子
誘われる予感桜がワッと咲く　アキ
きっかけは君に貰ったさくら貝　柳弘
さくらさくら　また東大を落ちました　靖巳
プロポーズ桜の下で言われたの　芳香
夜桜に誘う魂胆あるらしい　英子
わたくしを盗んでおくれ桜花　一歩
バーボンの二人を妬む八重ざくら　澄子
さくらさくら母に言い訳ばかりする　義
生きのびて今年も桜に逢えました　千里
散るさくら浄土の風にさそわれる　朝子
お花見だ霊園行きのバスに乗る　大輪
桜の花咲いて人事課忙がしい　扶美代
さくらまで俺を見捨てて北へ去る　鹿太
窓際を追い出すように咲く桜　章久
借金のことを忘れていたさくら　しげお
忠魂碑桜も大樹になりました　高栄
山ざくらふと遠き日よ土佐日記　朝子
信号を隠す葉桜濠通り　正雄
サクラサク話に猫も仲間入り　睦子
秀吉の桜クローンで若返り　天笑
煮えきらぬ男の上に散るさくら　(志)千代
さくら花人をピエロにしてしまう　いわる
うつろいの中で桜を真ん中に　恵子
基地のある悲哀見続けてる桜　セツ子
夜ざくらやよくぞ日本に生れたり　義子
さくらさくら脱ぎたい殻がたんとある　重人
花守りの唄とさくらは咲き乱れ　文
桜前線着く頃噴火止むだろう　たもつ
人　洋
人知れず深山に分を咲く桜
地
さくら咲く別れ話は散ってから　諷云児
天
散る覚悟できて桜が咲き揃う　伽羅
軸
亡父の墓彼岸桜は三分咲き

兼題「きらきら」　吉川寿美選

スキーリフト　スターダストがお出迎え　哲夫
水中花きらきら軽く恋をする　岳人
きらきらと瞬く星を母と決め　あやめ
孫の目きらきら質問攻めに遭う　希久子
恐いもの知らぬきらきらしたピアス　澄子
クレヨン画きらきら太陽はみ出して　愛論

きらきらと涙が光る嬉しい日　とし子
ライバルの顔きらきらとやる気だな　剛治
きらきらした過去は喋らぬホームレス　三男
来し方へきらきらしてた頃もある　いわゑ
ダイヤモンドダスト逢いたい人がまだ来ない　諷云児
天国の妻と輝く二重奏　たもつ
春はきらきら私の心のぼり坂　シマ子
きらきらした頃へ自分史巻き戻す　達子
化粧する妻のきらきらした時間　鹿太
生きている鱗きらきら光らせる　たもつ
美辞麗句きらきらウソを光らせる　弥生
春開くきらきら光る子の扉　章久
ミラーボール恋もなみだも光らせる　隆盛
きらきらと朝露やがて地に還る　昭子
海蛍お前も人が恋しいか　大輪
春光きらきら森羅万象胎動す　倫子
きらきらと新芽明日へ弾み出す　かりん
羽化をした蝶にきらきら花の精　洋
許された海はきらきら凪いでいる　千里
きらきらと始発の駅に風薫る　朝子
ふくらんだ蕾命を謳歌する　重人
子の船出きらきら未知の海光る　〆女
春の陽がきらきら朝寝しておれぬ　月子
移植して命きらきら光り出す　典子
あの頃はきらきらしてた鯉のぼり　千歩
日差しきらきら影に大事なものがある　みつ子
きらきらと私は沈んでゆく夕陽　泰子
　佳
きらきらも去って色即是空かな　恵子

落日へきらきら海は魔女になる　いわゑ
きらきらを夢に汗する馬の脚　鹿太
産声の中にきらきらする未来　剛治
輝いて閉じたし終の章なれば　美代子
　人
優しさに飢えて鱗を光らせる　充子
　地
女がきらり喪服が似合っている　美代子
　天
川面きらきら憎しみだけが流れない　弘一
　軸
きらきらと光る明日がある若さ

兼題「呼ぶ」　吉村一風選

何気なく投げた小石が波紋呼ぶ　剛治
百度目も動かぬ石の弥陀を呼ぶ　螢
幼子の亡母呼ぶ声が身に沁みる　庸佑
義理チョコが呼び水になりハネムーン　倫子
ばあちゃんと呼ばれ返事をしてしまう　泰子
空耳か亡父の声聞く墓詣り　柳宏子
呼ぶ時の妻は女性の声を出す　瑠美子
酒の出るときは必ず呼びにくる　しげお
奈良の鹿餌のラッパが呼んでいる　利武
ついにパトカー呼んでしまった花見酒　希久子
二次会へ呼ばぬ男が従いてくる　靖巳
愛称で呼んだ友逝く老いの坂　愛論
オイと呼ぶと返事しません定年後　義子
警察を呼ぶかどうかで揉めている　一歩
八分咲き城のさくらが呼びにくる　月子

早う来いと亡夫が呼んでる灯がゆれる　英子
天国からお呼びだし心電図が揺れる　弥生
声かけてくれて今夜は飲むことに　天笑
呼び込みの声も寂しいネオン街　柳弘
新婚は用も無いのにねえあなた　利昭
春雷が甘い記憶を呼び覚ます　諷云児
呼びに行って一緒に遅刻するわたし　恵子
衣裳合わせあなたと呼べる日が近い　雅文
呼び起こす記憶は八月の六日　ダン吉
幸運を呼び込んでいる温い人　ルイ子
もう呼べど還らぬ母を見送りぬ　笛生
淋しがり用もないのに人を呼ぶ　美代子
春を呼ぶと亡母の想い出ついてくる　扶美代
かあさんと呼ぶ声一本追加らし　かりん
かぼちゃの馬車呼んでいるのにまだ来ない　いわゑ
お呼びなどなさらないでと墓洗う　かすみ
春を呼ぶ大地がはらむ陽の恵み　隆盛
幼名で今も呼び合ういい仲間　周信
呼ぶ方も呼ばれる方も金がいり　　義
窓が呼ぶ春だごらんと昨日今日　章久
向う岸呼んでいるのは母らしい　房子
　佳
俗名で呼んで供えるワンカップ　　洋
ふと洩れた本音が嵐呼んでくる　楓楽
お喋りに呼び止められた立話　鬼遊
呼びかけに手を挙げたのは雑魚ばかり　靖巳
妻が呼ぶ力仕事があるらしい　弘一
　人
お彼岸は顔を見せてと亡母が呼ぶ　一歩

地　月子
父ちゃんがまた呼んでいる探し物
天　いつふみ
診断に妻が呼ばれている不安
軸
なんど呼んでも返事せぬ母夢の中

兼題「石」　高須賀 金太 選

石段の高さ信心消えかかり　愛　論
軽石と思てた人の底力　月　子
石一つ邪魔で本音が語れない　睦　子
母が逝き漬物石が乾いてる　ますみ
石像よ話し相手になりましょう　寿　子
石だって時には情に流される　澄　子
石積んで積んで女の子守唄　千　里
石ひとつ置いて流れは吉と出る　朝　子
捨て石で活路を開く手を模索　庸　佑
白い石握らせ勝ちはゆずらない　照　子
捨て石の読みの深さに負けている　靖　巳
対峙して痺れを切らす石の庭　周　信
古里は石一つにもあたたか味　ルイ子
玉砕のいしぶみ朽ちて海を向く　雅　文
原石にいつか輝く夢がある　洞　庵
土壇場に投げる礫は持っている　澄　子
大波紋呼ぶ反骨のちさい石　一　風
夫唱婦随ときどき妻の石つぶて　柳　弘
漬物石の重さで座っている母よ　森　子
満願成就石の仏がうなずいた　扶美代
枯山水石のこころになってみる　剛　治
胃袋に取越し苦労の好きな石　泰　子
石かんだ日から始まる四面楚歌　弥　生
石投げて心のうつを癒してる　舞　夢
御影石の表札重いだろうなあ　義　子
蹴る石も消えた舗装路味気ない　文　秋
苔むした石と話をしています　いわゑ
好きな石それぞれ違う三世代　哲　男
味方から礫が飛んでくる落ち目　靖　巳
さあ行こう石くれなりの意地がある　ダン吉
答出すみぞおちに石抱いたまま　楓　楽
目立たぬが礎石に徹す父の道　洋
悟りとは哀しきものよ石渇く　勇　太
価値観の違いで磨くただの石　美代子
きらきらの石はいらない愛がある　賢　子
佳
百度石母の素足を忘れない　つづや
石蹴ってみても答えは出ないまま　伽　羅
耐え抜いたことは語らぬ丸い石　勇　太
ひからない石にも石の自負がある　朝　子
母さんの投げる石には角がない　諷云児
人
生きるとは石より重いものを抱く　美代子
地
起爆剤抱き少年は石になる　雅　文
天
腰痛の真犯人は石だった　諷云児
軸
磨いても私は光らない石だ

兼題「えくぼ」　宮崎 シマ子 選

片えくぼガラスの靴を夢にみる　照　子
ライバルに見せない勝負師のえくぼ　充　子
にっこりとえくぼの嘘に騙される　庸　佑
七難を隠す可愛い片えくぼ　諷云児
みそ汁へ露のえくぼをつけた茄子　勇　太
わたくしのえくぼを消したのはどなた　大　輪
四面楚歌の私に似合わないえくぼ　あやめ
ひどい目に合わしたことのあるえくぼ　しげお
新雪に猫がえくぼの足の跡　章　久
皺とシミ昔ここらに片えくぼ　いつふみ
七人の敵には見せぬ片えくぼ　千　里
凄みたいけれどえくぼが邪魔をする　恵　子
気まぐれなえくぼ雨のち晴れを待つ　希久子
泣きごとは言わぬときめているえくぼ　朝　子
ふる里の小川で洗う片えくぼ　森　子
泣かないで泣けばえくぼが笑えない　美智子
意地悪のえくぼ嫌味に見えてくる　鬼　遊
面接にえくぼ得する受け答え　正　雄
遺伝子の悪戯僕にだけえくぼ　ルイ子
えくぼから想像できぬ啖呵切る　房　子
ノーメイクで過す日曜日のえくぼ　美代子
心にもえくぼをつけて丸く生き　洋
真剣になってえくぼが消えかかり　はじめ
借りてでも一度つけたい片えくぼ　とし子
辛辣なことを言い切るえくぼです　いわゑ
浪速っ子えくぼを見せて値切ってる　一　歩
悪女には徹し切れない片えくぼ　楓　楽

えくぼさえ殴られる種二等兵　哲男
えくぼある男で育児休暇とる　楓楽
車座の中のえくぼが光り過ぎ　達子
花束に妻のえくぼが倍になる　アキ
示談成立えくぼが少しものを言う　恵子
半世紀生きてえくぼも皺に化け　英子
積んで来た苦労は言わぬ手のえくぼ　寿美
必殺のえくぼで恋は奪うもの　雅文
佳
締まらない顔だ社長の片えくぼ　柳宏子
刀より切れ味がよい片えくぼ　重人
介護士を目指して男にもえくぼ　希久子
片方にえくぼが欲しい鬼の面　芳香
えくぼが消えた時から妻に角が生え　大輪
人
拝むうちえくぼ出そうな石仏　洋
地
連れ添えば空気のようになるえくぼ　文
天
えくぼする奥を覗いた千のウソ　弥生
軸
不平不満忘れています片えくぼ

兼題「未　来」　橘高薫風選

保育器に小さく大きな未来像　高栄
すぐ其処に未来が見える春霞　美代子
かぐや姫未来の話かも知れぬ　利昭
未来図を描く子はみどりありったけ　三男
未来まだまだ明るく笑う子等がいる　かりん
クローンの醍醐の花見する未来　伽羅
アメリカ村未来人ともよく出会う　利昭
未来図を縮尺にして持ち歩く　美代子
メカ音痴わたしの未来描けない　かすみ
とりあえず百歳までのプラン練る　重人
混血の孫へ備える英会話　シマ子
ハイテクも昔の夢になる未来　文
家計にも少し未来を下さいな　鹿太
その未来判っていると生きられぬ　紫香
助走中明るい未来ひらくため　義子
蜃気楼いっぱい抱いている未来　洋
宇宙人と握手をしてる夢を見る　諷云児
宇宙人の彼へ嫁ぐと決めている　寿子
未来永劫などというから信じない　希久子
インターネットに任せて悠悠自適する　英子
未来図は要らぬひたすら生きるだけ　文秋
マグマ動く未来のあるやなし　千歩
一筋の煙と消えて行く未来　房子
未来図は蓮のお花を縁取りに　夕花
歴史の目　常に未来へ菜の花忌　たもつ
風の子の未来へ真直ぐに植樹　希久子
未来図の地球でっかい鳩を描く　ダン吉
未来図が描けなくなった父の老い　正坊
未来でもやはり泣いたり笑ったり　昭子
未来図が違う夫婦で仲がよい　一歩
未来図はシャガール風で宙に浮く　保子
ムンク展出ると未来が怖くなる　楓楽
佳
わたくしの未来と孫の言う未来　みつ子
騙しあい未来へ継いでゆく政治　英子
故郷へ未来の歩道動くだろ　瑠美子
花いかだと未来へゆっくり旅をする　いわを
玉手箱の中に入っていた未来　洋
人
朱鷺一羽未来の空を背負うてる　つづや
地
春の華未来を背負う紺の服　一歩
天

大むかし核があったという未来　石原靖巳

軸
散りざまにさくらの頼母しい未来

京都塔の会　春の吟行句会

とき　**5月22日**（月）午前11時
ところ　地下鉄「小野」駅改札機前
行程　小野駅…徒歩約400メートル
勧修寺（庭園観賞）…すぐ…仏光院（昼食・句会場）
兼題　当日雑感A・B・茶・カリスマ好意（各題3句）
会費　4500円（食事・拝観料とも）
投句　80円切手3枚同封
申込　**5月15日**まで
〒600-8428
京都市下京区諏訪町通松原下る
弁財天町328　都倉求芽
電話075-351-4109

毎月25日締切・30句以内厳守　編集部

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

並んだら色の違いが見えてくる　あずき
十人十色並び変えても同じこと　能子
君と僕の間に母が来て並ぶ　喜美子
早咲きの桃が並んで雛飾る　シマ子
やっと得た地位にリストラ付いてくる　欣史子
引越しでやっとその気に古書捨てる　慶子
やっと来た春だ大事にしなければ　アキ
背のびしてやっと入学できたけど　弘直
旗ふる爺　腰のバッグはキティちゃん　香住
一瞬を紋付五人協議する　清芳

岸和田川柳会　長谷川呂万報

こだわりも消えて親戚皆集い　鹿太郎
あの人が結婚私の夢消える　呂万
消えかけた痛みへ他人火をつける　さよ子
代替り錆びた釘にも意地がある　洋
まっすぐに釘が打てない気の乱れ　白光子
パチンコの釘にうらみはたんとある　洞庵
菜の花が心の釘を抜いてくれ　みつ江
カナクギの文字がうれしい孫の文　基
転職へ経験生かし良い結果　信博
厚底靴履くと言えまい上がると言おう　力子
日々の経験生かし老後を生きている　盛之
土壇場で経験生かしVサイン　路子
経験より机上の理屈評論家　俶子
経験を語るオモニの深いしわ　辰郎
経験談が自慢話にすぐ変り　甚一
だんじりに匠の技が生きている　金太
好意とは思えぬ隣家のお節介　美智子
好意持つ彼に噂がつきまとう　弘子
終着駅に近い上座に据えられる　仁緑
貸し傘の好意が駅で痩せている　蛙城
ばあちゃんの愚痴を黙って全部聞く　苑子
外は雪話していけという番茶　ダン吉
警察のチャチな小細工すぐばれる　穣一
連立のガラス細工がこわれそう　東吉
鍾乳洞何億年の細工場　一斎
小細工がすぎて墓穴を掘っている　狸村

川柳東大阪同好会　森下愛論報

門のある家も日の丸揚げてない　文秋
鼻歌が隣の門まで掃いている　たもつ
人情のこぼれる路地に門はない　三重子
招かざる女が隅に通夜の席　庸佑
福の神招き入れたい豆を撒く　賢子
招かれた茶席にミニの膝頭　晋吾
追伸へ風邪を引くなと繰り返す　朝子
ときめきの手紙何度も書いて消す　猪太郎
追伸に母の温みのある手紙　萬的
耳うちのように追伸書いてある　雅文
新曲を覚えトップで唄う人　典呼
いざの時すぐに尻尾を切るトップ　ばっは
トップの椅子苦労話がしたくなる　あや子
トップの座のおりて緑が美しい　治也
憧れた髪は三つ編みセーラ服　東雲
髪形を変えて再起へ若返る　文子
維新への道に竜馬の火の手紙　湖風
優しさも加えて断りの手紙　愛論

三幸川柳教室　三宅保州報

貰ってきた風邪が家族をリレーする　三千子
貰いものだからおいしい味がする　正匍
貰い手がないのと違う高望み　豊太郎
幸せを少し貰って日向ぼこ　正一
地蔵さんも旬の走りを貰ってる　佳世子
貰いたい手をひっこめる斜め風　めぐみ
ライバルにやる気を貰う正念場　みね
泥水を呑んで貰った生きる知恵　利治
退きどきの美学を椿から貰う　鉄治
神様にもらった命期限付き　保州
情報を貰いすぎると増す不安　靖子
分相応の福貰いたく鈴を振る　当代
段差ない町に温もり貰ってる　起世子
貰いつけている官僚の懐手　朱夏
肩書を貰い持ち味消えてゆく　伸二
立ち上がる力を冬芽から貰う　公子
頑固一徹時の流れに乗り遅れ　嘉平

雪を着て時を待ってる梅の花　登美代
いっ気に時間噴きだすかめの蓋開ける　章子
常識の範囲で暮らす二十四時　次根
時々は嫌われ役も買っている　美子
あの時は気付かずにいた愛の鞭　美寿子
そんなこんなで時の流れのままに居る　千秀
歳時記を守りつづける父の鍬　和子
鳴きたくはない日もあろう鳩時計　桂香
実らせる時へ一コマ絵が動く　昭枝
限りある時を寄り添うもやい舟　町子
刻止めて蕾の中にいる二人　碧
祈る時人はやさしい顔になる　さち子
時を友に生きて命を吟味する　好男

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

ロボットに休暇取らせている不況　あきら
ついて来る妻が手綱を握ってる　文仙
一人住む母を気遣う今朝の雪　吟笑
天国へ往復切符なら買おう　坊太郎
可能性無限に秘めた紅葉の手　くに子
真っ直ぐに育ち魅力がもう一つ　勝
税金を使いロケット海の中　治延
平和はいい優しい男が多くなる　マツエ
出汁とりに時間を掛けて妻の味　まさる
雪帽子ぬぐい地蔵によだれ掛け　かおり
六十の恋がしたくてラフを選る　治
萎びゆく新鮮な紅だけ浮かぶ　輝夫
かぶりつく目刺も口を開けている　放任
陽溜りを春待つ人にお裾分け　寿々女
春が来るお水取りの火の粉降る　八重子
父親が愛の不足を子に満たす　チカエ
草餅を口にする度亡母偲ぶ　よしみ
日曜のお昼お庭で光合成　なみ子

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

スリッパで一寸を妻に睨まれる　弘治
竹の子の歯ごたえ嬉し春の宵　愛
たけのこと干し蝦入れて雛祭り　正子
親戚のはじまり筍頂きぬ　しづ子
民宿のたけのこの味母の味　夢之助
筍が思いのままの荒み寺　満寿蔵
病む老母の口にゆっくり銀の匙　和子
辛辣な口で選手を弾ませる　十四郎
売り言葉揺れる波紋に軋み出す　義芳
軽口を叩くそこまで来てる春　歌子
八十でカナの言葉がわからない　千恵
土鈴振り春の足音誘い出す　武庫坊
一瞬のためらいがある川の中　年代
古コンパス回せば師の声友の声　比ろ志
猛吹雪バスはとぼとぼかたつむり　渉
紙雛にかかる日射しもやわらかい　恵子
遠吠えの中で夕陽が沈み出す　紫香
春を待つ地団太踏んでいる蛙　静
許されたぜいたくでしょうよく眠る　久子
ほんわかとたまに阿呆な顔をする　美子
一円貨出せばいいのにまたお釣り　昭三
雛の夜の昔ばなしへ灯を弾む　芳子
石段をみる　馳け上ったのは昔　光穂

城北川柳会　神夏磯典子報

いたずらに年を重ねて新世紀　登美子
面影を君に重ねたばらの花　はじめ
国宝のお城土足で踏み荒らす　高栄
高僧の臨終死にとない死にとない　あやめ
ぴったりと合う蛤の仲の良さ　久美子
一合が体に丁度だと悟る　トヨ子
国宝展値踏みしている骨董屋　ただし
写経百巻悟りの道はまだ遠い　志華子
半日の出会いに咲いた花もある　久留美
母恋うはいつもこの頃鯖を煮る　チサ子
思い切る痛さ知ってる花鋏　ひさ乃
ゆたかさに左右はされぬボケ防止　寿美子
宝物貝の涙の首飾り　昭子

佳句地十選（四月号から）

春　城　武庫坊

無言電話へこちら枯野の駅ですが　富美子
禁じられた遊びを面白く遊ぶ　日枝子
スケールの小さな夢を抱く余生　鹿太
核心に触れると狂う風の向き　正秀
改めた言葉が少しこそばゆい　みさえ
待合室ゴッホを見ても歯は痛む　志華子
ゆっくりと冬の樹になるキリンの首　夢成
かさかさに乾いて宇宙人になる　章峰
地吹雪の音はやる気を起こさせる　美子
すずらんがリンリン鳴ればいいのにな　小4亜紀

忘れてたスリル孫とのすべり台　朝子
屋根やぶり落ちた隕石宝物　あい子
悟られぬよう病人に嘘を吐く　倫子
残り時間大事にしようもう米寿　一枝
ピッタリと寄り添う猫と昼寝する　とし子
宝船うちの港を避けてゆき　順三
運命とは一つボタンの掛け違い　みえ
父よ父反骨見せる血が熱い　睦子
曲げるのを嫌う一本気に疲れ　小路
ぴったりと背中合せの敵味方　千里
欲がまだあって決断鈍らせる　典子
世紀末何事もなく春炬燵　千歩
絆にも男結びや蝶結び　求芽
好位置にぴったり着けて抜く気配　史風
高く高くブランコが蹴る春の天　達子
感動とスリルを乗せる宇宙船　白峰
ピッタリと唇が合うシルエット　公一

竹原川柳会　時広一路報

時計なんかいらない今は二人だけ　大2史子
主婦みたい昼のドラマにはまり中　高3千枝
ときめきを忘れたことはない拳　蘭幸
国会もときめきの声聞こえない　節生
わんぱくが皮ごとかじるリンゴ園　美佐雄
ふる里産のみかんが喋る北の旅　栄恵
古里を舌が覚えている葡萄　勲
目移りのする果物がある街だ　節夫
果物屋の隅でバナナが売れ残る　貞子
リンゴ汁がこんなにうまいオペの後　正宏
マスカット一粒だけを食べて病む　菁居
幸せがとぎれぬようにリンゴむく　一枝
眠れぬ夜満天の星見て飽きず　汎美
充電をしてますひととき図書館で　比呂子
反省の時を与える父無言　喜美子
その時を指したまんまで化石なり　房子
時を経て今本物の夫婦です　笹舟
二〇〇〇年時は流れる鰯雲　夏喜
辛口の酒をときどき妻が注ぐ　力
秒読みが聞こえないから生きている　笑子
子孫曽孫米寿に時のあふるるよ　不朽
真っ白い時が欲しくて浜に来る　静風
厳かに神父至福の時を告げ　一路

うぶみ川柳会　上田宣子報

竜介と名付けて孫に期待する　天雀
陽が月と重なり地球冷えてくる　静生
初生けの葉先のしずくきらきらと　也恵
思い出を重ねて未来夢たくす　多哥由
花開く根っこは香りさえ知らず　葉士人
きらきらのお重の中み大根だ　和歌子
開運を絵馬に託した初詣　祐
きらきらの汗へ煌めく棒グラフ　黙光
幸運の扉重くてすぐ開かぬ　雅女
雪に雪重ねて人は臆病に　螢
胸襟を開いて交わす男酒　天人
きらきらの星にも悩みあるだろか　ユリ子
太陽の下で重なり合う蛙　石花菜
きらきらの入歯が光りネコ逃げる　一夫
お開きになってやんちゃな猫になる　登美枝
開発のせいか里にも熊が出る　孝男
不況風辰も不運とあきらめる　くにお
逆転の旗をきらきら振っている　ひろこ
正直に進む人生光り出す　華子
開発の進む陰にも過疎もでき　常正
こつこつと微力重ねて欲を盛る　あづま
どんぐりできらきら光る才がない　良雄
きらきらと光る目玉だ嘘はない　かつみ
きらきらと輝く位置は鬼門かも　健一
穏やかに辰も居眠りするこたつ　宜子

川柳塔唐津支部　松涛庵正剣報

梅の花今日一日を旅に出る　あき
骨拾い生者必滅南無阿弥陀　實
夕焼ける瀬戸の花嫁ボロボロに　勝視
大穴を出した勝馬世に媚びず　輝夫
キャンプではどこも強そうプロ野球　水笑
留守電の気取った声にお辞儀する　晴翠
退官をされて直らぬ癖があり　高明
劇団が着く新緑の村役場　四郎
飛ぶように売れる閉店五割引　虹汀
レーダーにテポドン見えぬ春隣　正剣
爺婆と川の字の孫娘大学生　幸夫
有難や布団干そうと友来る　タミ

川柳塔みぞくち　小西雄々報

針供養おんな心のこまやかさ　康女
先だたれもどかし老いの針と糸　正光

一本の針から夢を縫い上げる　智恵子
針灸の支えもうけて七十路へ　豊枝
針箱に亡母の思い出詰ってる　久子
針の穴通り大きくなる噂　静江
針と布パッチワークへ戯れる　和代
針千本約束できぬもどかしさ　公美子
編み針と炬燵で語り春を待つ　弘子
久し振りお手玉作り針を持ち　鈴枝
一枚のセーター脱がす春の風　信敬
針供養終えて仏間の灯と話す　雄々

川柳会梨花　石上　悦子報

紫の衣のしたに炎をもやす　幸子
紫があるから虹が美しい　一夫
恋人の街紫に暮れて行く　完司
言い負けた日にはテレビも敵となり　重忠
炬燵から苦労話に雪が降る　章久
縄電車狂った人も乗っている　千楢
家族居てよかった風の吹く夜は　一京
沈黙の価値を知ってる聞き上手　芳光
ピカソの絵逆に吊ってもピカソの絵　忠良
風邪をひくひまはないのに癌になる　(米)勝見
私も照らされている影法師　螢
お願いをしますとさげる石頭　(前)一枝
お願いをしてもかなわぬ恋仲だ　多哥由
願いこめ流す女雛の薄き胸　和歌子
お願いのことばに弱い男だな　きみ子
街頭募金幼児にほだされる　高栄
願かける声がしばれる石畳　ただし
汚さない願い六十億の星　(最)和枝
楽と苦の種蒔きながら生きる世だ　輪多朗
楽々と越せぬ傘寿の七分粥　節子
楽園はたった二人の男女から　行男
黒豆が良く煮え楽し明日が来る　ひさ乃
なまけるなこの世に楽があるもんか　蟹郎
楽な方楽な方へと水流れ　典子
残された時間はうんと楽しもう　蛙
手の中の鶴を放してから楽に　畔
門限を自分で決める適齢期　(北)勝美
決めたのも貴方守らぬのもあなた　美恵子
決められた事だけしてる妻の留守　睦子
決め球は迂闊に投げぬ向い風　求芽

倉吉川柳会　松本よしえ報

まだ固い蕾の下で咲く話　和雄
嘘も言い法螺も平気の有名人　みち子
遺産分け遠い血族早く来る　雄々
遠い山見ながら視力取り戻す　智子
口きればあれはほらだとうわさされ　都
椅子一つ友情までも遠ざける　紀美子
ほら吹きが帰りさみしくなった席　克枝
ほらもなく厳しい父の背の孤独　賀寿恵
逢う度に法螺に輪をかけ寄って来る　民枝
恋に燃え誰の意見も身に入らぬ　日出子
青年の燃える大志に職が無い　重忠
むんムンと若さの燃える子供部屋　秋草
遠くても孫とつながる電話口　(前)喜美子
燃えているのか携帯電話汗をかく　かつみ
反対をされたふたりがまた燃える　睦子
煩悩がまだ燃えている崖っぷち　きみ子
親よりも大きな法螺を吹き鳴らす　よしえ
春が来てチンドン屋まで遠出する　(西)喜美子
残り火が消えないように息を吸う　照彦
嘘つきが法螺を言うなと文句いう　一夫
菊の香に遠い昔のおままごと　和歌子
おみくじの凶をこっそり火にくべる　和枝
ペン先にいのちを燃やす詩をひとつ　螢
ときたまに豚肉食った日は燃える　石花菜
明日から燃えます今日は歯を磨く　季芳
ほらだとは知らず本気できいている　久子
ドラマチックな祭に男燃えたぎる　明美
立ち上がる勇気に法螺の二つ三つ　康子
法螺吹きは陽気で少しお人好し　ゆり子
キャリアから遠いところで泣く駐在　次男

京都塔の会　都倉　求芽報

はいおまけ 傷あるみかん盛ってくれ　満子
よく出来たおまけの大きな花丸だ　高栄
残り火よ おまけのように燃えないで　礫
満開の花にモラルを試される　典子
道徳心なげく山岳パトロール　〆女
一直線モラル貫く父の靴　愛論
乗客のモラルで守る無人駅　波留吉
二十一世紀過去のモラルが試される　葉子
茶髪には茶髪同士にあるモラル　柳宏子
朝の挨拶モラルの始めだと思う　ルイ子
政治家に無いものねだりするモラル　正坊

新婚のパンはきれいな篭に入れ　福子
気楽だからもう少しいるかごの鳥　宏子
逢うてきた余韻をたたむ乱れ篭　諷云児
大胡坐かかぬといい篭は編めぬ　求芽
籠で来るフルーツ悲しいときばかり　輝美
実物を見て考える家具の位置　ただし
実物に触れブランドの誇り知る　英一
影武者が実物よりも立派なり　吉之助
実物と見分けつかない厚化粧　益子
実物は案外やさしい鬼だった　百合子
実物は金庫で眠る5カラット　芳子
造花とは知らず鶯鳴いている　友熙
胎動とにっこり白い掌を当てる　てる
程ほどの気遣いありがたく受ける　庸佑
よくしゃべる口には嘘がまじりだす　武庫坊
潔癖も少しうすらぐ冬ごもり　年代
暮れなずむ帰路の満月話し好き　達子
無農薬かと大根にきく愚かさよ　美穂
花に水やるよう月の出待っている　水客

岩美川柳会　石谷美恵子報

日本の桜見せ場は散り際か　大漁
海難で父を失い漁継げぬ　蟹郎
嫁姑愛と憎との根が絡む　公乃
地球から離れ宇宙に逆あがり　螢
癌告知五千ボルトのショック受け　喬水
恋詰めた二重封筒旅続く　孝男
息の根を止めて不満の皿を割る　季芳
張り合った意地が垣根を高くする　静生

中卒の根性試す海の荒れ　忠良
ぼろぼろの退職願いもっている　一夫
ほつれ毛に移り香のこる花の終　和歌子
張り切ってここが見せ場でよく転ぶ　一京
曲り角舌を出してる影法師　圭一郎
雪しんしん息を殺している根っこ　一瑶
内臓のいちばん奥にある我慢　きみ子
根性を一本持っている背骨　明美
内臓のSOSに気が付かぬ　睦子
皺の数だけショックを受けている　節子
迷信が今も根強く生きる島　裕子
自信作没のショックがまだ癒えぬ　たぬ
一代の見せ場を葬で締めくくる　美恵子

川柳塔なら　坊農　柳弘報

わたしよりきれいに掃いた冬の風　さと美
ここだけは掃かずに残す花屋敷　美和子
他愛ないイメージだけが先を行く　民子
学者馬鹿そこを愛する妻がいる　真理子
仕付け糸抜く元旦の一つ紋　節子
躾には厳しかったな母が逝く　雅巣
草書行書女人の如き書道展　夕花
厳冬に咲きほっとする長谷牡丹　天狗
入院を軽く告げてる専門医　たけし
両親の背中に書いてある躾　國治
子供部屋掃き出しひとり涙ぐむ　久峰
度忘れがひどくて豆辞書放せない　水魚
良い豆を選んで我が家の味噌作り　聰一
専門で食いつないでる木偶の坊　とし子

お化粧はせめてお家でしておいで　あやめ
専業という主婦の座に胡坐かき　高栄
セーラー服躾が見えるご挨拶　絹子
鍵かけぬ部屋に躾の正しい子　秋泉
街路樹の土に戻れぬ枯葉掃く　良一
エキスパート時に誤作動してしまう　富子
花街の躾煙管で直される　茂雄
無事済んで喪服に残る仕付糸　春蘭
仕付糸ゆっくり春が解けてくる　洋子
ひと筆を掃く莫山の墨のいろ　道子
傷心を掃く歳月がまだ足りぬ　眞生夫
しっかりとしつけています猫の砂　美千子
念入りに砂の掃き目の結納日　卓
孫受賞掃く手休めている自慢　和夫
茶がらまき母の掃除をまねてみる　春
鬼瓦老舗の躾凛として　秋雄

川柳大阪　坊農　柳弘報

引き受けるからは覚悟の保証人　照月
ベテランの後引き受ける荷が重い　雅巣
北風を受けて心は燃えている　芳香
引き受けた後で悩んでどうするの　かよこ
出るたびに一喜一憂する噂　叭笑
信頼を感じさせますその意見　美花
生来の性か受け身のままで老い　酔舟
子に意見出来ない親の私生活　川童
洋式に座って噂聞いちゃった　河南子
無口だが筋金入りの意見聞く　信酔
母の愛いっぱい受けてお乳吸う　青道

極端な意見に増える敵の数　章久
終わりかな男の噂なくなった　美すゞ
火花散る意見の後の茶が旨い　柳昌
仮縫いのままで噂が歩き出す　希久志
少女からの手話のおしゃべり恋噂　楽子
宮仕え酒の力で吐く意見　鉄心
春の音境界線から忍び寄る　洛酔
県と市と国がバラバラ可動堰　本蔭棒
帰って来た噂大きく育ちすぎ　一風
どんくさい亀で後ずさりはしない　比呂志
受けた恩きっと返すと誓う汗　朝子
その意見それは昭和の初期の事　司
ひと眠りすれば意見も角が取れ　一歩
冬の風受ける我慢の時だろう　ダン吉
討論会声の大きい方が勝ち　まつお
肝心なとこでサインを受け損ね　柳宏子
また割ったらしいぞ朝の台所　金太
化粧室いっぱい噂溜めている　重人
どんくさい容疑者自殺何してたん　柳弘

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

ジャンケンに弱くていつも前かがみ　日枝子
れんげ田の夢に今でも迷いこむ　ゆき
ダンボール時によっては妥協せぬ　玲子
水ぬるむ身のかんぬきをゆるくする　ふみ
夢も荷も分けた相棒向う岸　文葉
投函のポストを照らす月が笑む　瑞枝
人の口に戸がたたぬこと忘れていた　やえ
春日和還らぬ時に咲かす花　春枝
声がなくても会話したくて墓まいり　晶子
きみどりの色を集めて春を編む　てい子
散歩道椿も咲いて地蔵尊　八重子
じぐざぐに吹いて私を弄ぶ　繭
春雛を分ける手仕事容赦なく　スミヱ
沈丁花所望されてる春の風　寿々子
口答え達者になって孫育つ　天雀
種一つ芽生えお早う言い交わす　なみ
タンポポの絮になり飛ぶ春空へ　麗
私の夢をペンの力で膨らます　恵子
次の世にわたしを咲かす椿の木　千代

大原川柳社　矢内寿恵子報

百歳の笑顔は人間を越える　はじ芽
少年の夢は海こえ空をこえ　はるみ
乗り越える壁の厚さに立ち向う　あすなろ
案の定春の出合いが実を結ぶ　昭子
あんのじょう命とられた保証印　絹子
お隣へ垣根を越えてもめている　静子
どんな風越えてきたのか温かい　ひでの
ハードルをいくつ越えたか七十路　たづ子
あんのじょうしどろもどろの経をあげ　美佐子
技に磨きかけて父越す日を目指す　南花
しがらみを越える女の性悲し　敏子
子を背なに越えた苦労の幾山河　こふゆ
ここからは越えない線を引いておく　喜美子
次の世に越えると閻魔様が待ち　巴子
坂越える苦労は知らぬカー時代　しず
人生の荒波越えて今日がある　悦子
追い越され亀の心境よく分り　辰江
菓子箱の中は思っていた通り　妻子
とび越える野望は捨てぬ男の背　玉恵
ハードルを越えた男にある自信　さちこ
リストラの波越す狭間に立たされて　みづえ
あんのじょう子供は妻に味方する　地佳平
他人様の情けと越えた坂の数　寿恵子

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

イベントは成功だったゴミの山　大輪
失言を戒めている喉仏　紀久子
なにくそと三里の灸に耐えている　武治
イベントに乗る風船も綿菓子も　輝子
イベントが始まり雪は降りつづく　英子
花博も良し野の花はもっと好き　(楓)よし子
イベントへ参加明日へ目を開く　柳宏子
メインイベント夢に見ながら前座戦　ヒサヲ
ふらふらの意見へ父の平手打ち　鉄治
ふらふらと詐欺師の口に乗せられる　和重
ふらふらと浮気性です春の風　優子
ふらふらとどこへ行くのか日本丸　保州
ふらふらとネオン恋しい虫を飼う　稚代
八方美人いつもふらふらしています　正博
ほろ酔いでふらふらと出る縄のれん　呑天
ふらふらと夢は故郷の橋渡る　裕美
カーテンもふらふら春の風に乗る　紫香
火中の栗ひろって敵の矢をかわす　寿子
喉元を過ぎてまたまた恋をする　あき子
一椀の情けにむせぶ喉ぼとけ　高夫

男なら言わぬが花の喉仏　射月芳
ごめんなさいが喉につかえて出て来ない　三　男
鬼になり喉の渇きを子に示す　冨美子
電話口風邪も感染しそな喉　千寿子
妥協せぬ喉に信念生きている　和　子
鍛え込んだ喉だウグイス嬢受ける　泰　子
山あるく渇いた喉に滝の音　豊　太
戯言は吐かぬ君子の喉仏　あつむ
なにくそと今年も老梅花をつけ　佐代子
なにくそのファイト頼りに生きている　信　子

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

薔薇もわたしも枢のいろは決めている　森　子
終末はただひっそりと石になる　千　里
終りまで主役で通すわがドラマ　ますみ
終末はせめてすこうしにぎやかに　幸　生
大声で笑って幕をおろしたい　一　風
生命線すうっと消えてるわが手相　ばっは
道ならぬ恋終末に脅えだす　とみを
低い鼻だが黒は黒だと言い切れる　英　一
沈丁花やっと咲いたと思う鼻　度
一を知り一に溺れた鼻の嵩　年　人
役人にひとりよがりの鼻がある　勝　美
効く鼻で好きと嫌いを選りわける　弘　直
鼻ひげをはやし自信に満ちている　信　博
食べたこと忘れる母の眼が哀し　直　子
食べる頃隣の猫がちゃんと来る　三　男
目で食べる腹は六分の京料理　柳　伸
三食昼寝に深い孤独がついてくる　扶美代

三十種五色を食べて過ぎた酒　洋
口先で政治家楽に食べている　太　郎
たこ焼を食べると大阪弁になる　秋　雄
さざんかの赤がなかなか笑わない　のぼる
なかなかのものだと自分褒めてやる　剛　治
なかなかに逢えぬ情けに溺れてる　昌　子
なかなかの辞世の句だと自惚れる　己代一
介護サービスほんまに安心できるかな　宏　子
人肌をのむサービスのしまい酒　欣　之
耳そうじうとうとしだす散髪屋　たもつ
何時になく妻のサービス何やろか　柳　弘
神様のサービス四季が狂わない　弘　一
喪明けまで男のサービスは受けぬ　弥　生

川柳ささやま社　酒井　靖子報

飾ること忘れた母の光るもの　恵　美
太陽が昇るひと日を確と生き　純　子
振り向けばやっぱり母の迎え傘　多美子
ふる里も湯豆腐だろう冬の夕　美智子
一輪の花と豆腐の息が合う　八重子
米びつを満たして休む老いの辞書　とみ子
我慢してもやっぱり涙先に出る　つや子
美しいやっぱり短命虹の橋　かほる
寝ていても休めぬ心臓に手を合わす　すず子
休みには気持ちゆるんで朝寝する　かつ子
休んでも何か気になる台所　君　代
雪かぶる老梅やっぱり亡母の鈴　ヒサ子
休息の時を与えてくれた風邪　毬　子
やんわりと呑まされていた飴の鞭　冨　美

当てのない休みが取らす趣味の筆　美緒子
気休めにビタミン剤を飲んでおき　房　江
休みでもめったに揃わない家族　泰　子
ふるさとにやっぱり還る水がある　可　住
柔らかい一語にあった落し穴　靖　子

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

終章を飾る男の腕みがく　野　草
単刀直入飾り気のないプロポーズ　弘　子
満身を飾ってサンバ踊り抜く　茂
心では錦を飾る夢をもつ　房　子
雛飾り終えて娘は嫁に行く　(鹿)節　子
飾りなどいらぬ喪服が美しい　実　満
飾らない等身大の石仏　石花菜
空を見て今夜もひとつ我を静め　武　子
お巡りさんが腰抜かすほど呑んでいた　はるお
昨日より明るい仮面つけている　茶　子
とっときの衣に仮面つけて出る　隆　風
面映ゆい話はうわの空で聞く　くに子
茶の嗽効いて風邪など追い払う　久　枝
スパイスが効いて無口になってきた　みさ子
釘一本効いてしっかり立っている　和　子
父という熱い情けで叩けば効く　諷　人
嫁入りの騒めきがあり菓子ぶくろ　保　子
ざわめきが視点狂わす羽目になり　富久江
騒めきを抜けてトイレの中に居る　汲　香
ざわめいてみても所詮は兎小屋　盛　桜
逢いにゆく騒めくこころ抱いている　睦　子
騒めきを避けてふたりは寺で逢う　季　芳

風が騒ぐ恋の岬も雪だろう　きみ子
温泉の効く腹の空く一時間　喜与志
想像もつかぬ宇宙も金次第　菊乃
現世に生きて宇宙の夢を見る　八重子
素っ裸になれる私の小宇宙　(野)節子
宇宙観夢が少うしずつ変わる　かつ乃
極楽だ万年床という宇宙　孔美子
宇宙から先を競って照らされる　螢

かわはら川柳会　上田俊路報

人生は一歩抜け出るマラソンだ　登生
就職難抜けて春来る日も近い　余吏子
満足の五体抜けれぬ不満の輪　寿子
手を抜いてたまった脂肪命取り　静子
あたたかな言葉をもらいトゲが抜け　秀子
一抜ける二も抜けゆるむ絆の輪　泰良
不景気を抜けるカギ穴さがしてる　悦子
鈴の音に乗せて願いを神様に　一薫
鈴張りの目とさわがれし人も老い　正子
受験生一心にふる鈴のつな　聰
風鈴も風の誘いに身を任す　ふじ子
鳴らしてはいけない鈴を胸に秘め　俊路

はまゆう川柳会　中後清史報

飽食に慣れて忘れる麦の恩　すみれ
麦の飯少しは効くか肥満体　光
近頃は麦飯食いたい時もある　比斗志
釣り糸に麦わら帽子肩を寄せ　美佐子
冷や麦を一直線に胃袋へ　平和
麦食べず生け花用の穂麦摘む　サト美
頬っ被りして北風に麦を踏む　さだ代
思い遣る嘘は剝げても許される　生米子
皮を剝くごとに真実見えてくる　修也
親心読めず牙剝く反抗期　太一
心まで剝かれたような風当たり　佳子
妻病んで涙こらえてねぎを剝く　雄造
りんご剝く手つきしなやかお年頃　恵美子
双方がエゴ剝き出しで家裁出る　慶一
みどり児の拳無限の夢握る　てる坊
水空気無限信じて生きている　利ぼん
眠れずに思いは無限に広がる　悦子
空想は無限に広がる大宇宙　国彰
極楽へ行けば無限の花ざかり　清史

サークル檸檬　小林一夫報

空くじを握ったままで老いて行く　あずき
妥協ぐせついた男の丸い背な　遠野
いつか抜くいつか抜かれた背くらべ　哲夫
木の実にもいつか大樹の夢がある　靖巳
桃の花いつかこの子もそむくだろ　正坊
定員を越えて神様悩む絵馬　智恵子
先ず一歩出さねば道は開かない　澄子
きっとくる信じた馬車はもう来ない　房子
二枚目の舌にたくらみ秘めておく　楓楽
人形もいつか自立を考える　いわゑ
真夜中の爆音に耳ついてゆく　雅子
失意の目にやさしさの本音が透ける　みつ子
窓少し開いて老いを受け容れる　希久子
義理を欠くたった二文字がかさ高い　義子

尼崎尾浜川柳会　田辺鹿太報

雪を着て春を待ってる蕾たち　江美
欲得を抜きに話せる友がいる　鹿太
予言は男児期待した児はまた女　亀与子
落語聞き夫婦の会話はずんでる　哲嗣
予言不要男女識別腹の中　モトコ
履きなれた靴が待ってる退院日　イサミ
孫帰り相手が欲しい糸電話　まさ
啓蟄へ土竜も動く春日和　六浦
髪染めて妻これからとパスポート　勇次郎
蛇口から春がたっぷりあふれだす　昌子
これからの老いに不安の介護法　弘治
天神さん忙しくなる入学期　夢之助
これからの老後に揺れる介護法　正治
予言した易者の眼するどすぎ　満寿蔵
入学で明るくなった家の窓　十四郎
これからはママ助けると遺児健気　柳宏子
夢無限さあこれからの人生譜　紫香

ほたる川柳同好会　田辺正三郎報

マニュアルのマニュアルが欲しいコンピューター　敞子
積んである本の下から声がする　喜美子
古本の書き込みにみる父の影　竹二
再会を果せぬ友の句集読む　雪子
古本屋店主も古書に似た風情　見清
若き日の図書館まちの古本屋　禄骨
カーナビは本筋違え脇教え　馬洗

建前と本音うらはら永田町　柳童
幼子のなんでなんでに困るママ　直次
誘われて困るふりするバーのママ　博史
困ってると知りつつ尚も言いつのる　吉太郎
へそくりは困った時の常備薬　昭子
困ったな孫の名付けを頼まれる　正安
困った時帰りつくのは母の胸　久子
本気なら困る嘘なら悲しい恋　よしろう
板挟み玉虫色で決着を　正三郎
お師匠さん下手には触れず声を褒め　祥風
手作りを下手と言うまい愛がある　桂子
下手でよし自筆の賀状喜ばれ　蛍柳
大器晩成下手を重ねて桜咲く　ただし
たまだから許してあげる下手な嘘　実
カラオケは下手も愛嬌枯木咲く　千里志
さくら咲く散る日の風を待ちながら　保子
あれこれと目移り多く咲く間なし　美津子
砂漠にも咲く花もあり喜寿の恋　やすし

川柳高知　川竹　松風報

酒と言う動かす油置いてある　美々
十指みな動いてはずむ愛の手話　てるみ
よく動く妻に甘えてばかりいる　佳風
リハビリの友を叱って肩を貸し　功
笑いつつ二人三脚八十路越え　竹萌
遠来の友と友情手繰る旅　和江
招待はしてない基地が多すぎる　京子
招待状また家計簿が唸り出す　千鳥
招待へ談合もするのし袋　栄珍
招待状出した返事を待つ焦り　敏子
有り余る財に足し算ばかりする　快風
運勢は末吉だった初詣で　幸
易の言う晩年の運もろく消え　酒仙
女運良かったことにしておこう　ただし
運命線いつの間にやら消えていた　菊野
運命と諦めきれぬ世を渡る　熊男
女運ないが妻なら一人居る　孝雄

翠洋会　児玉　蛙報

資金繰り焦り高利に目をつむる　久峰
じわじわと九年の闇がほぐれゆき　さと美
ドライフラワー花のいのちをいとおしむ　英壬子
強がりが命乞いする寺めぐり　蛙
焦るまい陽は沈んでも又のぼる　靖巳
焦らないのんびりしてるチンドン屋　春
スランプに焦躁感が付き纏う　澄子
再生紙最後の命しぼってる　東雲
頂いた命そろそろがたがきた　真砂
なないろの紐をもたせて嫁がせる　千歩
散り急ぐ花のいのちに身を重ね　志華子
長寿国一つで足りぬ事故多発　絹子
保険金夫のいのちは還らない　照子
数日の恋のいのちだ蟬よ鳴け　宣司
種をまく一粒ずつにあるいのち　正坊
正義感捨てていのちをあそばせる　千楠
安全弁とるとじわじわうずく傷　喜美子
数かずの命いただき生かされる　千枝子
命より大事な車磨いてる　正雄
クローン牛朝が来たよとモウと鳴く　叡子
結び目がほどけて愛が逃げ出した　舞夢
急かしてもゆっくり御飯食べてはる　伽羅
焦らないことにしようと足が言い　日の出
いざ受験確と結んだ靴の紐　恭昌
保育器の中であくびをするいのち　石舟
水の音火の音生きているいのち　義
おはようの一言が消すわだかまり　周信
晩学の焦りへぬくい広辞苑　楓楽
目覚しを引っ張りこんで添寝する　鬼遊

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

梅干しに亡き母偲ぶ一周忌　章司
日の丸の弁当に育ちグルメ通　久仁子
行きずりの人ととけあう梅林　満寿蔵
白梅の匂う佳人の侘びずまい　志洋
車椅子母の供して梅たずね　庸佑
エレガント厚底靴は似合わない　昭平
恨み言秘めて優雅に正す膝　忠宏
撮り続け富士の優雅はまだ撮れぬ　洞庵
転んでもやおら優雅に起き上がる　かつみ
窓にバラ這わせて洩れるピアノ曲　一知
衣擦れの音凛として初茶会　美代子
技能一級口は重いが手は速い　美喜
むっつりの人も笑った子の仕草　一壺
むっつりの気骨に惚れた夜の蝶　吐来
むっつりの口をほどいた聞き上手　泰子
油断して作り笑いをしてしまう　敦子
油断せず背筋伸ばせと春鏡　りつえ

話し込むベンチで無くす旅鞄　たけし
勝ち相撲もうっちゃり負けの土俵際　四三郎
怒らない教師に後ろからナイフ　専平
油断した隙に彼女を奪われた　敏
油断から命取られた医療ミス　昇
油断した顔見せられる人がある　絢子
世紀末亀も昼寝をしてしまう　みつこ
握手したので味方だと思うてた　重人
ふる里の空だ油断をしてやろう　ダン吉

南大阪川柳会　吉川　寿美報

あいまいに笑ってごまかす術も知り　千里
よく笑う兄嫁父母と仲が良い　叙子
冷やかな笑いに耐えている背中　とみを
ここ一番笑いこらえているけじめ　千楯
さすが逸物生死は天に任せきり　たもつ
どん栗の中で目を引く栗の艶　柳宏子
逸物でした鑑定団に出すまでは　度
逸物を見込み後事を托される　久峰
逸品は母の手作り捨てられず　蛙
逸材に出合い人生観かわる　澄子
松坂と言う逸物が出す答　幸子
ウルトラ級の脂肪へ挑むダイエット　文秋
ウルトラの男に錆が来たような　東雲
背番号3を見せたと大騒ぎ　直子
細腕にウルトラパワー妻は秘め　遠野
キレすぎても人は怖がる煙たがる　章久
昇進は鋭利な頭みとめられ　なぎさ
鋭利な刃物が傷口へぴたり　雅文
三面記事鋭利な刃物ちらつかせ　智久
とぎすまされた紙一枚に油断すな　和歌子
北の旅蟹を横目でだしこんぶ　志華子
手土産の嵩がのぞいた下心　重人
無事な顔みやげにヒマラヤから帰る　信治
ジョンガラの余韻土産に北の旅　萬的
春陽さす土産話の聞き上手　柳伸
思い出し笑いくくくく悦に入る　寿美
笑い顔素敵な人だ信じよう　ひさ乃
縄文杉の嵐に耐えた顔だった　ばっは
正倉院展古代の逸物目の当り　三男
冷戦中夫のおどけつい笑い　久子

川柳塔打吹　米田　幸子報

口にチャック災いおきぬ前にする　龍枝
ラーメンに極秘のものをそっと入れ　貴恵
秘めやかに逢瀬を重ねゴールイン　セツ子
ピーナツをジャンケンで食う夫婦仲　順子
どの女も胸に秘めてる赤い靴　芳光
ジャンケンで勝負を決めた恋敵　逸子
これ秘密　秘密秘密と知れ渡る　照彦
ひそやかな逢瀬煙草の火が赤い　克枝
一枚の写真タンスの奥深く　孝恵
札束と酒が清廉攻めてくる　かつみ
きのう迄清廉だったゆで卵　ひろ子
行く末が心配君の清廉さ　宣子
清廉な産声母となる白さ　康子
お口添え千にひとつはある利き目　玲坊
秘話なのに回り回って雪だるま　玲泉
清廉な衣が零す色即是空　和枝
ジャンケンで別嬪一人奪い合い　博丈
二千年の夢を掴んだグウである　螢
胸襟を開き共有した秘密　玲子
秘め事にそそぐパワーがヤヤ不足　勝見
キミもかいボクも白紙を入れてきた　石花菜
憎しみを込めると人の手も凶器　完司
ジャンケンポン負けて砂吐くさくら貝　雄々
清廉と強欲一つ屋根に住む　十三男
オペラ座の怪人にはとても勝てぬ　和歌子
清廉な雪を握ってどうなさる　きみ子
清廉と言われて隠す膣の傷　よしえ
ジャンケンで動かぬ脳の活性化　睦子
妙齢な美女の口から馬っ鹿野郎　節子
足腰は弱ったけれど口は立つ　幸子

西宮北口川柳会　亀岡　哲子報

過去形の話はしないおばあさん　みつ子
日本のかたちを想う菜の花忌　正坊
髪形老いてもおんな忘れない　たず子
形だけよと嬉しい気持届く春　キク子
山程の恩に形ばかりの礼　ルイ子
誕生日形ばかりの御赤飯　江美
影形声も知らない神拝む　哲嗣
大阪弁まずい雰囲気和らげる　義子
不味いものまずいと言える家がいい　富喜子
まずい字の母の手紙は温かい　高栄
母の手にかかるとまずい物は無い　てる
愛妻の手作りまずい筈がない　房子

足並みが揃うと進む鼓笛隊　周信
春の土手土筆でこぼこ並びだす　昌子
ひな壇に並ぶと影が薄くなる　鹿太
警察の不祥にキャリア揃い踏み　松煙
スタッフが揃い再起の旗を揚げ　庸佑
手作りのデコボコもまた面白い　能子
石橋を叩きチャンスを逃がしてる　春蘭
教会のトンガリ屋根は良く目立つ　トミヱ
その昔エンデバーに乗るかぐや姫　絹子
ゴム風船同じ翔ぶなら春の風　求芽
東大へ行く子はだーれランドセル　嘉代子
澄んだ瞳に大人のエゴを裁かれる　石舟
其の人を伏目で見ているプチトマト　比ろ志
はっきりと言わずミカンを剝いている　しげお
込み入った話に豆腐煮くずれる　澄子
不用意な言葉へ矢玉飛んでくる　靖巳
気が付けば訳ある橋を渡ってた　千代
自分史を楽しかったと結びたい　いわゑ

川柳塔まつえ吟社　恒松　叮紅報

壁の向こう気になっている若いから　注湖
隣から笑いの手紙まだ来ない　たけし
隣の庭へだまって散った寒椿　桂子
お隣と声かけ合って走るビリ　茂美
監禁九年警察のつい隣　草丘
一人暮らしお隣さんに見守られ　秀子
アンテナの死角でなさぬ恋を生み　芳枝
アンテナを張って茶の間の話好き　登美子
ライバルへアンテナ少し低くする　知恵子

精一ぱいアンテナ伸ばすかたつむり　みえ
アンテナにかからぬように人を恋う　久枝
アンテナを張り巡らしている団地　煩悩児
好きな色ばかりが減っていく絵の具　静恵
画布いっぱい絵の具で春を塗りつぶす　房子
恋人の絵の具に染まる春の午後　登志子
日の丸は赤い絵の具があればよい　螢
夕焼ける湖には絵の具などいらぬ　きみえ
雪景色絵の具たらしてみたくなる　邦代
千円の帽子を買って冬を越す　きみ子
舞台裏ピエロの帽子かけてある　早苗
春風に負けない帽子持って出る　小鹿
愛用の帽子も入れて焼きました　友子
こだわりがあって帽子と遠くいる　太泡
父の帽子忘れたままで帰らない　すみこ
名刺という裏を借りてる紹介状　与根一
どうしても借りねばならぬ母の知恵　米子
火傷せぬ位置で情けを借りている　多賀子
辻褄を合わせる度に嘘借りる　義良
借りてきた言葉鮮度が落ちている　畔
借りた知恵だからいつしか剝げてくる　叮紅

川柳塔おおとり　原　みさを報

開店と閉店安い方に行く　野草
峠茶屋春まで休む釘を打ち　舎人
息抜きはめったにしない父の店　雄々
気心を知ってる店に足が行く　伝住
店員の誉める言葉で一つ買う　和子
好き勝手言える近所の店が好き　清子

仲直りさせる屋台のコップ酒　彰雄
青春を語り明かした喫茶店　庸二
店員の笑顔に財布緩みそう　登美
御百度を踏んだ返事がやっと来る　ゆきの
念願がやっとかなったあすきめし　由多香
合格もやっと自炊もやっとでき　艶子
待ちわびたサクラがやっと咲いた孫　風花
退職でやっと男の荷をおろす　邦昭
日本の朝が始まるお味噌汁　孝子
父さんの味噌汁だしが利いている　宏章
味噌汁を煮立てた事は内緒ごと　利枝
味噌汁が家風受け継ぐ朝の膳　黙光
海外の旅に味噌汁なつかしい　小生
味噌汁の味にほだされ五十年　千秋
味噌汁は昔ながらのエネルギー　仁子
露の薹香りうかべてお味噌汁　冨貴子
ママの目が三角になる通知表　せつ子
世が世なら三下り半の妻でいる　幸次郎
三脚に今日の幸せラップする　紀子
三っ指をついてお帰り言わせたい　雅通
第三位まあこの辺と腰据える　義弘
三界に家がなくても家の主　道子
お目出たい三三九度の披露宴　崇
三分粥妻の叱言も癒えてくる　みさを

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

忙しい手帳のぞいているマダム　重人
PTAマダムも今日は母の顔　正三郎
子を預け雇われマダム夜の顔　知香子

三味線も弾けてマダムはいける口　〆女
時雨るるやマダムが祈る神頼み　一笛
肝っ玉ママさんひとり店守る　慶子
梅干しの壺にまあるく亡母が棲む　哲也
梅の花貼って絵手紙いい香り　柳宏子
ファックスで不足か念を押す電話　周信
我武者羅に押すなと上司策をくれ　庸佑
横車押すと冷たい風が吹く　讒云児
春場所へドスコイ素足通り抜け　ただし
青春のニキビのぞいた姫鏡　寿美子
身内かばうキャリアが臭い芝居する　石舟
励ましがとても上手な古時計　しげお
また明日言うて帰りの電車事故　英子
押し花を手紙にはさむ女文字　正坊

川柳ねやがわ　江口度報

早耳が内定知らす甲子園　順三
地方へは出ぬ内定の軽い靴　小路
内定は手形のようで落ち着けず　博泉
縁談内定意中の人から知らされる　亜成
寒おすなあ今日は仏だん熱いお茶　一風
立春の寒気逝く人送る人　冬葉
寒気にも眠気にも勝ちサクラ咲く　修
寒気耐え全快祈る百度石　波留吉
列島は寒気一番雪化粧　三郎
警察が信用されぬ怖い国　忠央
信用して白いごはんを食べてます　とし子
信用と儲けは別と割り切られ　重三
助手席の妻チラチラと目を開ける　義雄
信用した彼の裏切り許せない　亜也子
信用をされてる自負が揺れはじめ　庸佑
信用を逆手に無理を言うてくる　恵子
大役を貴方ならばと任される　ルイ子
節くれたその手を信じ用立てる　光子
あの人のイニシャル増える日記帳　利昭
ひらがなが転がる孫からの葉書　茜
電話では喋るが手紙書けません　文秋
書き初めの素直に伸びた筆の先　かすみ
字配りを心にえがき筆を持つ　度
介護法つのる不安を抱く同居　高栄
健康で介護保険も他人ごと　たもつ
青い鳥でなかった結婚後の夫　礫
孫と祖父我が家の庭で雪まつり　日出子
着ぶくれて春まだ遠い蕗のとう　仁清
癖のある人とは見せぬ素直な字　洋
八十になれば意地などもう張らぬ　あやめ

川柳藤井寺　高田美代子報

マフラーをゆるめて春の音の中　アキ
日溜りに話が咲いて春プラン　喜代子
はよお越し春が桜の花つれて　利武
春そこに心の隙か風邪をひく　春蘭
春ですね踊る心を止められず　悦子
マネキンも春のレールに乗せられる　敦子
春場所の土俵荒れそう女知事　史郎
目に青葉　遊び心の春の乱　瑠美子
チョコは本命ふたりは春の真ん中に　美代子
春になったらぬくくなったら宮参り　桂子
点滴が春になればとなぐさめる　昭子
編み棒の先でかたちになった愛　和子
合鍵が愛の終りを知っている　花梢
妻の愛リュックに詰めて万歩計　恒雄
偶然が三度もあってきめた愛　昌子
この愛を捨てるときっと眠られる　夕花
めぐり会い切れてなかった愛の糸　志洋
愛もあり金もある人探してる　正一
淋しさをつなぎ合わすと愛になる　扶美代
母の海愛のイカダが岸にある　終一
らくらくと求愛できた夢の中　かつみ
波ひとつ寄せて崩れた砂の城　六点
らくらくと愛のブランコ漕ぐ二人　龍一
らくらくに男の知恵は錆がつく　修六
ヘルパーを頼りらくらく母を看る　シマ子
らくらくと茶髪が担ぐ車椅子　婦美枝
らくらくに慣れて近道ばかりする　和樹
覚悟した日からくらく海は凪ぐ　鐘造
自己破産やっとらくらく眠られる　大八
二代目のベンツはいつも光ってる　重人

川柳クラブわたの花　吉村一風報

金渡し女切符を買わされる　一道
ピッチャーの人気松坂ひとりじめ　ますみ
人気ある絵馬重なりて天満宮　トシエ
先生の真似が上手で人気者　まさと
駅弁の幸せ食べるフルムーン　いつふみ
こんにちはおおきに温いご挨拶　春江
行列の人気の店でよもぎ餅　知佐子

廻る寿司人気ないネタよく廻る　美代子
賞味期限切れた夫婦にない会話　民子
女性知事マドンナ的の人気呼ぶ　明
携帯の人気のかげで泣くテレカ　八寿子
チョコの数今年も彼にぬかされる　宏
たこやき屋黙黙焼いてでた人気　剛治
急に明るくなってぼちぼち幕が下り　ミツ子
無理をした希望の椅子は転げ落ち　道子
いびつでも孫の人気は杵の餅　君江
今日だけの人気者です豆がとぶ　春子
茶の間ではまだまだ人気孫がとり　一風
朝ドラの人気が上がるまた明日　幸枝
潮時は花の盛りを弁える　隆盛
人気とは見ると聞くとはおおちがい　美千子
鼻筋が通って人生狂わせる　恭一
クラスでは人気があるが友がない　奈良司
ノックして表から入り裏から出　友甫
ふきのとう鼻先できく春の音　正純
感情で叱って詫びる子の寝顔　朝子
外ほどの人気うちではありません　鬼遊

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

重ねてる不義理が肩にのしかかる　きよし
義理チョコに人情一個頂いた　力誠
許されぬ罪へ無心な風車　大吾
不義理のまま風花を見る残尿感　ヒサ子
惚れっぽい女に冬眠などはない　北歩
冬眠に自惚れている北の春　順風
餞別に本音は入れず封をする　龍人
微笑んですべてを許す花枢　慕情
台本の義理と言う字に行き詰まる　銀波
留守電に〝只今二人冬眠中〟　ふさゑ
許されて浄土参りの白い道　花匠
頂点でふるいに掛ける義理もあり　愁女
廃坑のトロッコごろり錆びたまま　ツネ
冬眠をさせてワインの味が冴え　井蛙
鱗いちまいポトリ冬眠から覚める　黙人
少しづつ十二単の義理を脱ぐ　和香子
ゴム袋義理もつまって捨てられる　隆樹
義理人情欠かせぬ人が肩にある　花峯
一日も酒を欠かさぬ胃潰瘍　一花
救急車着いたところに義理がある　劦
義理欠いた石をいくつも溜めている　五楽庵

堺川柳会　河内　月子報

誤診とは人の命のはかなさよ　春蘭
札束に叩かれ変化する打算　紀美女
氷山の一角誤診顔を出す　半銭
魚たべ椎茸たべて皆元気　八千代
釣人の苦労話も料理する　なぎさ
啓蟄に私の目玉動き出す　伽羅
つくし菜の花くまなく歩く遼太郎　千代
図星にはしないで少し泳がせる　楓
小さな嘘さとられ急にうろたえる　りつえ
正直が過ぎて相手の思うつぼ　梓
土壇場で心変りの赤い花　冬虹
乱反射する能面の七変化　泰子
梅園で日向ぼっこの老い二人　深雪
松屋町に図星の人形勢揃い　金三郎
はっきりと物言う人で頼られる　みつこ
岩田帯婚前旅行のことわかり　東雲
その内に誤診保険が生まれそう　天笑
図星ですっぽ押えられ動けない　日の出
図星突く言葉でワサビきかしとく　錦
化粧する男性女性化する時代　紫
佃煮をくつくつ炊いて両隣　美波
政変が一夜で変える敵味方　玄也
警察の記者会見は七変化　朋月
図星やが負けず嫌いでハイ言えず　さくら
恋は図星でホワイトデーから春　美代子
痛いとこ突かれてからの不整脈　つづや
飲みすぎたでしょうとかかりつけの医者　五月
また痛いところを突いてきた笑顔　一二三
鼻ぐすり効いてオホホと上機嫌　月子
尾行してやっぱり図星捕まえた　春

横浜あおば川柳会　菱田　満秋報

切れかかる子に道草の手が招く　徳三
こんにちはみの虫に会う春の午後　道子
捨て犬に振りまわされた通学路　政勝
紅白も目立つ衣裳で評価され　裕峰
夫婦独楽　紆余曲折の人生詩　句多留
ニュールック迷ったほどは似合わない　為佐子
テープから虫の声聞く都会の子　良子
一〇〇点が道草せずに帰宅させ　亜希子
高額の寄付は太字で貼り出され　街湖
騒がしい声をたどれば女づれ　かづ子

道草が消えて乾いた通学路　八重子
雪積もる母は炬燵で本の虫　笑子
参観日落着きなさで子が目立つ　嘉信
目立つこと嫌だが頭光りだす　敏
六ヶ月お色直しはせぬ新婦　あらた
地下鉄を出れば見馴れぬ町の中　雅子
翔ぶ夢を抱いて生涯蟻でいる　あかり
子の幸を願い命名まとまらぬ　純子
控え目で最後はいつもまとめ役　ふみ
道草が童話の中に生き続け　早智
夕刊の一面占める事故ニュース　サト子
鉛筆の倒れた方へ行くとする　かず枝
脱サラか残るか迷うコップ酒　和可
啓蟄に挨拶の蝿叩けない　絹子
バストでは負けていないと自負してる　省子
岩かげに咲いても蝶をひきつける　鈴美
決断を妻の助言が踏み切らせ　潮華
一旦は決めても鏡見て迷い　満秋

富柳会　池森子報

やがてやがて全て無になる時が来る　和子
水仙の葉のたおやかに雪を溜め　高栄
冬の陽を通す障子の穴一つ　春蘭
地下二階一直線にチョコレート　夕花
二人で踊ろう短い夢も長く見る　東雲
絵に描いた餅を並べて春が立つ　ひろこ
落ち椿風の無常は問わぬまま　信子
世間並の嵩にして出すゴミ袋　あかり
夢すべて断って命と向い合う　紅紫朗
節くれた手にやんわりと票を積む　登子
切り抜けた竹の節目を凜と聞く　三和子
上司は言うすべて任せていましたと　一夫
フレームに秀才並べている花屋　潤子
ひそと咲く路地のネギ坊主と遊ぶ　晴美
恋人の白しんしんと冬の天　欣之
嗚呼すべて終った骨だけになった　初太郎
青竹の節目の器夢を盛る　夕子
やんわりと目を見て諭すテクニック　義清
筋書きの通りに行かぬので困る　みきお
風の詩胸に女は母になる　かなこ
頭から爪先までピエロになる　和歌子
生き方を変える一行拾い読み　正美
北風が知ってる筈の風の詩　信博
なにもかもスローになって風寒し　千歩
失敗の節目ふしめが痛み出す　花梢
私を丸ごと許すぼたん雪　アキ
立春を節目に山が笑い出す　冬虹
節目など気にせず暮らす呑気者　昭水
小豆粥コトコト許すことばかり　秋雄
節目には真っ赤な薔薇が咲いていた　森子

ローズ川柳会　山崎　君子報

再出発願う仲間が居てくれる　てる
花達とおしゃべりつづく散歩道　ミサヲ
寒いのに若芽うれしい春つげに　キク子
再出発見えない錆を削ぎ落とす　みつ子
赤ちゃんがしゃべり出したよおくんおくん　藍
もっとお喋りすればよかったお父さん　哲子
あこがれの一人暮しに出発し　トミヱ
しゃべったら駄目と言うからしゃべりたい　貴代子
優勝の後黙々と貴闘力　まさお
立て板に水要点を聞き漏らす　澄子
出発をした子へ祈るほかはなし　いわゑ
常識の幅が広くて戸惑いぬ　武庫坊
出発に言うておきたいことがある　年代
門出する子へ不器用な父無口　はつ絵
菜の花が出発送る無人駅　君子
荒海とおしゃべりをするポエムなり　義子
子の出発見送る朝の陽がまぶし　笑女
出かけても何時か一人で下りる駅　雅子

第8回 風のまち川柳大賞

題　「風」
選者　大野風太郎・橘高薫風・斎藤大雄
尾藤三柳・森中惠美子
応募規定　官製ハガキ1枚に1人3句まで。住所・氏名・年齢・電話番号をハガキの裏面に明記。
締切　5月31日（水）当日消印有効
応募先　〒030-1393 青森県蟹田町役場「第8回風のまち川柳大賞」係
賞　大賞―句碑建立・準賞・特別賞他

おねがい
大会・吟行など本誌掲載の原稿は**前々月の23日**までにお願いします。
（例・7月号―5月23日までに）

私の読書ノート

閑人閑話

田中正坊

昨年来、仕事を整理して余暇ができたので折りにふれて本誌にエッセイを書こうと思い立ち、「閑人閑話」というタイトルまで決めて、二編書いたが、後がつづかない。かつて〝売文業〟だった悪い癖で、締切りがないとついつい怠けてしまうが、今回、編集部から依頼があったのを機に筆を執ることにした。

いたってルーズな一面、記録癖もあって一九七四年以来、欠かさず一冊の手帳に読書ノートを書きとめている。ノートと言っても、月ごとに読んだ本の書名と著者・出版社名を書くだけの簡単なことだから長続きしたのかも知れないが、記録した冊数はこの二十五年間で二千を少し上回る。これは完読した単行本にかぎり、雑誌や資料は含まない。

ぼつぼつ物忘れをするようになり、同じ本を買ったり借りたりすることが重なって、それを防ぐことが目的だったが、こうして記録してみると、本来の目的以外に私自身の読書量や読書傾向などが分かってくる。ある意味では、一つの〝自分史〟とも言えるだろう。

量的な面では、一九七〇年代は月に五冊程度、年間六〇～七〇冊ぐらいだったのが漸増して、一九八〇年代は八〇～九〇冊となり、一九九〇年には年間一〇〇冊を越すようになった。これは年金生活に入って時間的にゆとりが生れたこと、そして川柳を始めてから句集などを読むようになったことによる。

質的な面では、〝現役〟だった一九七〇年代は、教育関係の新聞・出版に従事していたことから教育問題、また、日中友好協会の役員をしていたので中国問題が多い。仕事で教育についてのコラムやエッセイを書いていたが、執筆と読書はアウトプット（出力）とインプット（入力）の関係にあり、たえず見たり聞いたり読んだりしていないと、いわゆるネタが切れてしまう。シリーズの『日本の教育』や『教育の森』などをじっくり読んだことを記憶している。

縁あって川柳を学びはじめた一九八〇年代後半の一時期は短詩型文芸に集中している。構造社の『川柳全集』（十冊）、朝日文芸文庫の『現代俳句の世界』（十六冊）や岩波文庫の『柳多留』『武玉川』などを読みあさった。川柳に関する文献については、いずれまとめて紹介したいと思っている。

これは私の持論だが、読書はすべて何かに役立てるためにするのがいいとは思わない。学習・研究や実利・実用で読むのはもとより必要だが、趣味としての読書もあっていいと思う。私はいわゆる〝雑学〟で、手あたり次第に何でも読むが、〝兵役〟で言えば後備役に入った昨今では、もっぱら楽しむための読書にウエイトをおくようにしている。

読みごたえのあったのは、塩野七生の『ローマ人の物語』（七巻）、司馬遼太郎の『街道をゆく』（四十三冊）で、『滄海よ眠れ』（六冊）以来、とりつかれている澤地久枝の著作はほとんど読みつくしている。どちらかと言えば私は、新聞記者の根性が抜けないからか、ルポルタージュやノンフィクションが好みらしい。

しかし小説もやはり捨てがたい。古典的な名作は若い時に一とおり読んだので、現代の作家と言うことになるが、時代物では山本周五郎・藤沢周平・白石一郎、その他では新田次郎・井上ひさし・高橋治・清岡卓行・宮城谷昌光・浅田次郎を挙げると、古いと笑われるだろうか。ここらでどうやら紙数が尽きたようだ。

柳界展望

★NHK学園発行の『川柳春秋』57号が4月1日発行された。本社参与の小林由多香氏（鳥取市）が「この人に聞く」欄に、「わたしの柳号由来」に河内天笑理事長、「私の川柳作法」欄に同人中原みさ子さん（鳥取県）の記事が掲載された。なお、NHK学園全国大会の平成11年度文部大臣奨励賞は岩手県の及川洋一郎氏の「ふるさとに富士に負けない山がある」に決定した。

★第1回井笠川柳会笠岡大会は**6月17日**（土）に岡山県笠岡市保健センターで開催。開場10時・締切11時・開会1時・閉会4時。当日宿題「雑詠」森中惠美子選「飯」小松原爽介選「石」梶川雄次郎選。事前宿題「島」八島白龍「港」濱野奇童「風」木下草風「魚」杉原正吉「腕」高木勇三。会費2000円（昼食・発表誌呈）。事前宿題は各題共2句並記。住所・氏名・電話番号明記、2000円と共に**5月末日**必着。投句先・笠岡市笠岡507—68井笠川柳会宛。

▽人事往来△

■3月11日、大阪市四天王寺本坊の文化講座に「大阪の川柳」と題して薫風主幹が講演した。出席150名。

■3月19日、鳥取県主催の「一県民一文化」の趣旨の経過報告と展望を語る会に出席のため、薫風主幹は倉吉行き。その後、米子の博愛病院へ林荒介さん、また翌20日には石垣花子さんを広江病院にお見舞いした。

▽同人消息△

■両川洋々氏（鳥取市）は1月28日、鳥取市湖山小学校6年生を対象に川柳教室を開いた。川柳の成り立ちや作り方を学び、62人が思い思いにユーモアあふれる句を披露した。

▽出　版△

■日川協会長仲川たけし氏は『21世紀へ駆ける日本川柳の群像』を発刊。四六判218ページ・定価1500円。全日本川柳協会の歩みと山田良行前理事長の追悼を骨子として纏められた。葉文館出版発行。

▽御芳志御礼△

■辻白渓子氏御遺族から供養として金一封を拝受。

▼訂正とお詫び▲

■**3月号**＝P4（川柳塔）上段12行目貨弊→貨幣

▼訃　報▲

■園山泰助氏（同人園山多賀子さん夫君・島根県）は2月14日、肺炎のため死去。95歳。

吉本川柳

第10回「横」選評　河内　天笑

投句先　〒542-0075 大阪市中央区難波千日前11—6 吉本文芸館（06—6643—7799）

投句締切　**5月11日**（木）（便箋に3句以内・80円切手5枚同封）

没句評句会　**5月26日**（金）午後6時　吉本文芸館

大阪川柳の会

とき＝**6月2日**（金）17時開場　**ところ**＝サンケイビル本館3階322号室　**題と選者**＝切手・石川勝△芯・久保田元紀△プラス・奥田みつ子△切る・礒野いさむ　各題2句　席題なし　会費800円　18時締切　各題秀句に産經新聞社賞

新同人紹介

江原秀夫
—紫香・柳宏子・諷云児推薦

高島啓子
—薫風・鬼遊・希久子・義推薦

（各書の内容見本進呈）

川柳表現辞典

田口麦彦著・46判上製箱入
税込**価三五七〇円**送料340円

四年間の歳月を費して、**現代川柳三〇万句**より**六九二七句**を選び、**一五四二語**の項目、解説内の**八三九語**をあげて、**語の意味**、難解な言葉、新語等を説明。実作例句で**川柳表現の方法と技術**を示した。

川柳技法入門

田口麦彦著・川柳の作り方
定価(税込)**一九八〇円**送料310円

川柳上達の技術を**九二五句**の引例で分りやすく説明。**添削・推敲**は一句の完成まで、風刺・**ユーモア・リズム**・比喩・**イメージ**形成等

時事川柳入門

田口麦彦著・基本と方法と技法
定価(税込)**一八三五円**送料310円

現在を17音で切りとる諧謔精神と作り方の**方法・技術**を説明。新聞雑誌投稿句、**サラリーマン**川柳の**即興性**など引例**九五三句**で解明。

現代川柳入門

田口麦彦著・実作教室、慶弔句
定価(税込)**一九八〇円**送料310円

川柳の基本から作句の心構え、自由に人間と社会を詠む方法を**現代の言葉で現代的**に例句をあげて説明。**全力で書き**おろした入門書。

川柳の書き方

松橋巨山著・川柳書マニュアル
定価(税込)**三八七三円**送料340円

はじめて筆を持つ人から、中級の技術まで修得。自由に**色紙・短冊・扇面・団扇・掛け軸**が書ける。**一七〇の手本**と図表、**下敷き六枚付**

〒170-0003 東京都豊島区駒込6丁目6-23 **飯塚書店** 電話 03(3918)2090 振替 00130-6-13014

第一回 時計台ビール川柳入選句発表

「時計台」

川柳塔社 理事長 河内天笑 選

ビール飲む約束で逢う時計台　北見　柳沢花王子
旅人を詩人にさせる時計台　大船渡　高橋　正
時計台ふたりで立てばリラの風　宝塚　嵯峨根保子
絵手紙にしあわせそうな時計台　逗子　神戸みず帆
時計台ビルの谷間で息ひそめ　札幌　片山　荘山
巣立つ子へエールを送る時計台　市川　佐野　悟柳
時計台あるこの街に住み慣れる　堺　長江　時子
左手にビール右手にアンビシャス　新潟　渡部　栄
親友のひとりと思う時計台　米子　政岡日枝子
時計台街のエクボになっている　藤沢　高橋里江子
地ビールの泡の向うに時計台　奈良　阪本　高士
時計台ビールの泡に虹が見え　日野　石井　麻美
春眠をさせてあげたい時計台　堺　神原　文
時計台僕にも彼女できました　和歌山　古久保和子
団体のアゴ吊りあげる時計台　大和高田　板垣　孝志
時計台懺悔がしたくなってきた　米子　木村富美子
時計台慈母観音の様に立ち　長野　漆間　富治
人間のエゴを見下す時計台　柏　木内　紫幽
時計台コート脱いだら会いに行く　明石　沼尾美智子
さびしんぼう同士が出遭う時計台　弘前　高瀬　霜石

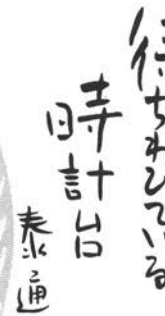
準特選

時計台百年先を見ています　堺　上野　楽生
時計台ビールがくれる蜃気楼　岐阜　武藤　敏子

特選

花だより待ちわびている時計台　宮崎　谷川　泰通

第二回「ゼロ」ハガキに一句
出句締切5月25日



クール便運賃表

1ケース6本入（1〜3ケース）

北海道	600円
東北	1,100円
関東・信越	1,200円
北陸・中部	1,300円
関西	1,400円
中国	1,500円
四国	1,600円
九州・沖縄	1,700円

◉川柳応募者に限り2割引!!
1ケース￥3,000を2,400円
応募はがきの表面でご注文下さい

〒060-0051
札幌市中央区南一条東7丁目15-16
時計台ビール株式会社

句会名	日時と題	会場と投句先
高槻川柳サークル卯の花	18日(木)正午から 鞭・悟る・交差点・かくれる	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3—8—8　川島諷云児
川柳会梨花	20日(土)午後1時から 発表・慣れる・バケツ・雑詠	鳥取県民文化会館 第2会議室 （鳥取駅から徒歩10分・バス5分） 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮本方　坂田和歌子
城北川柳会	20日(土)午後1時から ジャンプ・叫ぶ・嘘・雑詠	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8　神夏磯典子
岸和田川柳会	20日(土)午後1時半から 苦心・景品・高級・先取り	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610—85　芳地狸村
川柳ねやがわ	21日(日)正午から **25周年記念大会** 粘る・弾む・美人・余生・味・万歳(バンザイ)	**寝屋川市立総合センター4F** 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
岬川柳会	21日(日)午後1時半から 熱・ベテラン・やれやれ	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
京都塔の会	**22日(月)春の吟行句会** 茶・カリスマ・好意 当日雑感A・B	集合午前11時　地下鉄「小野」駅（本号P.119参照） 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔みぞくち	22日(月)午後7時半から バラ・初夏・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々
南大阪川柳会	24日(水)午後6時から 最高・場外・素敵・静養	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブわたの花	26日(金)午前10時から 慕う・腰・掃除	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市川柳同好会	27日(土)午後6時から 美しい・凡人・渡る・数	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
川柳ふうもん吟社	28日(日)午後1時から 火の手・ニュース・さっぱり	JR鳥取駅構内　シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2　植田一京
はびきの市民川柳会	28日(日)午後1時から さまよう・やっと・マダム 「利用」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏

川柳塔東大阪カルチャー教室　5月25日(木)2時から　布施駅前市民プラザ
「横」3句—5句・〒593-8305 堺市堀上緑町2・16・3　河内天笑宛

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

5月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	4日(木)午後1時から 気配・膝・補う	船橋フロムワン（船橋商店街内） 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼　崎 いくしま	5日(金)午後1時から 蝶・手・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	6日(土)午後1時から 粘る・ひかえめ・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池　森子
川柳塔 みちのく	6日(土)午後4時から スピード・笑顔・汚れる	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳塔 唐津支部	7日(日)午後1時半から 角(かど)・恵み・隠す	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
西宮北口 川柳会	8日(月)午後1時から 葉・握る・そろそろ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515 山本義子
ほたる 川柳 同好会	9日(火)午後1時から 財布・悟る・渦	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1—7—5 田辺正三郎
尼　崎 尾　浜 川柳会	9日(火)午後1時半から ど忘れ・ほのぼの・自由吟	尼崎市立立花公民館　尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス㊽番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47 田辺鹿太
八尾市民 川柳会	10日(水)午後6時から さんざん・通う・爪・率直	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
堺川柳会	11日(木)午後1時から 近づく・手応え・(折り句)ひとつ	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3 河内天笑
川柳塔 まつえ	**13日(土)午前10時から** 溢れる・糸・続く・花道 活気・爽やか・玩具	**復刊30周年記念川柳大会**（4月号P.49参照） **松江市千鳥町　ホテル白鳥** 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川柳塔 打　吹	13日(土)午後1時から せっかち・精力・兄	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔 わかやま	14日(日)午後1時から 現場・きょろきょろ・カード (ユーモア・笑いのある句)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良
もくせい 川柳会	15日(月)午後1時から スマイル・練る・天井 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊

編集後記

★有珠山が噴火した。まだこれから大噴火が起こるかも知れず予断を許さない。避難所の人々はさぞ大変なこととお察しする。どうぞこれ以上、被害が広がらないよう祈ること切である。

★阪神・淡路大震災から五年経った今も街のあちこちに残っている更地。中に一軒、被災したままの状態で残っている家がある。外周りは石垣も塀も八割方しっかりしているようであるが中の家屋は完全につぶれているのが垣間見える。何故五年以上もそのままなのか知る由もないが、前を通る度に財産争いのようなドラマを想像するのは、私一人ではあるまい。

★拙吟で恐縮だが二、三年前に「迷彩服戦も知らずヤングたち」という句を作った。迷彩服とは自衛隊員が着ていて、すぐ戦争に結びつくので、あまり街なかで見たくないと思うが、若い人は単なるファッションだと割切って屈託がない。

★端午の節句に兜を飾って気がついたのだが、鎧・兜こそ戦そのものではないか。男の子は雄々しくあれという願いをこめて昔から飾られたものだろうが、私は毎年、兜は飾りながら街で見かける迷彩服に神経を尖らせるのは、何か矛盾しているようである。

★3月25日、オール川柳賞記念大会で川上大輪氏が大賞受賞したことは別ページに掲載したが、川上富湖さんの「読者柳壇賞」をお母さんそっくりの長女祐貴子さんがお母さんの上着を着て、富湖さんに代って賞状を受けられた。（み）

☆吹けば飛ぶよな将棋の駒に―二月に観た芝居「王将」は若手演出家による新企画で若い層に受けていて、充分楽しめるものであった。

☆主役の坂田三吉は、副理事長岳人氏の長男の板尾創路さんであったが、難しい役を、気負いなく演じておられ、好感がもてた。将来が楽しみな好青年である。

☆シェークスピアの戯曲の中に「この世はすべて舞台　人間は人生という舞台の主役、登場してやがて退場する」というセリフがある。

☆私の母92歳は、今まさにこの世の舞台の最終場面にいる。身近な観客の二人（兄と私）は、主役の人生に係ることで議論している。母の体調が悪くなったので病院嫌いなのに無理やり検査入院させるか、希望通りに在宅のまま、幕が下りるのを待つか。どちらが本当の孝行であろうか、大変な難問である。結局は、母を説得して入院させたところ、腸の病気がみつかり、やむを得ず、開腹手術となった。高齢のリスクは大きくて、あとは天命を待つばかりである。母には不本意であったらしく、恨み事を言う。子として手を尽したのだからと自分を慰め、でき得る限りの看取りを自分に課すつもりでいる。（希）

どこどこひと

何処で？いつ？

斎藤茂吉は自宅の庭をうろうろしながら呻吟していたと聞きましたが、皆さんはどこで、いつ作句なさっておられるのでしょうか。

キッチリと机に向かって、という友人もいますが、私の場合、昼間は仕事の関係でそんな余裕はなく、晩酌の後は思考力ゼロですから軽い本を読むのが精一杯。

明け方に目が覚めてから布団を蹴って起き上がるまでの小一時間が、今の私の作句時間で、熟睡の後は脳も冴えているのか、次々と想いが湧いてくる？ことも たまにはあります。

朝の散歩時間もいいのですが、健康のためにと早足で歩くと脳が空っぽになって、これまた集中力ゼロになってしまいます。

あなたは？句会場に来てから？

（新家　完司）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**7月号**）　地名　　姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人 ・ **誌友**　マルで囲んでください。

作品募集

7月号発表（5月15日締切）

川柳塔（8句）　橘高薫風選
水煙抄（8句）　河内天笑選
愛染帖（3句）　波多野五楽庵選
茴香の花（3句）　宮西弥生選
課題吟（3句）「角」　大谷幸次郎選
「恵み」　伊藤寿美選
「隠す」　楠見章子選
初歩教室「シーズン」（3句）　吐田公一担当

8月号

課題吟「聞く」「訪ねる」「泥」
初歩教室「軽い」

栞忌　本社5月句会

とき　5月8日（月）午後5時半
ところ　アウィーナ大阪　4階
天王寺区石ケ辻町19－12　電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分
兼題「ネクタイ」　門谷たず子選
「あわてる」　籾山隆盛選
「男」　宮西弥生選
「味方」　板尾岳人選
「挨拶」　橘高薫風選
席題　1題　当日発表（各題2句以内）
会費　1000円　投句料　500円

本社6月句会　7日（水）予定
兼題　「ほどほど」「ベール」「切る」「保険」「冗談」

夜市川柳募集

第12回「満」　橘高薫風選
ハガキに3句　5月末締切
投句先　〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・茴香の花欄・一路集（課題吟）および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価　六百円（送料84円）
半年分　四千円（送料共）
一年分　七千九百円（同）
二〇〇〇年（平成十二年）五月一日発行
編集兼発行人　橘高薫
印刷所　美研アート
〒545-0005
大阪市阿倍野区三明町二－一〇－一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（六六）六六一－六九一四番
振替　〇〇九八〇－五－三三六八番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可

第24回 全日本川柳二〇〇〇年東京大会

日時 平成十二年六月十一日（日） 午前十時開場

場所 日本青年館大ホール
〒一六〇-〇〇一三 東京都新宿区霞岳町十五番地
☎ 〇三-三四〇一-〇一〇一（代）

交通案内
□別紙交通案内図参照
JR信濃町駅より徒歩7分
JR千駄ヶ谷駅より徒歩7分
地下鉄銀座線・外苑前駅より徒歩5分

宿題 第一部（事前投句・五月十日締切）
「飛ぶ」 福岡 伊豆丸 竹仙 選
「ファッション」 三重 木野 由紀子 選
「柱」 神奈川 鈴木 柳太郎 選
3・5×18㎝の句箋一枚に一句宛記入。
各題二句、無記名、封筒に住所、氏名明記、投句料一、〇〇〇円（定額小為替、現金書留）同封して郵送のこと。

投句先 〒332-0015
川口市川口一-三-一-四〇一 松岡葉路方
日川協東京大会事務局 宛
電話・FAX 〇四八（二二二）八〇八四
郵便振替口座 〇〇一〇〇-七-一七六九八〇

宿題 第二部（当日投句・十一時三十分締切）
「東京」 東京 加茂 如水 選
「起点」 兵庫 小松原 爽介 選
「ゼロ」 北海道 斎藤 大雄 選
「やさしい」 新潟 大野 風柳 選
各題二句、各部各題とも未発表に限る。

第二次選者
仲川 たけし・吉岡 龍城
礒野 いさむ・橘高 薫風
藤沢 岳豊・大木 俊秀
竹本 瓢太郎

会費 四、〇〇〇円（昼食・記念品共）

表彰 ① 文部大臣奨励賞 一名
② 参議院議長賞 一名
③ 川柳大賞 一名
④ 大会賞 十一名

大会参加のご案内

観光 平成十二年六月十日（土）
隅田川下り 浅草～日の出桟橋
別紙観光案内参照 四、〇〇〇円

前夜祭 平成十二年六月十日（土） 午後六時

場所 日本青年館中ホール（立食パーティー）

会費 七、〇〇〇円

宿泊 平成十二年六月十日（土）
□日本青年館ホテル和室（相部屋）
宿泊費 八、〇〇〇円（朝食付）
部屋割りは、事務局から御案内。 その他のお問い合わせは、事務局までご連絡下さい。

申込締切 （四月末日必着 厳守）
別紙申込書に内容をご記入の上、合計額を送金して下さい。

申込先及び送金先
〒332-0015
川口市川口一-三-一-四〇一 松岡葉路方
日川協東京大会事務局 宛
電話・FAX 〇四八（二二二）八〇八四
郵便振替口座 〇〇一〇〇-七-一七六九八〇
（社）全日本川柳協会 大会委員長 礒野 いさむ
全日本川柳東京大会実行委員会
大会実行委員長 竹本 瓢太郎
〒190-0002
立川市幸町四-五二-一-七-四〇五
電話・FAX 〇四二（五三七）三八〇四
＊宿題第一部（事前投句）先が変更されております。ご注意下さい。

麻生路郎の幻の名著復刻

川柳とは何か

―川柳の作り方と味い方―

麻生アート発行・橘高薫風序・B6判・266頁
美装上製本・頒価 2000円・（〒340円）
お申し込みは 川柳塔社事務所へ

雑誌 05703―5